別記様式第２号（その１の１）

基　本　計　画　書

基　　本　　計　　画

事　　項	記　　入　　欄	備　　考
計　画　の　区　分	学部の設置	
フ　リ　ガ　ナ 設　置　者	ｶﾞｯｺｳﾎｳｼﾞﾝ　ﾅｺﾞﾔｶﾞｸｲﾝﾀﾞｲｶﾞｸ 学校法人　名古屋学院大学	
フ　リ　ガ　ナ 大　学　の　名　称	ﾅｺﾞﾔｶﾞｸｲﾝﾀﾞｲｶﾞｸ 名古屋学院大学　(Nagoya Gakuin University)	
大　学　本　部　の　位　置	愛知県名古屋市熱田区熱田西町1番25号	
大　学　の　目　的	本大学は、学校教育法、および教育基本法の規定するところに従い、広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、キリスト教主義に基づいて人格を陶冶することを目的とする。	
新設学部等の目的	国際文化学部は、広く世界の多様な文化を学び、世界が直面している地球環境の改変や異文化・異民族問題、あるいは宗教対立や政治的紛争が絶え間なく生じている現状に対応できる実践的な能力を有する人材を育成することを目的とする。	

新設学部等の概要

新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	年	人	年次 人 年次	人		年　月 第　年次	
国際文化学部 [Faculty of Intercultural Studies]							
国際文化学科 [Department of Intercultural Studies]	4	100	—	400	学士(国際文化)	平成27年4月 第1年次	愛知県名古屋市熱田区熱田西町1番25号
国際協力学科 [Department of International Cooperation]	4	50	—	200	学士(国際文化)	平成27年4月 第1年次	愛知県名古屋市熱田区大宝三丁目101番地
計		150	—	600			

同一設置者内における変更状況（定員の移行，名称の変更等）

学部学科設置
現代社会学部　現代社会学科　(150)　(平成26年4月届出)
スポーツ健康学部　こどもスポーツ教育学科　(50)　(平成26年5月認可申請)

定員変更
経済学部
経済学科　〔定員減〕　(△50)
〔3年次編入学定員減〕　(△10)
商学部
商学科　〔3年次編入学定員減〕　(△ 5)

学生募集停止
経済学部　総合政策学科　(廃止)　(△150)
外国語学部　中国コミュニケーション学科　(廃止)　(△ 50)
外国語学部　国際文化協力学科　(廃止)　(△ 50)
※平成27年4月学生募集停止

教育課程

新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数
	講義	演習	実験・実習	計	
国際文化学部 国際文化学科	148科目	8科目	94科目	250科目	124　単位
国際文化学部 国際協力学科	139科目	8科目	93科目	240科目	124　単位

概要教員組織の

学部等の名称		専任教員等						兼任教員等
		教授	准教授	講師	助教	計	助手	
		人	人	人	人	人	人	人
新設分	国際文化学部　国際文化学科	8 (8)	2 (2)	4 (3)	0 (0)	14 (13)	0 (0)	40 (30)
新設分	国際協力学科	4 (4)	1 (1)	4 (4)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	40 (30)
新設分	計	12 (12)	3 (3)	8 (7)	0 (0)	23 (22)	0 (0)	42 (30)

教員組織の概要	既設分	経済学部　経済学科	12 (13)	11 (11)	10 (10)	0 (0)	33 (34)	0 (0)	37 (37)	
		現代社会学部　現代社会学科	9 (9)	4 (4)	4 (4)	0 (0)	17 (17)	0 (0)	35 (15)	
		商学部　商学科	8 (8)	7 (7)	5 (5)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	25 (25)	
		商学部　経営情報学科	8 (8)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	21 (21)	
		法学部　法学科	11 (11)	1 (1)	2 (3)	2 (2)	16 (17)	0 (0)	36 (35)	
		外国語学部　英米語学科	9 (9)	2 (2)	3 (3)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	45 (45)	
		スポーツ健康学部　スポーツ健康学科	6 (6)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	14 (14)	
		こどもスポーツ教育学科	5 (5)	4 (4)	4 (4)	1 (1)	14 (14)	0 (0)	29 (11)	
		リハビリテーション学部　理学療法学科	8 (8)	3 (3)	3 (3)	1 (1)	15 (15)	2 (2)	22 (22)	
		計	76 (77)	38 (38)	37 (38)	4 (4)	155 (157)	2 (2)	178 160	
	合　計		88 (89)	41 (41)	45 (45)	4 (4)	178 (179)	2 (2)	181 (162)	

教員以外の職員の概要	職　種	専　任	兼　任	計	
	事務職員	83人 (83)	32人 (32)	115人 (115)	
	技術職員	3 (3)	0 (0)	3 (3)	
	図書館専門職員	4 (4)	7 (7)	11 (11)	
	その他の職員	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	計	90 (90)	39 (39)	129 (129)	

校地等	区　分	専　用	共　用	共用する他の学校等の専用	計	
	校舎敷地	144,021.00㎡	0㎡	0㎡	144,021.00㎡	[名古屋校地] 借用面積:16,236.00㎡ 借用期間:平成17年7月から50年
	運動場用地	81,632.00㎡	0㎡	0㎡	81,632.00㎡	
	小　計	225,653.00㎡	0㎡	0㎡	225,653.00㎡	
	その他	181,773.53㎡	0㎡	0㎡	181,773.53㎡	
	合　計	407,426.53㎡	0㎡	0㎡	407,426.53㎡	

校舎	専　用	共　用	共用する他の学校等の専用	計	
	74,102.73㎡ (74,102.73㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	74,102.73㎡ (74,102.73㎡)	

教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
	95室	82室	27室	6室 (補助職員 0 人)	8室 (補助職員 0 人)	大学全体

専任教員研究室	新設学部等の名称	室　数	
	国際文化学部	23室	

図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	
	国際文化学部	111,019[32,647] (111,019[32,647])	1,060[495] (1,060[495])	400[400] (400[400])	1,898 (1,642)	1612 (1,612)	0 (0)	届出学部全体
	計	111,019[32,647] (111,019[32,647])	1,060[495] (1,060[495])	400[400] (400[400])	1,898 (1,642)	1,612 (1,612)	0 (0)	

図書館	面積	閲覧座席数	収納可能冊数	
	5,907.13㎡	778	550,000	大学全体
体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要		
	6,711.52㎡	野球場1面、屋内ﾌﾟｰﾙ1面、ﾃﾆｽｺｰﾄ17面、ｺﾞﾙﾌ練習場1面他		

経費の見積及び維持の概要		区　分	開設前年度	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次	
	経費の見積り	教員１人当り研究費等		680 千円	680 千円	680 千円	680 千円	— 千円	— 千円	届出学部全体 図書費にはﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ等の整備費(運用ｺｽﾄ)を含む。 共同研究費については大学全体の中で審議・決定する為に記載額は大学全体。
		共同研究費等		3,697 千円	3,697 千円	3,697 千円	3,697 千円	— 千円	— 千円	
		図書購入費	5,270 千円	5,270 千円	5,270 千円	5,270 千円	5,270 千円	— 千円	— 千円	
		設備購入費	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	

学生１人当り納付金	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次
	1,370 千円	1,090 千円	1,090 千円	1,090 千円	— 千円	— 千円

学生納付金以外の維持方法の概要：補助金収入、手数料収入、資産運用収入、雑収入等

既設大学等の状況

大学の名称	名古屋学院大学								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
経済学部			3年次			0.96			
経済学科	4	300	10	1,220	学士(経済学)	1.00	昭和39年度	愛知県名古屋市熱田区熱田西町1番25号	
総合政策学科	4	150	—	600	学士(経済学)	0.91	平成12年度	同　上	平成24年度より政策学科を名称変更
商学部			3年次			1.10			
商学科	4	200	5	810	学士(商学)	1.12	平成4年度	同　上	
経営情報学科	4	100	—	400	学士(商学)	1.07	平成15年度	同　上	平成21年度より情報ﾋﾞｼﾞﾈｽｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科を名称変更
法学部			3年次			1.07			
法学科	4	150	—	300	学士(法学)	1.07	平成25年度	同　上	
外国語学部						1.05			
英米語学科	4	140	—	560	学士(文学)	1.13	平成元年度	同　上	
中国ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科	4	50	—	200	学士(文学)	0.79	平成元年度	同　上	平成19年度より中国語学科を名称変更
国際文化協力学科	4	50	—	200	学士(文学)	1.11	平成17年度	同　上	
人間健康学部									
人間健康学科	4	—	—	—	学士(人間健康)	—	平成18年度	愛知県瀬戸市上品野町1350番地	平成22年度より学生募集停止
ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学科理学療法学専攻	4	—	—	—	学士(理学療法学)	—	平成18年度	同　上	平成22年度より学生募集停止
スポーツ健康学部						1.21			
スポーツ健康学科	4	120	—	480	学士(スポーツ健康)	1.21	平成22年度	同　上	平成24年度より入学定員を100人から120人に変更
リハビリテーション学部						1.13			
理学療法学科	4	80	—	320	学士(理学療法学)	1.13	平成22年度	同　上	

既設大学等の状況	大学の名称	名古屋学院大学大学院								
	経済経営研究科									
	経済学専攻修士課程	2	7	—	14	修士(経済学)	1.14	平成9年度	愛知県名古屋市熱田区大宝三丁目1番17号	
	経営政策専攻博士前期課程	2	20	—	40	修士(経営学)	1.17	平成9年度	同 上	
	経営政策専攻博士後期課程	3	5	—	15	博士(経営学)	0.80	平成11年度	同 上	
	外国語学研究科									
	英語学専攻修士課程	2	7	—	14	修士(英語学)	0.35	平成9年度	同 上	
	国際文化協力専攻修士課程	2	5	—	10	修士(国際文化協力)	0.40	平成21年度	同 上	
	英語学専攻博士前期課程(通信教育課程)	2	20	—	40	修士(英語学)	0.67	平成13年度	同 上	
	英語学専攻博士後期課程(通信教育課程)	3	3	—	9	博士(英語学)	0.33	平成20年度	同 上	
附属施設の概要	名　称：名古屋学院大学健康センター 目　的：学生（リハビリテーション学部）の臨床実習及び教員の臨床研究に資する。 所在地：愛知県瀬戸市上品野町1350番87 設置年月：平成23年10月 規模等：建物（鉄筋RC造平家建）　218.7㎡									

学校法人名古屋学院大学　設置認可等に関わる組織の移行表

平成26年度	入学定員	編入学定員	収容定員		平成27年度	入学定員	編入学定員	収容定員	変更の事由
名古屋学院大学					名古屋学院大学				
		3年次							
経済学部　経済学科	300	10	1,220	→	経済学部　経済学科	250	0	1,000	
経済学部　総合政策学科	150	0	600						平成27年4月学生募集停止
					現代社会学部　現代社会学科	150	0	600	学部の設置（届出）
		3年次							
商学部　商学科	200	5	810		商学部　商学科	200	0	800	
商学部　経営情報学科	100	0	400		商学部　経営情報学科	100	0	400	
法学部　法学科	150	0	600		法学部　法学科	150	0	600	
外国語学部　英米語学科	140	0	560		外国語学部　英米語学科	140	0	560	
外国語学部　中国ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科	50	0	200						平成27年4月学生募集停止
外国語学部　国際文化協力学科	50	0	200						平成27年4月学生募集停止
					国際文化学部　国際文化学科	100	0	400	学部の設置（届出）
					国際文化学部　国際協力学科	50	0	200	学部の設置（届出）
ｽﾎﾟｰﾂ健康学部　ｽﾎﾟｰﾂ健康学科	120	0	480		ｽﾎﾟｰﾂ健康学部　ｽﾎﾟｰﾂ健康学科	120	0	480	
					ｽﾎﾟｰﾂ健康学部　こどもｽﾎﾟｰﾂ教育学科	50	0	200	学科の設置（認可）
ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学部　理学療法学科	80		320		ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学部　理学療法学科	80	0	320	
計	1,340	15	5,390		計	1,390	0	5,560	
名古屋学院大学大学院					名古屋学院大学大学院				
経済経営研究科　経済学専攻（M）	7	0	14	→	経済経営研究科　経済学専攻（M）	7	0	14	
経済経営研究科　経営政策専攻（M）	20	0	40		経済経営研究科　経営政策専攻（M）	20	0	40	
経済経営研究科　経営政策専攻（D）	5	0	15		経済経営研究科　経営政策専攻（D）	5	0	15	
外国語学研究科　英語学専攻（M）	7	0	14		外国語学研究科　英語学専攻（M）	7	0	14	
外国語学研究科　国際文化協力専攻（M）	5	0	10		外国語学研究科　国際文化協力専攻（M）	5	0	10	
外国語学研究科　英語学専攻（M）［通信教育課程］	20	0	40		外国語学研究科　英語学専攻（M）［通信教育課程］	20	0	40	
外国語学研究科　英語学専攻（D）［通信教育課程］	3	0	9		外国語学研究科　英語学専攻（D）［通信教育課程］	3	0	9	
計	67	0	142		計	67	0	142	

別記様式第２号（その２の１）

教　育　課　程　等　の　概　要

（国際文化学部国際文化学科）

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
ＮＧＵ教養スタンダード科目	キリスト教		キリスト教概説	1前	2			○					1				
			キリスト教学	1後	2			○					1				
			キリスト教と文学	2･3･4前		2		○								兼1	
			キリスト教と文化	2･3･4後		2		○								兼1	
			キリスト教倫理	2･3･4前		2		○								兼1	
			キリスト教史	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			小計(6科目)	－	4	8	0	－			0	0	1	0	0	兼3	
	自己理解と自己開発		基礎セミナー	1前	2				○		8	2	4				
			発展セミナー	1後		2			○		8	2	4				
			キャリアデザイン1a	1前		2		○								兼2	
			キャリアデザイン1b	1後		2		○								兼2	
			キャリアデザイン2a	2前		2		○								兼3	
			キャリアデザイン2b	2後		2		○								兼3	
			キャリアデザイン3a	3前		2		○								兼1	
			キャリアデザイン3b	3後		2		○								兼1	
			ボランティア学	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			ボランティア演習	1･2･3･4後		2			○							兼1	※実習
			インターンシップ1	1･2･3･4前･後		2				○						兼1	集中
			インターンシップ2	1･2･3･4前･後		2				○						兼1	集中
			小計(12科目)	－	2	22	0	－			8	2	4	0	0	兼7	
	社会的教養	人間理解	哲学	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			哲学史	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			日本文学	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			日本文学史	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			心理学概論	1･2･3･4前･後		2		○								兼2	
			文明論	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			宗教と人間	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			聖書と人間	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			キリスト教人間学	2･3･4前		2		○								兼1	
			死生学	1･2･3･4前		2		○								兼3	ｵﾑﾆﾊﾞｽ
			臨床心理学	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
		社会理解	社会学入門	1･2･3･4前		2		○					1				
			宗教社会学	1･2･3･4前･後		2		○					1				
			比較宗教学	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			日本国憲法	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			現代社会と法律	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			現代社会と経済	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			企業と社会	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			国際関係論入門	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			国際政治学	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			国際社会問題	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			現代社会と教育	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			平和学入門	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			人権と社会	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
		自然理解	数学	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			数理科学	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			基礎統計学	1･2･3･4前		2		○								兼1	

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	自然理解	実用統計学	1･2･3･4後		2		○								兼1
			化学	1･2･3･4前		2		○								兼1
			生物学	1･2･3･4前･後		2		○								兼1
			地球科学概論	1･2･3･4前		2		○								兼1
			地球物理学概論	1･2･3･4後		2		○								兼1
			人類学	1･2･3･4前		2		○								兼1
			物理学	1･2･3･4後		2		○								兼1
			生命倫理	1･2･3･4後		2		○								兼2 オムニバス
		歴史文化理解	日本史	1･2･3･4前		2		○			1					
			日本思想史	1･2･3･4前･後		2		○								兼1
			中国文化入門	1･2･3･4前		2		○			1					
			英米文化入門	1･2･3･4後		2		○								兼1
			文化人類学入門	1･2･3･4後		2		○					1			兼1
			世界の近現代史	1･2･3･4前		2		○					1			
			世界史	1･2･3･4後		2		○					1			
			考古学入門	1･2･3･4後		2		○			1					
			陶芸論	1･2･3･4前		2		○								兼1
			陶芸演習	1･2･3･4後		2		○								兼1
		環境理解	環境科学	1･2･3･4前		2		○								兼1
			生態学	1･2･3･4前･後		2		○								兼1
			地球環境学	1･2･3･4前		2		○								兼1
		身体理解	健康の科学	1･2･3･4前･後		2		○								兼1
			スポーツの科学	1･2･3･4前･後		2		○								兼1
			スポーツ初級A	1･2･3･4前･後		1				○						兼2
			スポーツ初級B	1･2･3･4前･後		1				○						兼2
			スポーツ中級A	2･3･4前･後		1				○						兼2
			スポーツ中級B	2･3･4前･後		1				○						兼3
			スポーツ上級A	3･4前･後		1				○						兼1
			スポーツ上級B	3･4後		1				○						兼1
		地域理解	地域商業まちづくり学	1･2･3･4前･後		2		○								兼1
			歴史観光まちづくり学	1･2･3･4前･後		2		○								兼1
			減災福祉まちづくり学	1･2･3･4前･後		2		○								兼1
			地域商業まちづくり演習	1･2･3･4後		2				○						兼1
			歴史観光まちづくり演習	1･2･3･4後		2				○						兼1
			減災福祉まちづくり演習	1･2･3･4後		2				○						兼1
			上級まちづくり演習	2･3･4前後		2				○						兼3
		小計(63科目)			0	120	0	−			2	0	2	0	0	兼33
		言語とコミュニケーション	日本語表現	1前･後	2			○								兼1
			日本語表現上級	1前･後		2		○								兼3
			基礎英語1	1前	1					○						兼2
			基礎英語2	1後	1					○						兼2
			英会話1	1前	1					○						兼3
			英会話2	1後	1					○						兼3
			入門ドイツ語1	1前		1				○						兼1
			入門ドイツ語2	1後		1				○						兼1
			基礎ドイツ語1	1前		1				○						兼1
			基礎ドイツ語2	1後		1				○						兼1
			入門フランス語1	1前		1				○		1				兼2
			入門フランス語2	1後		1				○		1				兼2
			基礎フランス語1	1前		1				○		1				兼2
			基礎フランス語2	1後		1				○		1				兼2
			入門スペイン語1	1前		1				○						兼2

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
NGU教養スタンダード科目	言語とコミュニケーション	入門スペイン語2	1後		1				○						兼2
		基礎スペイン語1	1前		1				○						兼2
		基礎スペイン語2	1後		1				○						兼2
		入門中国語1	1前		1				○	1					兼2
		入門中国語2	1後		1				○	1					兼2
		基礎中国語1	1前		1				○						兼2
		基礎中国語2	1後		1				○						兼2
		入門韓国語1	1前		1				○						兼1
		入門韓国語2	1後		1				○						兼1
		基礎韓国語1	1前		1				○						兼1
		基礎韓国語2	1後		1				○						兼1
		手話入門	1前		1				○						兼1
		手話基礎	1後		1				○						兼1
		小計(28科目)		6	24	0	−			1	1	0	0	0	兼20
	情報理解	情報処理基礎	1前	2					○						兼1
		情報概論	2後		2				○						兼1
		小計(2科目)	−	2	2		−			0	0	0	0	0	兼1
	教職	教職論	1後		2		○								兼1
		教育原理	1後		2		○								兼1
		教育心理学概論1	1前		2		○								兼1
		教育心理学概論2	1後		2		○								兼1
		教育制度論	1前		2		○								兼1
		特別活動論	2前		2		○								兼1
		教育の方法と技術	2後		2		○								兼1
		道徳教育論	2後		2		○								兼1
		生徒・進路指導論	2後		2		○								兼1
		教育相談	2前		2		○								兼1
		小計(10科目)	−	0	20	0	−			0	0	0	0	0	兼5
	小計(121科目)		−	14	196	0	−			8	2	4	0	0	兼62
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	国際文化理解英語1	2前		1				○						兼1
		国際文化理解英語2	2後		1				○						兼1
		留学英語中級	2前		1				○						兼1
		留学英語上級	2後		1				○						兼1
		TOEIC英語入門	1後		1				○						兼1
		TOEIC英語基礎1	2前		1				○						兼1
		TOEIC英語基礎2	2後		1				○						兼1
		TOEIC英語実践1	2前		1				○						兼1
		TOEIC英語実践2	2後		1				○						兼1
		ビジネス英語1	2前		1				○						兼1
		ビジネス英語2	2後		1				○						兼1
		時事ドイツ語1	2前		1				○		1				
		時事ドイツ語2	2後		1				○		1				
		応用ドイツ語1	2前		1				○	1					
		応用ドイツ語2	2後		1				○	1					
		実践ドイツ語1	3前		1				○						兼1
		実践ドイツ語2	3後		1				○						兼1
		時事フランス語1	2前		1				○						兼1
		時事フランス語2	2後		1				○						兼1
		応用フランス語1	2前		1				○		1				
		応用フランス語2	2後		1				○		1				
		実践フランス語1	3前		1				○						兼1
		実践フランス語2	3後		1				○						兼1
		時事スペイン語1	2前		1				○						兼3
		時事スペイン語2	2後		1				○						兼3
		応用スペイン語1	2前		1				○						兼3

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	応用スペイン語2	2後		1				○						兼3	
		実践スペイン語1	3前		1				○						兼3	
		実践スペイン語2	3後		1				○						兼3	
		時事中国語1	2前		1				○	3						
		時事中国語2	2後		1				○	3						
		応用中国語1	2前		1				○	3						
		応用中国語2	2後		1				○	3						
		実践中国語1	3前		1				○	1					兼1	
		実践中国語2	3後		1				○	1					兼1	
		コミュニケーション中国語1	1前		1				○	1						
		コミュニケーション中国語2	1後		1				○	1						
		ビジュアル中国語	2後		1				○	1						
		日常中国語1	2前		1				○	1						
		日常中国語2	2後		1				○	1						
		中国語検定読解入門	3前		1				○	1						
		アジア言語入門1	2前		1				○						兼1	
		アジア言語入門2	2後		1				○						兼1	
		コンピュータ技法1	2前		2		○			1						
		コンピュータ技法2	2後		2		○			1						
		小計(45科目)	－	0	47	0	－			5	2	0	0	0	兼13	
	国際理解科目	国際文化論	1前	2			○			2					兼1	ｵﾑﾆﾊﾞｽ
		キリスト教文化論1	2前		2		○					1				
		キリスト教文化論2	2後		2		○					1				
		文化人類学	1前		2		○					1				
		グローバル社会文化論	1後		2		○			1					兼1	ｵﾑﾆﾊﾞｽ
		日本史概説	1前		2		○			2						
		日本文化論	1後	2			○			1						
		比較宗教論	2前		2		○					1				
		宗教と平和	2後		2		○					1				
		国際環境論	2前		2		○								兼1	
		小計(10科目)	－	4	16	0	－			4	0	2	0	0	兼2	
	小計(55科目)		－	4	63	0	－			7	2	2	0	0	兼14	
学科専門科目	学科基幹科目	英語演習1	1前	1					○	1					兼2	
		英語演習2	1後	1					○	1					兼2	
		英語演習3	2前	1					○	1					兼2	
		英語演習4	2後	1					○	1					兼2	
		英語演習5	2前	1					○	1					兼2	
		英語演習6	2後	1					○	1					兼2	
		異文化コミュニケーション論	2前	2			○			1					兼1	
		比較文化・社会論1	2前	2			○			1						
		比較文化・社会論2	2後		2		○				1					
		文化マネジメント論	2前		2		○								兼1	
		多文化共生社会論	2後		2		○								兼1	
		東西交渉史	2前		2		○					1				
		観光文化論	2後		2		○								兼1	
		現代芸術論	2前		2		○								兼1	
		メディア文化論	2前		2		○								兼1	
		情報文化論	2前		2		○					1				
		多文化教育論	2後		2		○								兼1	
		人間行動論	2前		2		○					1				
		比較認知科学	2後		2		○					1				
		比較社会心理学	2前		2		○					1				
		現代経済入門	2後		2		○								兼1	
		小計(21科目)	－	10	26	0	－			2	1	2	0	0	兼9	

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科専門科目	グローバル文化展開科目	アメリカ社会文化論	2前		2		○								兼1	
		アメリカ政治経済論	2後		2		○								兼1	
		英米文学概論1	2前		2		○								兼1	
		英米文学概論2	2後		2		○								兼1	
		英米文学講義1	2前		2		○								兼1	
		英米文学講義2	2後		2		○								兼1	
		英文学史	2後		2		○								兼1	
		米文学史	2後		2		○								兼1	
		ヨーロッパ文化総論	2前		2		○			1						
		ヨーロッパ地域文化論A	2前		2		○				1					
		ヨーロッパ地域文化論B	2後		2		○				1					
		ヨーロッパ地域文化論C	2前		2		○				1					
		地中海文化圏論	2後		2		○								兼1	
		日欧交流史	3後		2		○			1						
		環太平洋地域文化論	3前		2		○								兼2	オムニバス
		イスラム文化圏論	3後		2		○					1				
		文化変容論	3前		2		○								兼1	
		マイノリティ論	2前		2		○								兼1	
		比較文化行動論	3前		2		○			1						
		グローバル経済論	3後		2		○								兼1	
		グローバル・ビジネス・コミュニケーション	3前		2		○								兼1	
		小計(21科目)	－	0	42	0	－			2	2	2	0	0	兼8	
	日本アジア文化展開科目	日本文化史	2前		2		○			2						
		日本の思想	2後		2		○			2						オムニバス
		日本の民俗学	2前		2		○					1				
		日本社会論	2後		2		○								兼1	
		日本地域史論	3前		2		○			2						オムニバス
		日本アジア交流史	2前		2		○			1						
		現代中国事情	2後		2		○								兼1	
		中国文化社会論	2前		2		○			1						
		韓国文化社会論	2後		2		○								兼1	
		現代アジア文化社会論	2前		2		○								兼1	
		南アジア文化社会論	2後		2		○					1				
		日中関係論	2前		2		○								兼1	
		中国社会経済論	3前		2		○								兼1	
		日本のポップカルチュアとアジア	3後		2		○			1						
		アジアの商習慣	3前		2		○								兼1	
		アジア就業事情	3後		2		○								兼1	
		小計(16科目)	－	0	32	0	－			4	0	1	0	0	兼5	
	国際協力関連科目	文化交流論	2前		2		○								兼1	
		ジェンダー論	2前		2		○								兼1	
		国際人権論	2後		2		○								兼1	
		平和学	2後		2		○								兼1	
		国際地理論	1後		2		○								兼1	
		世界遺産と保全	3前		2		○								兼1	
		小計(6科目)	－	0	12	0	－			0	0	0	0	0	兼4	
	留学単位振替科目	海外事情1	1・2・3・4前・後		2				○						兼1	集中
		海外事情2	1・2・3・4前・後		2				○						兼1	集中
		海外事情3	1・2・3・4前・後		2				○						兼1	集中
		海外事情4	1・2・3・4前・後		2				○						兼1	集中
		小計(4科目)	－	0	8	0	－			0	0	0	0	0	兼1	

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
学科専門科目	演習科目	フィールドワーク	1・2・3前		1				○	2	0	2			集中
		国際文化理解実践論1	1・2・3前		2			○		3	2	2			
		国際文化理解実践論2	1・2・3後		2			○		3	2	2			
		国際文化基礎演習1	2前	2				○		8	2	4			
		国際文化基礎演習2	2後	2				○		8	2	4			
		国際文化演習	3～4通	8				○		8	2	4			
		小計(6科目)	－	12	5	0	－			8	2	4	0	0	兼0
	小計(74科目)		－	22	125	0	－			8	2	4	0	0	兼23
合計 (250科目)			－	40	384	0	－			8	2	4	0	0	兼79

学位又は称号	学士(国際文化)	学位又は学科の分野	文学関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
①NGU教養スタンダード科目　計34単位 〔キリスト教〕　4単位以上 〔自己理解と自己開発〕　6単位以上 〔社会的教養〕　12単位以上 〔言語とｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ〕　10単位以上 〔情報理解〕　2単位以上 ②専門科目　計72単位 〔学部共通科目〕16単位以上 〔学科専門科目〕56単位以上 学科基幹科目　18単位以上 グローバル文化展開科目 日本アジア文化展開科目 国際協力関連科目 留学単位振替科目 展開科目の選択を含んで26単位以上 演習科目　12単位 ③自由選択　計18単位以上 計124単位以上取得すること 注)各学期(セメスター)の履修制限単位は24単位	1学年の学期区分	2学期
	1学期の授業期間	15週
	1時限の授業時間	90分

別記様式第２号（その２の１）

教　育　課　程　等　の　概　要

（国際文化学部国際協力学科）

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
NGU教養スタンダード科目	キリスト教		キリスト教概説	1前	2			○								兼1	
			キリスト教学	1後	2			○								兼1	
			キリスト教と文学	2･3･4前		2		○								兼1	
			キリスト教と文化	2･3･4後		2		○								兼1	
			キリスト教倫理	2･3･4前		2		○								兼1	
			キリスト教史	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			小計(6科目)	－	4	8	0	－			0	0	0	0	0	兼4	
	自己理解と自己開発		基礎セミナー	1前	2				○		3	1	3				
			発展セミナー	1後		2			○		3	1	3				
			キャリアデザイン1a	1前		2		○								兼2	
			キャリアデザイン1b	1後		2		○								兼2	
			キャリアデザイン2a	2前		2		○								兼3	
			キャリアデザイン2b	2後		2		○								兼3	
			キャリアデザイン3a	3前		2		○								兼1	
			キャリアデザイン3b	3後		2		○								兼1	
			ボランティア学	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			ボランティア演習	1･2･3･4後		2			○							兼1	※実習
			インターンシップ1	1･2･3･4前･後		2				○						兼1	集中
			インターンシップ2	1･2･3･4前･後		2				○						兼1	集中
			小計(12科目)	－	2	22	0	－			3	1	3	0	0	兼7	
	社会的教養	人間理解	哲学	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			哲学史	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			日本文学	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			日本文学史	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			心理学概論	1･2･3･4前･後		2		○								兼2	
			文明論	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			宗教と人間	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			聖書と人間	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			キリスト教人間学	2･3･4前		2		○								兼1	
			死生学	1･2･3･4前		2		○								兼1	ｵﾑﾆﾊﾞｽ
			臨床心理学	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
		社会理解	社会学入門	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			宗教社会学	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			比較宗教学	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			日本国憲法	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			現代社会と法律	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			現代社会と経済	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			企業と社会	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			国際関係論入門	1･2･3･4後		2		○			1						
			国際政治学	1･2･3･4前		2		○			1						
			国際社会問題	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			現代社会と教育	1･2･3･4後		2		○			1						
			平和学入門	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
			人権と社会	1･2･3･4前･後		2		○								兼1	
		自然理解	数学	1･2･3･4前		2		○								兼1	
			数理科学	1･2･3･4後		2		○								兼1	
			基礎統計学	1･2･3･4前		2		○								兼1	

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	自然理解	実用統計学	1・2・3・4後		2		○								兼1	
			化学	1・2・3・4前		2		○								兼1	
			生物学	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			地球科学概論	1・2・3・4前		2		○								兼1	
			地球物理学概論	1・2・3・4後		2		○								兼1	
			人類学	1・2・3・4前		2		○								兼1	
			物理学	1・2・3・4後		2		○								兼1	
			生命倫理	1・2・3・4後		2		○								兼1	オムニバス
		歴史文化理解	日本史	1・2・3・4前		2		○								兼1	
			日本思想史	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			中国文化入門	1・2・3・4前		2		○								兼1	
			英米文化入門	1・2・3・4後		2		○								兼1	
			文化人類学入門	1・2・3・4後		2		○								兼1	
			世界の近現代史	1・2・3・4前		2		○								兼1	
			世界史	1・2・3・4後		2		○								兼1	
			考古学入門	1・2・3・4後		2		○								兼1	
			陶芸論	1・2・3・4前		2		○								兼1	
			陶芸演習	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		環境理解	環境科学	1・2・3・4前		2		○								兼1	
			生態学	1・2・3・4前・後		2		○			1						
			地球環境学	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		身体理解	健康の科学	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			スポーツの科学	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			スポーツ初級A	1・2・3・4前・後		1				○						兼2	
			スポーツ初級B	1・2・3・4前・後		1				○						兼2	
			スポーツ中級A	2・3・4前・後		1				○						兼2	
			スポーツ中級B	2・3・4前・後		1				○						兼3	
			スポーツ上級A	3・4前・後		1				○						兼1	
			スポーツ上級B	3・4後		1				○						兼1	
		地域理解	地域商業まちづくり学	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			歴史観光まちづくり学	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			減災福祉まちづくり学	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			地域商業まちづくり演習	1・2・3・4後		2				○						兼1	
			歴史観光まちづくり演習	1・2・3・4後		2				○						兼1	
			減災福祉まちづくり演習	1・2・3・4後		2				○						兼1	
			上級まちづくり演習	2・3・4前後		2				○						兼3	
		小計(63科目)			0	120	0	－			3	0	0	0	0	兼34	
	言語とコミュニケーション		日本語表現	1前・後	2			○								兼1	
			日本語表現上級	1前・後		2		○								兼3	
			基礎英語1	1前	1					○			1			兼1	
			基礎英語2	1後	1					○			1			兼1	
			英会話1	1前	1					○						兼3	
			英会話2	1後	1					○						兼3	
			入門ドイツ語1	1前		1				○						兼1	
			入門ドイツ語2	1後		1				○						兼1	
			基礎ドイツ語1	1前		1				○						兼1	
			基礎ドイツ語2	1後		1				○						兼1	
			入門フランス語1	1前		1				○						兼3	
			入門フランス語2	1後		1				○						兼3	
			基礎フランス語1	1前		1				○						兼3	
			基礎フランス語2	1後		1				○						兼3	
			入門スペイン語1	1前		1				○						兼2	
			入門スペイン語2	1後		1				○						兼2	

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
NGU教養スタンダード科目	言語とコミュニケーション	基礎スペイン語1	1前		1				○						兼2
		基礎スペイン語2	1後		1				○						兼2
		入門中国語1	1前		1				○		1				兼3
		入門中国語2	1後		1				○		1				兼3
		基礎中国語1	1前		1				○						兼2
		基礎中国語2	1後		1				○						兼2
		入門韓国語1	1前		1				○						兼1
		入門韓国語2	1後		1				○						兼1
		基礎韓国語1	1前		1				○						兼1
		基礎韓国語2	1後		1				○						兼1
		手話入門	1前		1				○						兼1
		手話基礎	1後		1				○						兼1
		小計(28科目)		6	24	0	−			0	1	1	0	0	兼20
	情報理解	情報処理基礎	1前	2					○						兼1
		情報概論	2後		2				○						兼1
		小計(2科目)	−	2	2		−			0	0	0	0	0	兼1
	教職	教職論	1後		2		○			1					
		教育原理	1後		2		○			1					
		教育心理学概論1	1前		2		○								兼1
		教育心理学概論2	1後		2		○								兼1
		教育制度論	1前		2		○			1					
		特別活動論	2前		2		○								兼1
		教育の方法と技術	2後		2		○								兼1
		道徳教育論	2後		2		○								兼1
		生徒・進路指導論	2後		2		○								兼1
		教育相談	2前		2		○								兼1
		小計(10科目)	−	0	20	0	−			1	0	0	0	0	兼4
	小計(121科目)		−	14	196	0	−			4	1	4	0	0	兼62
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	国際文化理解英語1	2前		1				○						兼1
		国際文化理解英語2	2後		1				○						兼1
		留学英語中級	2前		1				○						兼1
		留学英語上級	2後		1				○						兼1
		TOEIC英語入門	1後		1				○						兼1
		TOEIC英語基礎1	2前		1				○						兼1
		TOEIC英語基礎2	2後		1				○						兼1
		TOEIC英語実践1	2前		1				○						兼1
		TOEIC英語実践2	2後		1				○						兼1
		ビジネス英語1	2前		1				○						兼1
		ビジネス英語2	2後		1				○						兼1
		時事ドイツ語1	2前		1				○						兼1
		時事ドイツ語2	2後		1				○						兼1
		応用ドイツ語1	2前		1				○						兼1
		応用ドイツ語2	2後		1				○						兼1
		実践ドイツ語1	3前		1				○						兼1
		実践ドイツ語2	3後		1				○						兼1
		時事フランス語1	2前		1				○						兼1
		時事フランス語2	2後		1				○						兼1
		応用フランス語1	2前		1				○						兼1
		応用フランス語2	2後		1				○						兼1
		実践フランス語1	3前		1				○						兼1
		実践フランス語2	3後		1				○						兼1
		時事スペイン語1	2前		1				○						兼3
		時事スペイン語2	2後		1				○						兼3
		応用スペイン語1	2前		1				○						兼3
		応用スペイン語2	2後		1				○						兼3

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	実践スペイン語1	3前		1				○						兼3	
		実践スペイン語2	3後		1				○						兼3	
		時事中国語1	2前		1				○						兼3	
		時事中国語2	2後		1				○						兼3	
		応用中国語1	2前		1				○						兼3	
		応用中国語2	2後		1				○						兼3	
		実践中国語1	3前		1				○		1				兼1	
		実践中国語2	3後		1				○		1				兼1	
		コミュニケーション中国語1	1前		1				○						兼1	
		コミュニケーション中国語2	1後		1				○						兼1	
		ビジュアル中国語	2後		1				○						兼1	
		日常中国語1	2前		1				○						兼1	
		日常中国語2	2後		1				○						兼1	
		中国語検定読解入門	3前		1				○						兼1	
		アジア言語入門1	2前		1				○	1						
		アジア言語入門2	2後		1				○			1				
		コンピュータ技法1	2前		2		○								兼1	
		コンピュータ技法2	2後		2		○								兼1	
		小計(45科目)	－	0	47	0	－			1	1	1	0	0	兼17	
	国際理解科目	国際文化論	1前	2			○			1					兼2	ｵﾑﾆﾊﾞｽ
		キリスト教文化論1	2前		2		○								兼1	
		キリスト教文化論2	2後		2		○								兼1	
		文化人類学	1前		2		○								兼1	
		グローバル社会文化論	1後		2		○			1					兼1	ｵﾑﾆﾊﾞｽ
		日本史概説	1前		2		○								兼2	
		日本文化論	1後	2			○								兼1	
		比較宗教論	2前		2		○								兼1	
		宗教と平和	2後		2		○								兼1	
		国際環境論	2前		2		○			1						
		小計(10科目)	－	4	16	0	－			2	0	0	0	0	兼6	
	小計(55科目)			4	63	0	－			2	1	1	0	0	兼21	
学科専門科目	学科基幹科目	英語演習1	1前	1					○			1				
		英語演習2	1後	1					○			1				
		英語演習3	2前	1					○			1				
		英語演習4	2後	1					○			1				
		英語演習5	2前	1					○			1				
		英語演習6	2後	1					○			1				
		国際関係論	2前	2			○			1						
		国際協力論	2後	2			○					1				
		国際文化支援論	2後		2		○								兼1	
		国際地理論	1後		2		○								兼1	
		開発社会学	2前		2		○			1						
		文化交流論	2前		2		○			1						
		国際社会学	2前		2		○					1				
		マイノリティ論	2前		2		○			1						
		ジェンダー論	2前		2		○					1				
		小計(15科目)	－	10	14	0	－			3	0	3	0	0	兼2	

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科専門科目	国際文化協力展開科目	国際移民論	2前		2		○					1				
		日中関係論	2前		2		○				1					
		アジア政治論	2後		2		○					1				
		国際機構論	2前		2		○								兼1	
		平和学	2後		2		○								兼1	
		農村発展論	2前		2		○					1				
		アジア経済論	2後		2		○								兼1	
		国際企業論	3前		2		○					1				
		文化変容論	3前		2		○			1						
		アジア地域研究1	3前		2		○			1						
		アジア地域研究2	3後		2		○					1				
		小計(11科目)	－	0	22	0	－			1	1	2	0	0	兼3	
	国際文化支援展開科目	文化マネジメント論	2前		2		○					1				
		多文化共生社会論	2後		2		○			1						
		異文化コミュニケーション論	2前		2		○								兼1	
		多文化教育論	2後		2		○			1						
		世界遺産と保全	3前		2		○			1						
		国際環境文化論	3後		2		○			1						
		国際人権論	2後		2		○					1				
		比較地域生活史	3前		2		○			1						
		企業文化論	3後		2		○								兼1	
		小計(9科目)	－	0	18	0	－			3	0	1	0	0	兼2	
	国際文化関連科目	比較文化・社会論1	2前		2		○								兼1	
		比較文化・社会論2	2後		2		○								兼1	
		メディア文化論	2前		2		○								兼1	
		観光文化論	2後		2		○								兼1	
		現代アジア文化社会論	2前		2		○			1						
		韓国文化社会論	2後		2		○								兼1	
		アメリカ社会文化論	2前		2		○								兼1	
		アメリカ政治経済論	2後		2		○								兼1	
		ヨーロッパ文化総論	2前		2		○								兼1	
		環太平洋地域文化論	3前		2		○			2						ｵﾑﾆﾊﾞｽ
		イスラム文化圏論	3後		2		○								兼1	
		開発経済学	2後		2		○					1				
		国際福祉論	2前		2		○								兼1	
		NPO・NGO論	2後		2		○					1				
		英米文学概論1	2前		2		○								兼1	
		英米文学概論2	2後		2		○								兼1	
		英米文学講義1	2前		2		○								兼1	
		英米文学講義2	2後		2		○								兼1	
		英文学史	2後		2		○								兼1	
		米文学史	2後		2		○								兼1	
		小計(20科目)	－	0	40	0	－			3	0	2	0	0	兼11	
	留学単位振替科目	海外事情1	1・2・3・4前・後		2				○	1						
		海外事情2	1・2・3・4前・後		2				○	1						
		海外事情3	1・2・3・4前・後		2				○	1						
		海外事情4	1・2・3・4前・後		2				○	1						
		小計(4科目)	－	0	8	0	－			1	0	0	0	0	兼0	

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
学科専門科目	演習科目	国際協力実践論1	1・2・3前		2			○		2	1	3			
		国際協力実践論2	1・2・3後		2			○		2	1	3			
		国際協力基礎演習1	2前	2				○		3	1	3			
		国際協力基礎演習2	2後	2				○		3	1	3			
		国際協力演習	3～4通	8				○		4	1	3			
		小計(5科目)	－	12	0	0	－			4	1	3	0	0	兼0
	小計(64科目)		－	22	102	0	－			4	1	4	0	0	兼18
合計 (240科目)			－	40	361	0	－			4	1	4	0	0	兼85

学位又は称号	学士(国際文化)	学位又は学科の分野	文学関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
①NGU教養スタンダード科目　計34単位 〔キリスト教〕　4単位以上 〔自己理解と自己開発〕　6単位以上 〔社会的教養〕　12単位以上 〔言語とｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ〕　10単位以上 〔情報理解〕　2単位以上 ②専門科目　計72単位 〔学部共通科目〕16単位以上 〔学科専門科目〕56単位以上 学科基幹科目　18単位以上 国際協力展開科目科目、国際文化関連科目、留学単位振替科目　26単位以上 演習科目　12単位 ③自由選択　計18単位以上 計124単位以上取得すること 注)各学期(セメスター)の履修制限単位は24単位	1学年の学期区分	2学期
	1学期の授業期間	15週
	1時限の授業時間	90分

別記様式第２号（その３の１）

授　業　科　目　の　概　要

（国際文化学部国際文化学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
NGU教養スタンダード科目	キリスト教	キリスト教概説	建学の精神として本学の教育を基礎づけるキリスト教の精神を学ぶ。すなわち、聖書の示す人間観、世界観を学び、「人間とは何か」そして「人間がこの世界にあっていかに真実の生を生きうるのか」という問題について考察する。とりわけ、それをもっとも明確な形で示したイエス・キリストの言葉と行為に触れ、限界をもった人間が、人として常に新しく生かされる可能性を与えられていることを知り、それが希望と力に満ちた生を生み出すことを理解する。	
		キリスト教学	「キリスト教概説」で学んだキリスト教の精神が、その後二千年の歴史の中で様々な形をとって展開され、提出されていった様子を学ぶ。具体的にはキリスト教の歴史、思想、倫理、文化等を学び、それらを通じて、聖書の示す使信がそれぞれの時代状況の中で、人々によってどのように受け止められ、表現され、生きられたかを理解する。そしてそれらが世界において果たした役割を知り、さらに今日どのような意味をもちうるのかについて考察する。	
		キリスト教と文学	キリスト教はこれまで多くの文学者に影響を与え、それが様々な文学作品として表現されてきた。それらの作品は、聖書とはまた違った形でわれわれの心をゆさぶり、われわれが生きていくうえで向き合う様々な出来事を考えさせてくれるのである。本講義では、個々の具体的な作品を通して、そこにキリスト教がどのように反映しているのか、あるいは作家たちがどのようにキリスト教を捉えているのかを辿り、文学がわれわれに喚起してくるものを見つめ直す。	
		キリスト教と文化	本講義では、アメリカのキリスト教の歴史を、ヨーロッパ人の北アメリカ到着から現代までたどる。アメリカ・キリスト教史は、アメリカの政治・文化を知るために不可欠な知識である。なぜなら、市井のアメリカ人の思考は、かなりキリスト教に影響を受けているからである。「アメリカ学」に関心を持つ学生にとって、このクラスはよい導入になるだろう。	
		キリスト教倫理	1993年に発表された「地球倫理」は、現代の人類が抱いている問題を次のようにまとめた。平和の不在、生態系の破壊、性差別と児童虐待、貧富の差、宗教間暴力など。こうした諸問題は、キリスト教を含む諸宗教に、倫理的応えを要求する。「文明間衝突」（Samuel Huntington）の時代とも呼ばれる現代の社会において、キリスト教はこうした問題についてどのように対処すべきだろうか。本講義は、こうした問題を視野に入れながら、現代において要求されるキリスト教的倫理の可能性について講義する。	
		キリスト教史	キリスト教史とは、もちろんキリスト教の歴史のことであるが、本講義では、宗教学的あるいは文化人類学的な観点から、キリスト教の具体的なあり方を辿りながら、宗教とは何かということを考えていきたい。ゆえに取り上げる題材はキリスト教を柱としながらもそれに限らず、神話なども含めて、人間精神の営みとしての宗教というものを探求する。それを通して、われわれ個々人が生きていくうえで向かいあう出来事について、何らか示唆を与えてくれるものを見出すことを目指す。	
	自己理解と自己開発	基礎セミナー	授業は演習形式で行う。本演習は、大学生活を有効に過ごすために必要な基礎的な素養を修得することを目的に、さまざまな社会現象を素材にして、自分の頭で考え、自分の言葉で表現できる能力と習慣を身に付けさせることを目指す。題材に関してはできる限り学生が身近に感じることのできる具体的な問題を取り上げ、レジュメの作成、発表・質疑応答を行う。	
		発展セミナー	授業は演習形式で行う。本演習は、基礎セミナーに引き続き、大学生活を有効に過ごすために必要な基礎的な素養を修得することを目的に、さまざまな社会現象を素材にして、自分の頭で考え、自分の言葉で表現できる能力と習慣を身に付けさせることを目指す。	
		キャリアデザイン1a	時代とともに大きく変貌しつつある「職業を取り巻く環境」を的確に捉え、将来のキャリアを考えるにあたって、自分自身を知り、同時に社会の基本的なしくみや動きについても理解する必要がある。キャリアデザイン1aでは、社会の情勢変化を知ることからスタートし、さらに自分を取り巻く人間関係を交えて自分を振り返り、他者とのかかわりや社会の規範をふまえて自分を客観的に把握し、自分を深く知ることに取り組ませる。	
		キャリアデザイン1b	キャリアデザイン1aで学んだ「職業を取り巻く環境」と「社会的に見つめなおした自己」を再度見直し、将来のキャリアを考えるにあたって、自分自身を知り、同時に社会の基本的なしくみや動きについて、さらに深く理解を進める。キャリアデザイン1bでは、社会で求められる力とは何であるかを考え、常識力をアップさせることで、社会への対応力を身に付けさせることを目標とした学習を行う。具体的には論理的思考、推論、数的処理能力の向上をはかり、自己の適正能についても考えさせる。	
		キャリアデザイン2a	将来のキャリアを考えるにあたって、年齢相応の常識や態度、マナーを身に付け、社会へ飛び立つ準備をするために、自分自身を知り、同時に社会のしくみや動きを十分に理解する必要がある。このような状況を自己の問題として捉えることから始め、自分を取り巻く人間関係を交えて自分を振り返り、他者とのかかわりや社会の規範をふまえて自分を客観的に把握させるとともに、社会で求められる態度や能力を身に付けさせる。	
		キャリアデザイン2b	本格的な就職活動が始まる3年次の前に、就職活動の際に評価される常識力や基礎学力を身に付け、自分自身を再度見つめなおすためのプログラムを展開する。自己の職業興味領域や職業観を見つめることで、キャリアを選択する準備をさせるとともに、自己の志向するキャリアの方向性を定めさせる。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の概要	備考
NGU教養スタンダード科目	自己理解と自己開発		キャリアデザイン3a	卒業後の進路選択は、大学における学習の締めくくりであるとともに、次の生活への跳躍台である。一人一人の個性や適性にあったキャリア選択を行えるように、社会人として職業選択と就職活動に必要な基礎知識と経済・社会・国際・法律などの教養的知識を身に付けさせるとともに、就職プロセスにおける実践的課題やSPI対策など、自己啓発から自己表現、自己アピールの実践までを学習する。	
			キャリアデザイン3b	キャリアデザイン3aで学んだ卒業後の進路選択プロセスをさらに実践的に進める。大学における学習の締めくくりで進路選択において一人一人の個性や適性にあったキャリアを自己の力で認識し、それに向かって行動出来るように、社会人として職業選択と就職活動に必要な基礎知識と現代社会の教養的知識を身に付けさせるとともに、就職プロセスにおける実践的課題やSPI対策など、自己啓発から自己表現、自己アピールの実践までを学習する。	
			ボランティア学	近年、ボランティアを実践だけでなく、活動そのものを様々な学術的観点から捉えての評価や議論が活発となってきている。そこで、本授業は、まずキリスト教学の視点からボランティアを捉えるとともに、社会学や経済学からのアプローチを学び、ボランティア活動の学術的な意義を理解することを目的とする。 また、「福祉」だけではなく、「国際交流」「環境」「まちづくり」など各分野を横断的にとらえ、他者への理解、社会への関心を深めるとともに、それぞれの分野で活躍されているボランティアリーダーの方々をゲストとして迎え、ボランティアの学び方・楽しみ方について学習する機会も持つ。	
			ボランティア演習	ボランティアなどの公共的な社会活動に参加し、体験を通じて人間関係のあり方を学ぶとともに、社会に対する関心と人間関係形成に不可欠なルール意識を高め、社会の担い手側の視点を育むことを目的とする。月1～2回程度の授業を開催し、オリエンテーション・事前学習、実習先の決定、中間報告、ふりかえりプレゼンテーション・事後学習を行う。実習期間の実習記録及び実習レポートの提出と合計20時間以上の実習時間を必須事項とする。	演習22時間 実習20時間
			インターンシップ1	学生として社会のあり方を学習する上で不足しがちな現場実践、社会的体験を、様々な事業所における就業体験を通して獲得させる。具体的には国・地方自治体など行政機関、国連機関などの国際的機関、公益法人やNPO法人、一般企業などで現実の業務を体験し、それぞれの社会的な存在意義・理由を知ると同時に、そのような現場で働くことの意味を考え、自らの行動や将来のキャリア形成のモデルとして考えさせる。	
			インターンシップ2	学生として社会のあり方を学習する上で不足しがちな現場実践、社会的体験を、様々な事業所における就業体験を通して獲得させる。具体的には国・地方自治体など行政機関、国連機関などの国際的機関、公益法人やNPO法人、一般企業などで現実の業務を体験し、それぞれの社会的な存在意義・理由を知ると同時に、そのような現場で働くことの意味を考え、自らの行動や将来のキャリア形成のモデルとして考えさせる。	
	社会的教養	人間理解	哲学	本講義は、始めて哲学を学ぶ者のために哲学の諸問題を説明し、「哲学的な考え方」に慣れさせる。それによって、常識的な思考の多くが時代や地域性に制約されたものであること、ときには先入見にすぎないことを理解させ、世界観や人間観に関する多様性を考えさせる。とりわけ形而上学の基礎を考えさせることによって、科学的な考え方、宗教的なものの見方の意義と制約について会得させる。	
			哲学史	哲学を学ぶこととは哲学史の知識を学ぶことではないが、「哲学する」ことを学ぶには、哲学史上の知識は必要である。本講義では、西洋哲学史の流れに即し、各時代の主要な哲学者、著作、そこでの主な問題、使われている諸概念等をできるだけ整理して紹介する。とりわけ、各時代に特徴的な問題については、現代的に問い直して紹介する。その考察を通じて、自ら思考する訓練をおこない、ひいては思考法全般への入門の一助としたい。	
			日本文学	本講義では、源平合戦の前哨戦ともなった保元物語を扱う。皇位継承に絡んだ戦いであったが、親子・兄弟が敵味方にあい分かれて戦うこととなる。合戦場面では、源為朝の奮戦ぶりが中心となるが、当時の武士の生態、合戦の仕方、武器等を、物語がどのように描くかに注意しながら講義することとなろう。	
			日本文学史	本講義では、保元物語の後半部分を扱う。崇徳院方についた為義は、後白河天皇方についた嫡男義朝の手により斬首される。さらに義朝は、後白河天皇の命令により、幼い四人の弟達を殺すこととなる。それらの死を、為義や四人の子供たちはどのように受け取ろうとしたのか。さらに彼等の死を聞いた妻であり母である為義の北の方はどうなのか。悲惨な戦いを当時の人々がどのように理解しようとしたのかを、物語を通して考えていきたい。	
			心理学概論	心理学とは「行動を科学する」学問である。「長い過去と短い歴史」といわれるように、学問的には19世紀中ごろから成立したが、人間が「こころ」に興味を抱いたのは、人間としてその発生初期からであるといっても過言ではない。本授業では、基礎心理学の学問領域に焦点を置き、現代心理学が学問的に明らかにしてきたいくつかの基本的領域について講義する。	
			文明論	本講義では、先史時代から歴史時代へといたる人類史を総合的に理解することを目指す。世界の四大文明は、河川に沿って発達した灌漑農業によって築かれたとされるが、このような文明と文明を結ぶものは、サハラ砂漠からアラビア半島をへてゴビ砂漠へと帯状に続く乾燥地帯である。文明は、人口の集中した都市を中核に持つ。都市において、いかにして多数の人間が共住し、多種類の文化が共存してきたのか解説する。さらに、文化と経済の観点から、時間と空間を越えて文明を比較し、その本質と成立条件について考察する。	
			宗教と人間	キリスト教文明圏には属していない日本では、宗教と人間の関係が西洋と比べてかなり異なる。かといって、日本人にしか分からないといった特殊で排他的なものでもない。その秘密は実は仏教という宗教にある。本講義では、身近な日本の仏教の人間観を学ぶ中で、宗教のもつ存在意義を考え直すことを目的とする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の概要	備考
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	人間理解	聖書と人間	聖書の主な舞台となった古代中近東世界を考古学・神話・民俗学などの視点から検討し聖書の記述に外から光をあてる事を目標とする。聖書は数千年の長い期間に中近東という地域において生じた出来事等を背景としている。様々な民族の人々がどの様に生きどの様に思索したのか、又それが聖書の記述とどの様に関連しているのかなどを立体的に知ることによって、聖書の世界・信仰の普遍性と特殊性を指摘する。聖書は、それが単独で読まれるときには理解し難い内容も含んでいるが、その成立の背景を周辺世界との比較によって考察する時、地についた理解に繋がる道筋が見えて来る。	
			キリスト教人間学	人間は、神の愛によって造られた善美なる存在、歴史的文化的な共同体の創造に参与するものたち、また、悪や罪をも可能性として秘めもっている存在とのキリスト教的人間観に立って、人間の尊厳、生と死、フェミニズム、ジェンダー、家庭と子ども、人類愛と社会正義、人間以外のいのちとの連帯共生などについて広く、深く学ぶ。	
			死生学	そもそも死生学(thanatology)は、死の準備教育(death education)および悲嘆教育(grief education)などいのちの終わりを考察する学として始められました。今では生殖補助医療や出生前診断、遺伝子操作などのいのちの始まりの問題をも含む「いのちの誕生と死にかかわりあるテーマに対して学際的に取り組む学問」＝「死と生の学問」(Life and Death studies)にまで発展しました。確かに、死生学はまだ歴史の浅い領域ですが、ターミナル・ケアの問題などから必然的に生まれた現代的課題を扱う「ホットな」科目です (オムニバス方式／全15回) (34 大宮 有博／7回) 「死生学」という学問領域を俯瞰して説明する。その後、宗教学の観点から個人の死生観にアプローチする。 (41 玉川 貴子／3回) 自殺の社会学について論じる。 (60 亀井 美穂／5回) 人間の誕生をめぐる現代的課題―特に生殖医療や優生思想―について論じる。	ｵﾑﾆﾊﾞｽ方式
			臨床心理学	臨床心理学は、人々の示す不適応問題に対する心理学的援助を模索する中で発展してきた実践的学問である。臨床心理学では、臨床心理学の歴史的変遷の中で登場した様々なトピックスを取り上げながら、主に発達障害や精神障害に関する臨床心理学の基礎理論、心理アセスメント、心理療法について概観する。	
			社会学入門	本講義は、前半(第8回まで)で、身近な事例を社会学的に読み解くことを通して基礎的な理論を身に付け、後半で、現代社会における個別のトピックを社会学の方法を用いて理解する。身近な社会現象がどのようになりたっているかについて社会学のツールを用いて考えることにより、社会学的なものの見方を身に付ける。映像メディアなどを用いたわかりやすい講義を目指す。	
			宗教社会学	本講義は、社会学、なかでも宗教社会学の基礎を身に付け、現代社会における宗教をめぐる諸問題を適切に理解することを目的とする。新宗教論から宗教組織論、ファンダメンタリズム論まで幅広く取り上げ、また海外の事例にも目を配る。映像資料を活用し、わかりやすい講義を目指す。	
			比較宗教学	キリスト教を含めた多種多彩な宗教についての知識を身に付けることは、悲惨な「文明の衝突」を避けるためにも、いまや不可欠の教養である。本講義においては、ユダヤ教やイスラームといった一神教、神道やヒンドゥーといった多神教、さらには「神」を立てない仏教というような世界の諸宗教に触れ、地球文明の時代に欠かせない宗教的基礎知識の修得を目指す。	
			日本国憲法	本講義は、憲法上の『人権』について、歴史的考察や現代的考察を行い、その重要性を再確認する。更に、様々な事例を中心に日本国憲法を検討していくことによって、受講者が、日本国憲法の知識と考え方を身に付けられるようにすることを意図する。	
			現代社会と法律	本講義は、法の存在意義を検討することはもちろんのこと、日本の法にはどのようなものが存在するのか、そして、われわれのよく知る「法律」との関係はどのようなものなのかを理解してもらうことを目的する。単なる概念説明に終わるのではなく、様々な事例を中心に講義を進めていく。	
			現代社会と経済	経済学の基礎的な理論について概説する。前期(ミクロ経済学)では、家計や企業といった個々の経済主体の行動を分析し、さらに、それらを通じて個々の財の市場ではどのようにして価格や生産量が決定されるかを検討する。後期(マクロ経済学)では、国民所得の概念を中心として、失業やインフレーション、さらには国際収支等々の諸問題が、なぜ、どのようにして起こるのか、そしてそれらに対して政府がどのような経済政策をいかに運営していけばよいのか、といった課題に取り組む。	
			企業と社会	本講義は、企業とは何か、企業と社会とはどのような関係にあるのか、といった基本的な問題意識から出発し、「企業の社会的責任」にまつわる諸問題について、具体的事例も交えながら学ぶ。これからの企業は、社会的責任をいかに果たすかを常に意識する必要に迫られるようになる。この社会的責任とは何なのか、それをどのように果たすべきなのか、各自が自分の現場から考えられるようにする。	
			国際関係論入門	現在、国際社会で起こっている様々な出来事を理解するためには、その理解を助ける基本的な知識と考え方が必要になる。その基本的な知識と考え方を養うためのひとつが、国際関係論である。本講義では、私たちの生活がどのように国際社会の諸問題と関係しているのかについて考える。国際関係論のなかでも特に第三世界(主にアジア、アフリカ、南米をさす)の社会構造に注目する第三世界論を中心に、その理論および実際の国々の現状を分析して、日本との関係を考える。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の概要	備考
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	社会理解	国際政治学	本講義では、国際社会における様々な事象を、政治、経済、社会、法、時には心理的分析し、国際社会の構造と動きについて学ぶことを目的とします。国家を超える国際的機関や、国境を超えて活動する企業や団体、個人も対象となる。現在の国際社会の構造の理解と現状に見られる諸問題の分析を行うにあたり、日本に住む皆さんの生活がどのように国際社会の諸問題と関係しているのかについても一緒に考えていきたい。	
			国際社会問題	現代の国際問題の多くは、イスラームが社会的に大きな影響力を持つ地域で起きている。しかしながら、日本の新聞・書籍やテレビ番組などにおけるイスラームやイスラーム世界に関する記事やニュースは、いまだ誤解が多く、それぞれの問題を正確に記述・報道しているとは言いがたい。そして、現在のイスラーム世界で起きている諸問題は、我々にとっても決して無関係なものではない。以上を踏まえ、本講義では主に現代イスラーム世界に焦点をあて、それぞれの地域・国家で起きている諸問題について解説し、視聴覚資料も利用しつつ、考察していく。	
			現代社会と教育	教育は、「当たり前」のものの見方が広く流布している分野である。この「あたり前」のこととして広がっている「常識」を疑うのが教育の社会学である。本授業では、社会学的視点と、さらに歴史的視点から教育を見ることによって、教育の「常識」を越えて見えてくるものは何かということについて追究する。	
			平和学入門	本講義では、「平和」がどう考えられてきたのか、平和をどう創り上げようとしてきたのかについて学ぶ。これから、社会を「平和」にするために、私たちはなにをするべきなのかを考える。	
			人権と社会	人権とは、人であれば誰でも生まれながらにして平等に享受できる権利のことである。しかし現代社会には、こうした人権を享受できずに、さまざまな困難に直面する人々がたくさんいる。本講義は、人権に関する入門的な講義として、国内外の人権問題を扱う。まず人権保護の枠組みを論じた後、先住民や女性、障害者、移民などの個別の人権問題を取り上げる。受講者には、国内外の人権問題に興味を持ってもらい、どのような解決法が望まれるのかを考えてもらいたい。	
		自然理解	数学	大学生の素養としての数学(微積分、線形代数など)について、特に微積分を中心に解説する。微積分についてはその定義の意味するところ、計算方法、応用に分けて解説するが、特に応用の第一歩として、実際の計算により関数の正確なグラフを描くことができるようになることが第一の目標である。講義では、具体的な問題に繰り返しあたり微積分の操作に習熟することを通じて、その考え方に慣れることを狙う。	
			数理科学	トポロジー(位相幾何学)は、図形の形状を問題にする学問である。そこでは、図形を曲げたり伸ばしたり縮めたりしても変わらない性質を探究する。本講義では、イメージしやすい2次元の図形を中心に、ある条件下でどのような図形が考えられるのか、2つの図形が同じかどうかをどう判定するのか、といった問題について考える。与えられた条件を満たすものとしてどのような可能性があるのかを全て網羅することは、一般になかなか難しい作業であるが、色々なアイデアによりそれが単純な作業に帰着出来たり、意外に簡単な結論が得られたりすることが分かる。	
			基礎統計学	まず、統計学の入門的なガイダンスを行い、経済データ等を図・表としてまとめる方法について講義する。データを図にまとめる方法として度数分布を紹介して、度数分布の形状の特徴を示す統計量として平均や分散等を紹介する。計量経済学の授業内容に関連するものとして正規分布という確率変数を説明する。また、標本理論、推定の理論、検定の理論を解説する。	
			実用統計学	人の気持ち、株価、景気、野菜の値段、等々、不確定な変動を見極めようとすれば、その背景にある様々な相互関係を解きほぐして何か法則がないか探る必要がある。また、国の経済はどうなっているのか、地域の状態は良いのか、とった対策は効果があったのかなかったのか等、知りたい情報を解き明かす方法を考える。	
			化学	錬金術から近代化学の成立に至るまでの推移を考える。錬金術と原子核反応、ラボアジェの質量不変の法則とアインシュタインの特殊相対性理論など、当時と現代の類似した科学的できごとを対比して取り上げたい。次いで、元素・原子・分子、元素の周期律と分類、原子の構造、電子の配置、化学結合、酸と塩基、化学反応及び酸化と還元について、日常の生活の中で起こっているできごとを取り上げる。基礎的な化学を通して、科学的なものの見方考え方を理解し、バランスのとれた物質観、ひいては世界観を養う一助になることを主眼にしたい。	
			生物学	動・植物の違い、細胞の多様性・共通性、生命の連続性、遺伝の仕組み、環境と動・植物の反応、生命・生命現象と物質の関係、生物の特殊性・特異性や曖昧性をもとに生物(人間)に共通する諸器官系及びバイオテクノロジー技術を含め解説し、人間とは何かを理解させる。	
			地球科学概論	地球人の活動範囲は著しく広くなり、地球上の至るところへ行くことができ、特殊な訓練をつめば宇宙まで行くことができる。その反面、地球の環境は著しく変化している。本講義は、地球がどのような姿をしているか、また地球環境がどのように変化してきたかを認識する。地球は大きく見て三つの異なった相から構成されている。気圏、水圏、岩圏である。固体地球ではこの三つの相があい接し、互いに複雑な作用を行っている。固体地球表面は大気と接する陸と海洋と接する海洋底からなり、これらは際立った対立を示している。地球科学の最近の情報を講義したい。	
			地球物理学概論	1910年頃ドイツの科学者ウエゲナーが海岸線の類似性から大陸移動説を唱えた。不動と考えられていた大陸を移動可能と考え、海洋底は年々生産され、しかも海溝で消滅する。従来説明困難であった事柄が説明できるようになった。観察の学問である地球科学に新しいデータが加わると学問体系も変化していった。今や、地球の誕生から現在まで地球に生じた変化を読みとれる時代になってきた。本講義はこのような変遷について学ぶ。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の概要	備考
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	自然理解	人類学	本講義は、人類の移動の歴史を生態、文化、経済とからめて理解することを目指す。約500万年前にアフリカで誕生した人類は、まずアジア、ヨーロッパへと、さらに、数万年前に南北アメリカ大陸、オーストラリア、オセアニアへと居住地を拡大した。歴史時代には、いくつかの民族の大移動ののち、大航海時代にヨーロッパ人による植民地化がはじまった。今日、仕事を求めた人の移動(移民)が世界規模で起きている。これら、人類の移動の歴史を人類史に位置づけて解説する。	
			物理学	ものを作る際、全体の構造の設計や強度の確認などには、材料の物理的な性質や力学を考えた計算が必要になる。物理学は単なる思い付きを集めたものではなく、きちんと検証された「法則」をまとめたものである。「法則」とは、誰が何度確かめても同じ結果になるものだけを選び抜いたものである。また、それぞれの法則の間に矛盾がないことも確認されている。「なぜ」「どうして」という問をつきつめて考え、きちんとした法則にまとめることで、世の中の仕組みを理解しようとする学問である。	
			生命倫理	生命倫理学とは、生命に関わる人間の行為について、人が人と共に幸せに生きていくためのルールを私たち全員で討論し作成していく学問である。これらルールの論点を整理し、どう対処すればよいのか、その基準をさぐることを目的とする。そのため毎回の授業は、「導入のディスカッション」→「解説」→「レポート」の順で行う。 (オムニバス方式／全15回) (34 大宮 有博／8回) 生命の終わりをめぐる倫理問題―安楽死、脳死、エンディングケア―を論じる。 (60 亀井 美穂／7回) 生命の始まりをめぐる倫理問題―特に出生前診断と選択的中断、生殖医療―を論じる。	ｵﾑﾆﾊﾞｽ方式
		歴史文化理解	日本史	小学校から高等学校まで、すでに日本の歴史は何度も学習してきているが、ややもすればそれは断片的な歴史的事象の年次的羅列に陥りがちである。本講義では、歴史が原因と結果の連鎖であることを学生諸君が意識できるように、とくに政治と社会の歴史を中心に講義を進めていく。また、日本史の講義ではあるが、アジアを中心とする国際社会との関わりもできる限り視野に入れる。	
			日本思想史	本講義は二部構成とする。第一部は日本の伝統の中核、日本人の精神の本質にあるものはなにかについて考察する。最初に日本的とか日本人好みと言われる場合のイメージについて考える。第二部では明治維新前後における日本近代思想の形成について考察する。まず、幕末維新期における対外意識の形成とその問題を取り上げる。啓蒙や民権の思想が抽象的・概念的性格を持つのに対し、より生産や生活、風土や歴史を重視するという特徴があるが、こういう思想の意味について考えながら、幕末維新期の思想を全体として振り返る。	
			中国文化入門	大抵の学生にとって、中国は近くて遠い存在だが、しかし何かと気になる国であろう。明治維新の「脱亜入欧」による中国離れ以来、とりわけ戦後の冷戦構造ともかかわって意識的にも疎遠な関係が長く続いてきた中国だが、近年急接近が図られ再び身近な存在になってきている。本講義では、その中国の文化的なバックグラウンドと今のトレンドについて講義する。	
			英米文化入門	語源の観点から、英米文化の真髄を解明する。EnglandやBritainはどういう意味か、イギリスの言葉を日本語でなぜ英語というのか、どうしてAmericaという国名がついたのか、NewYorkやChicagoという地名の由来は何か、国名や地域名、そして地名にこだわって英米文化の本質や特徴を明らかにする。	
			文化人類学入門	本講義は、文化人類学の基本的知識および方法論を、特に宗教と医療に関するテーマをとりあげながら、習得することを目的とする。全体を3部構成とし、第1部を文化人類学の視座、第2部を信仰と世界観、第3部を医療の文化とし、それぞれ以下の順序で講義を行う。第1部：人類誕生と文化、言語とシンボル、親族理論、人類学の歴史。第2部：葬送と霊魂観、儀礼と時間、身体とケガレ。第3部：病気と文化、シャーマニズム、グローバル化する近代医療、心と社会。	
			世界の近現代史	現代世界の問題の多くは近代に起因しており、また近代以降に「世界の一体化」は進展していった。このため、世界の近現代史を学ぶことは,グローバリゼーションなど現代世界の諸問題を考えるために必要である。本講義は世界の近現代史をイスラーム世界の観点から主に考察し、他地域(ヨーロッパなど)の動向との関連についても述べていく。受講者は、世界史を学ぶ意義を考えてもらうと同時に、グローバリゼーションなど現代世界の諸問題に対する問題意識を持って履修してもらいたい。	
			世界史	現代世界ではイスラームの影響が非常に大きい。このため、イスラームがどのように世界各地に広がり、定着していったのかという問題や、世界史におけるイスラームの位置づけを考えることは、世界が経て来た歴史や現代世界を理解するための手がかりの一つになると思われる。本講義では、高校世界史ではいまだ記述が少ないイスラームおよびムスリム(イスラーム教徒)の歴史を中心に扱い、イスラームとほかの地域との諸関係(政治、経済、文化など)についても言及する。なお、本講義の対象年代は7～18世紀である。	
			考古学入門	歴史学の一分野を構成する考古学とは、遺物・遺構・遺跡の検討・研究を通して過去の人間活動の総体的復原・解明を試みることである。この目的のためには文献史学・民族学・人類学・民俗学など近接する諸分野の成果との対比と総合も重要となる。講義では、主として中国古代の物質文化史を中心とする中国考古学について講義する。中国考古は先史考古学(旧石器時代、中石器時代、新石器時代)よりも歴史考古学(殷代～)が大きな比重を占めており、講義では焦点を殷周～隋唐時代に定め、物質文化・文化遺産に重点をおいて中国大陸の遺跡・出土史料などの文物考古を紹介していく。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の概要	備考
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	歴史文化理解	陶芸論	現在の社会において、芸術、美術の持つ役割は大きくなっており、持たれる関心の度合いも大きくなっている。芸術というと一般的には、美術館等で鑑賞するものという意識があるが、芸術、美術はもっと身近にあり、気軽に触れ合えるものである。本講義では、やきものを通して受講者にそうした事を伝え、共に芸術、美術について考えていく。	
			陶芸演習	やきものづくりの技術は色々あり、簡単なものから難しいものまで様々である。しかし、技術は道具の一種であり、技術がものをつくるわけではない。作者が何をつくりたいのか、それを助けるのが技術であり、無い場合には新しい技術を開発するのである。本講義では、実習形式により、やきものづくりの楽しさ、厳しさに触れるとともに、やきものに関する自分なりの見方や考え方を身に付ける。	
		環境理解	環境科学	エネルギー文明の中で、環境汚染の発生原因、自然界へ及ぼす影響及び発生抑制について考える。具体的には、化石エネルギーの大量消費によってもたらされる大気汚染、酸性雨及び地球温暖化、また、フロンガスによるオゾン層の破壊、DDTやBHCなどの農薬被害、ごみの焼却により発生するダイオキシン、自然界へ流出した化学物質による環境ホルモンの影響、肺ガンを誘発するたばこの煙、さらに、紫外線及び放射性物質などの問題について考える。	
			生態学	21世紀に入って人間の生存や文明社会持続の前提として、地球環境の保全が重要視されており、本講義では1生物圏の動態や2個々の生物種の生活史を解明する科学的方法としての生態学を論じる。1では熱帯環境に見られる生物多様性など具体的な地域情報をベースに自然の構造を紹介し、2の観点では主として霊長類などを素材として種の生活史に基礎づけられた生物群集のメカニズムや種内・種間の社会的諸関係について教授することにより、生物学を専門としない初学者に生物的自然のあり方を理解させる。	
			地球環境学	地球は太陽系の中でも、特異な環境を持つ。地球以外の惑星や多くの衛星には地球のような穏やかな自然は存在しない。これは地球の大きさや太陽からの距離、また地球の形成の条件で決まったものである。この環境により、地球のみ、生物が誕生し、進化した。この進化は地球環境に生物が適応し、さらに、生物の進化と共に地球環境も進化した。その結果が、現在の地球であり、この現在の環境は地球誕生時の環境と著しく異なるものである。地球の誕生から現在まで、環境の変遷と現在地球で問題になっている地球環境の変化を論じる。	
		身体理解	健康の科学	日本国憲法の第二十五条、「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」と定めている。本講義は、この精神を十分に理解するとともに、生命の尊厳を基盤とした個人の健康・保持増進の為の日常的努力が義務として要求されることを理解する。個人の健康を保持増進するための手立てを人文・社会科学的、自然科学的な学問研究から学び、生涯にわたって、身体的、精神的、社会的に健全な健康観を形成する契機になることを目指す。	
			スポーツの科学	「スポーツの科学とは何か」との問いに答えるためには、「スポーツ」とは何か、スポーツ活動の「主体である人間」とは何か、さらに「科学」とは何かを吟味する必要がある。本講義では、膨大な知見の中から、大学生が生涯にわたってスポーツを「健康で文化的な」生活を送るために役立てるために必要な内容について解説し、スポーツ文化の享受者であり、スポーツを愛好する教養人を育てることを狙いとする。	
			スポーツ初級A	本授業は、主に学校教育課程でも多く見られる団体種目系について、初心者レベルを対象に実技形式で実施する。種目は、サッカー・バレーボール・バスケットボール・ソフトボール・ラグビー・スキーから選択する。	
			スポーツ初級B	本授業は、主に学校教育課程でも多く見られる団体種目系について、初心者レベルを対象に実技形式で実施する。種目は、サッカー・バレーボール・バスケットボール・ソフトボール・ラグビー・スキーから選択する。	
			スポーツ中級A	本授業は、生涯スポーツの要素が強く個人または少人数で実施可能な種目について、実技形式で実施する。対象者は、ある程度基礎的な技術を持つ者、並びに「スポーツ初級A」又は「スポーツ初級B」を受講し単位を取得した者とする。種目は、テニス・バドミントン・ゴルフ・卓球・スキーから選択する。	
			スポーツ中級B	本授業は、生涯スポーツの要素が強く個人または少人数で実施可能な種目について、実技形式で実施する。対象者は、ある程度基礎的な技術を持つ者、並びに「スポーツ初級A」又は「スポーツ初級B」を受講し単位を取得した者とする。種目は、テニス・バドミントン・ゴルフ・卓球・スキーから選択する。	
			スポーツ上級A	本授業は、専門的にその種目に取り組んでいる者、並びに「スポーツ中級A」又は「スポーツ中級B」を受講し単位を取得した者を対象に、実技形式で実施する。	
			スポーツ上級B	本授業は、専門的にその種目に取り組んでいる者、並びに「スポーツ中級A」又は「スポーツ中級B」を受講し単位を取得した者を対象に、実技形式で実施する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の概要	備考
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	地域理解	地域商業まちづくり学	本講義は、商店街とそれに関連する地域コミュニティを対象として、講義形式で商店街の歴史や施策、現況やそれを取り巻く環境を概説し、商店街活性化の方向性や社会的意義の基本的理解を得ることを目的とする。 特に、コミュニティビジネスやまちづくり施策との関連性を中心にその成功事例を取り上げて、商店街活性化に必要な資源や施策について考察する。	
			歴史観光まちづくり学	本講義は、観光地あるいは(歴史的)観光資源を有する地域におけるまちづくりを対象として、講義形式で観光の社会的意義や観光の歴史、国内外の観光の実態等の基礎を学ぶとともに、とりわけ地域の歴史を通じて、観光資源の評価と抽出、また観光政策のあり方についての基本的理解を得ることを目的とする。 特に、地域の歴史的資源をいかに観光まちづくりとして再構築していくか、また観光資源をどのように評価等していくか等について考察していく。	
			減災福祉まちづくり学	本講義は、今後発生が予想される南海トラフ地震や大型台風・集中豪雨に対する減災まちづくり、および日常的取組みとしての福祉まちづくりを対象として、講義形式でこれまでの災害史と復興支援対策、コミュニティとレジリエンス、情報伝達、現状の防災対策等の実態の基礎を学ぶとともに、「減災まちづくり情報システム」を活用した減災福祉まちづくりへの取り組み方法を学ぶ。特に災害の影響は社会的弱者に大きいため、福祉的視点をとりいれたまちづくりを学んでいく。	
			地域商業まちづくり演習	授業は演習形式を基本とする。地域商業まちづくり学で培った知識を基礎として、受講者自らが商店街や地域コミュニティに関連する課題を調べ、内容を検討し、教員と受講者との質疑応答、受講者同士の討論および現地調査などを行い、課題解決策について検討する。	
			歴史観光まちづくり演習	授業は演習形式を基本とする。歴史観光まちづくり論で培った知識を基礎として、受講者自らが観光でにぎわっている地域や(歴史的)観光資源が蓄積している地域について、現状および将来展開していくうえでの地域実態や課題の整理、その課題解決策を提示するために、教員と受講者との質疑応答、受講者同士の討論および現地調査などを行い、まちづくり提言について検討する。特に本学が立地する名古屋市および瀬戸市を中心に演習フィールドとしていく。	
			減災福祉まちづくり演習	授業は演習形式を基本とする。減災福祉まちづくり論で培った知識を基礎として、受講者自らが減災に関心の高い地域に入っていって、地域住民との情報交換や交流を通じて、地域実態や住民意識、地域対応能力等について把握し、そこでの減災福祉上の課題の整理、その課題解決策を提示するために、教員と受講者との質疑応答、受講者同士の討論および地域に入っての現地調査などを行い、まちづくり提言について検討する。特に本学が立地する名古屋市南部エリアを中心に演習フィールドとしていく。	
			上級まちづくり演習	授業は演習形式を基本に行う。3つのまちづくり演習のうちどれかひとつを履修したものだけが受講できる。これまでに学修してきたまちづくりに関する知識・論点の中から自ら課題テーマを設定したうえで、これに対する教員や受講者との質疑応答・討論や現地調査を通じて、 具体的な課題解決プランを作成し、関係者の協力のもとで実際の活動を行い、その成果と課題についてレポートする。	
	言語とコミュニケーション		日本語表現	本授業は、授業を聞いて、効率的にノートを取ったり、レポートを書いたり、人前で要領よく話をするなどという、日常生活の中で常に必要とされる能力を伸ばすことを目的とする。具体的には、課題に対する三分間スピーチ、敬語の使い方、集団討論を通したディベート、三百字小説、図形を言葉で説明するなどという作業を通して、それらの能力の向上をはかる。	
			日本語表現上級	日本語を読み、聞く能力や、日本語で書き、話したりする、より高い能力を身に付けさせる。基礎的な知識やその応用は、既に「日本語表現」で終えているので、本講義では、より生きた表現能力が身に付くように、それぞれの課題に応じた応用練習問題に取り組ませたり、具体的な作品を読みながら、そのレポートを書いたり、口頭で説明させたりする作業などを行う。	
			基礎英語1	本授業では、速読に重点を置いたreading演習を通して、英語に関する基本的事項の確認とその定着をはかる。具体的にはe-learningを導入し、受講生は、ネット上にある問題を解く演習形式で授業は進められる。演習はvocabulary building, readingの各パートから成っており、各レッスンは日常生活に関するもの、ビジネスに関するもの、あるいは旅行に関するものなど何らかのトピックが設定されている。またこれらの活動と並行して、インターネットを活用し、英語で書かれたHPを読み、課題に沿った情報を読み取り、ファイルをまとめる。	
			基礎英語2	本授業は、「基礎英語1」に続いて、速読に重点を置いたreading演習を通して、英語に関する基本的事項の確認とその定着をはかる。具体的にはe-learningを導入し、受講生は、ネット上にある問題を解く演習形式で授業は進められる。演習はvocabulary building, readingの各パートから成っており、各レッスンは日常生活に関するもの、ビジネスに関するもの、あるいは旅行に関するものなど何らかのトピックが設定されている。またこれらの活動と並行して、インターネットを活用し、英語で書かれたHPを読み、課題に沿った情報を読み取り、ファイルをまとめる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
NGU教養スタンダード科目	言語とコミュニケーション	英会話1	本授業は英語で行われ、正確に英語を理解する能力を向上させることが目的である。音声のみならず、教員の身振り、手振り、口元、顔の表情などに細心の注意を払うことにより、コミュニケーションスキルとしての英語力の醸成を図ることを目標とする。テキストは各教師によって異なるが、全体学習、グループ討論、課題学習などが各教員の指示によって行なわれる。	
		英会話2	本授業は英語で行われ、「英会話1」に続いて、正確に英語を理解する能力をさらに向上させることが目的である。この授業でも音声のみならず、教員の身振り、手振り、口元、顔の表情などに細心の注意を払って聞き取ることの必要性を身に付けさせる。テキストは各教師によって異なるが、全体学習、グループ討論、課題学習などが各教員の指示によって行なわれる。	
		入門ドイツ語1	ドイツ語を読み書き話すために欠くことのできない基本的な文法知識を学ぶ。ドイツ語それ自身は極めて厳密な文法構造を持った言語であり、この言語を学ぶことは同時にまたものごとを正確に精密に考える力を養うことにもつながる。言語学的には、ドイツ語は英語と同様にゲルマン語に属する言語であり、両者の関係は歴史的に非常に深い。初学者は見慣れない文法項目に驚きながらも、二つの言語間に類似性を見出すことも多いであろう。	
		入門ドイツ語2	入門ドイツ語1を継続し、過去や未来の表現、受動態、関係代名詞など、さらに進んだ文法知識を習得する。	
		基礎ドイツ語1	「入門ドイツ語」で学ぶ基本的な文法知識を反復練習しつつ、現代ドイツ語で書かれた、やさしく興味のもてる読み物を読んでいく。言葉は単にコミュニケーションの手段であるばかりではなく、同時に我々の日常的な考え方、感じ方をそれと意識できないほど深く規定している。ドイツ語を学ぶことは、単にドイツ語を話す人たちとの意志疎通をはかるばかりではなく、彼らの考え方、感じ方を学ぶことでもある。言葉を通して、異質な文化をも学んでいきたい。	
		基礎ドイツ語2	「基礎ドイツ語1」を継続し、さらに進んだ表現形式を学びながら、異文化理解を深めていく。	
		入門フランス語1	英語全盛の時代であるが、国際機関における公用語として第二の勢力を維持し続けるフランス語に触れておく意義は大きい。本科ではフランス語の基礎を、綴りの発音から徹底的に学ぶ。フランス語学習の最初のつまずきは、綴りが読めないことに起因するからである。それから徐々に日常の基本単語、基本表現を覚えてゆく。	
		入門フランス語2	「基礎フランス語1」に続く科目である。本科では特に動詞の活用に力を入れたい。フランス語の動詞活用の難しさはフランス語学習の第二の関門であるが、これを越えなければフランス語習得は叶わない。	
		基礎フランス語1	入門フランス語と組みになって、1年次終了時に実用フランス語技能検定試験5級程度（学習50時間以上）の実力をつけたい。入門で学んだ基礎知識をさらに定着させ応用する。	
		基礎フランス語2	「基礎フランス語1」に続く科目である。フランス語検定試験5級の実力をめざし磨きをかける。	
		入門スペイン語1	スペイン語は、世界の数億人が日常的に使っている言語であり、スペイン以外にも中南米などで話されている国際語である。海外では、その実用性の高さから、スペイン語教育が急速に発展している。また、日本には約6万人の中南米出身者が住んでおり、ここ東海地方には多くの集住地域があることから、教育や医療分野でのスペイン語習得に対する関心が高まっている。「スペイン語1」はスペイン語の基礎を習得するクラスであり、スペイン語の発音に慣れ、基本的な挨拶表現と現在時制を用いた自己表現ができるようになることを目的とする。	
		入門スペイン語2	スペイン語は、世界の数億人が日常的に使っている言語であり、スペイン以外にも中南米などで話されている国際語である。海外では、その実用性の高さから、スペイン語教育が急速に発展している。日本には約6万人の中南米出身者が住んでおり、ここ東海地方には多くの集住地域があることから、教育や医療分野でのスペイン語習得に対する関心は高まっている。本授業は、「入門スペイン語1」に続き、スペイン語の基礎を習得するクラスであり、スペイン語の発音に慣れ、現在時制を用いた基本的な自己表現ができるようになることを目的とする。	
		基礎スペイン語1	入門スペイン語と組みになって、1年次終了時にスペイン語検定試験6級もしくは5級程度の実力をつけたい。入門で学んだ基礎知識をさらに定着させ応用する。	
		基礎スペイン語2	「基礎スペイン語1」に続く科目である。スペイン語検定試験5級の実力をめざし磨きをかける。	
		入門中国語1	中国語の発音、文字表記、基礎的な語彙、基礎的な文型や日常よく使う文句、などを学習し、会話の練習を十分に行い、最低限のコミュニケーション能力を習得できるよう授業を行う。さらに、中国語の能力を高めるだけではなく、中国の社会・文化、中国人の考え方・生活習慣など中国についての関心を高め理解を深められるようにもする。	
		入門中国語2	中国語の発音、文字表記、基礎的な語彙、基礎的な文型や日常よく使う文句、などを学習し、会話の練習を十分に行い、最低限のコミュニケーション能力を習得できるよう授業を行う。さらに、中国語の能力を高めるだけではなく、中国の社会・文化、中国人の考え方・生活習慣など中国についての関心を高め理解を深められるようにもする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
NGU教養スタンダード科目	言語とコミュニケーション	基礎中国語1	中国語の発音、文字表記、基礎的な語彙、基礎的な文型や日常よく使う文句、などを学習し、会話の練習を十分に行い、最低限のコミュニケーション能力を習得できるよう授業を行う。さらに、中国語の能力を高めるだけではなく、中国の社会・文化、中国人の考え方・生活習慣など中国についての関心を高め理解を深められるようにもする。	
		基礎中国語2	中国語の発音、基礎的な語彙、基礎的な文型や日常よく使う文句、などを学習し、会話の練習を十分に行い、最低限のコミュニケーション能力を習得できるよう授業を行う。さらに、中国語の能力を高めるだけではなく、中国の社会・文化、中国人の考え方・生活習慣など中国についての関心を高め理解を深められるようにもする。	
		入門韓国語1	ハングルの創製原理と歴史を考察し、韓国語の言語的特徴と構造を日本語と比較しながら学習します。文字の読み書きと基礎的な発音規則、挨拶などの簡単な会話を勉強します。	
		入門韓国語2	発音規則に沿った文章の読み方と綴り方の練習と、助詞の使い方や用言の語尾活用の基礎、さらに叙法や待遇法などの基礎文法を勉強します。	
		基礎韓国語1	韓国のテレビドラマを観ながら、挨拶などの日常生活に必要な表現や決まり文句などを、まずは文字から離れて耳と口で覚えていきます。大きい声で繰り返して発音することによって、頭の中で言葉を組み立てるのではなく、自然に口から言葉が出てくるように練習します。その過程の中で、文字や文法に対する知識も身につけていきます。また、ドラマを通して韓国人の慣習、文化、生活感覚に対する理解を深めていきます。	
		基礎韓国語2	韓国のテレビドラマを観ながら、挨拶などの日常生活に必要な表現や決まり文句などを、まずは文字から離れて耳と口で覚えていきます。大きい声で繰り返して発音することによって、頭の中で言葉を組み立てるのではなく、自然に口から言葉が出てくるように練習します。その過程の中で、文字や文法に対する知識も身につけていきます。また、ドラマを通して韓国人の慣習、文化、生活感覚に対する理解を深めていきます。	
		手話入門	手話は「言語」である。聴覚障害者の手まねとして、長く偏見の目にさらされてきた「言語」でもある。手話は福祉関係者だけの狭隘なものでもなく、ボランティアと同義語でもない。本授業では、「言語」としての手話を、誰でもが、気楽に学べるよう、テレビドラマ、映画、歌などを副教材にして、手話の読解力と表現力の初歩を修得する。	
		手話基礎	手話は「言語」である。聴覚障害者の手まねとして、長く偏見の目にさらされてきた「言語」でもある。手話は福祉関係者だけの狭隘なものでもなく、ボランティアと同義語でもない。本授業では、「手話」受講者もしくは手話の初歩を修得した者を対象に、手話の読解力と表現力の応用を修得する。	
	情報理解	情報処理基礎	現代社会においては、インターネットを始めとして多様な情報が流通し、利用されている。また、どのような分野においても、情報というものを処理することにより問題を解決し、判断をすることが行われている。情報処理に関する基本技能や基礎知識は、大学生が基礎教養として学習しなければならないものとなっている。本授業は、ノートパソコンで例題を演習する実習形式で、ワープロソフトによる文書作成、表計算ソフトによるデータ処理、及びネットワーク利用に関する最低限必要な知識や技能を身に付ける。	
		情報概論	本講義では、情報とは何かをはじめ、情報の表現方法、情報処理の仕組み、情報の活用方法に関する概念、原理、仕組み、技法などを分かり易く解説するとともに、これまでにどの様なICTが知られているか、また実際にICTがどの様に利用されているかについても概説する。指定テーマに関するいろいろな概念、原理、仕組み、技術などを取り上げて解説を行い、テーマと関連のある実践的な課題を示し、その課題の解答を完成させる「双方向コミュニケーション」講義方式を採用する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
NGU教養スタンダード科目	教職	教職論	本講義は教職への意欲を高めることを目的とする。具体的には、教職の意義と役割について理解すること、戦前戦後の教員の歴史について理解すること、教師の基本的・具体的資質について理解すること、現代公教育における教員の使命を理解すること、教員の職務について理解すること、教員の力量形成とその支援について理解すること、教員養成制度の概要について理解することを目指す。	
		教育原理	教育という営みは、教授過程と学習過程から成立するものである。学生のこれまでの教育との関わりは、もっぱら教えられる側、学ぶ側に身を置き、学習過程を経験することが中心であったであろう。それが、教職を志すという立場に立つことで、今度は教える側になり、様々な教育現象を捉え、対処することが求められるようになる。すなわち、本講義を受講することから、教授過程への第一歩を踏み出すわけである。そのため、本講義は、教育学への入門的性格を有している。教育学の各領域を概観しながら、教育に関わる諸現象を多角的・多面的に捉える。	
		教育心理学概論1	教育心理は心理学の諸理論を教育の現場に応用する科学である。学校教育を考える上で、教育心理学に関するさまざまな知識や技術を習得し、それらを利用しながら教育に関わる現象を分析的に捉えることは重要である。また、近年、「不登校」、「いじめ」、「学級崩壊」といった学校をめぐる出来事が社会問題化してきている。本授業では、教育心理学の基本的な用語や理論を正確に理解し、実際の教育現場をイメージしながら自分の中に取り入れ、学校をめぐる問題を心理学的に考える基礎を養うことを主な目的としている。主として、発達と学習の基礎的問題を取り上げる。	
		教育心理学概論2	本講義は、主として、「教育心理学概論1」の内容をふまえ、教育の方法などの具体的問題を考えながら、学習における”時”の問題（レディネス）、学習のプロセスで生じる意欲の形成と喪失の問題（モーティベイション）、学習者のもつ資質の問題（パーソナリティとハンディキャップ）、教育の方法論の問題（人間関係のダイナミックス）、学習材料のもつさまざまな性質と学習者の反応の問題などについてできるだけ具体的に検討していく。	
		教育制度論	教育に携わる者にとって今日の教育制度及び教育法規についての理解と認識は欠くことのできない基本的要件である。この授業では、教育制度の歴史に関する認識を深めるとともに教育実践がどのような制度制度と教育法規の中で営まれているかということについての基本的知識を獲得することを目的とする。	
		特別活動論	本科目においては、学生（個人あるいはチーム）が主体となって、「特別活動」あるいは「総合的な学習の時間」におけるいずれかの活動を選択して、その性質を探究したうえで、そのよりよい在り方（授業案あるいは計画案）を提案するプロジェクトを実行する。プロジェクトにおいては、課題に対しての調査分析（少なくとも1回のフィールドワークを含まなければならない）を通して、最終報告書（提案書）を作成し、プレゼンテーションを実施する。	
		教育の方法と技術	激しく変わる教育環境の中でメディア（特にコンピュータ）利用の研究・実践と授業デザインは教育方法の中心的課題である。コミュニケーションとしての教授・学習過程の中で、教師主導の教材提示型のメディアの利用ではなく、学習者が自ら学び、思考の道具として使えることが大切である。「心理学からの新しい学びへの提案」「コミュニケーションとしての教授・学習プロセス」「学習・教授を支援するメディア」「授業デザイン」を主なテーマとして講義は構成される。	
		道徳教育論	本講では、道徳に大きな関心を表わす林竹二、灰谷健次郎、谷昌恒、梅原猛、当該担当教員の書物、研究論文などを通し、また、宮沢賢治の作品、ボランティア活動記録、中学校学習指導要領、聖書などを参考資料として、道徳教育論の授業をすすめ、受講者が道徳的指導力、実践力を身に付けることを目指す。各講義の後半で、受講者に「生きる意義、いのちの尊さ、正義、愛、平和、差別、悪、利他、エゴ」などからテーマを選び、そのことについて発表する機会をも設ける。	
		生徒・進路指導論	現在の学校教育において、生徒一人ひとりに規範意識を育成していくことが、生徒指導・進路指導・教育相談を推進していく上で、重要な役割を果していることを認識するとともに、規範意識を育成するために教育活動を地道に実践している学校や教師の姿勢を視聴（DVD）したり、具体的な生徒指導・進路指導・教育相談の実践指導事例を読んだりして、教師の子どもに対する関わり方、対応の仕方の基礎を養う。	
		教育相談	本講義は、教免法における「生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目」に該当するものであり、教育相談について論じる。今教育界で問題になっている不登校、いじめ、非行、学校崩壊といった領域の問題を直接考えなければならない科目である。教育相談は、教育相談の意義、教育相談の基本的な技法、学校での教育相談の進め方等を学習する。特に、不登校、いじめ、非行等の子どもたちへの取り組みは、事例を挙げながら考えて行きたい。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	国際文化理解英語1	本授業は、欧米やアジア・アフリカ諸国など世界各地で話題になっている政治的・経済的・社会的な問題を扱った英字新聞を読み、学生が国際問題についての理解を深めることを目的とする。学生は、指定された英字新聞の記事を毎回読み、翻訳を作成して授業にのぞむ。授業中は、学生と教員が該当部分の内容を確認し、質疑応答を行う。また必要に応じて、教員が新聞記事の解説を加える。	
		国際文化理解英語2	本授業は、「国際文化理解英語1」に引き続き、欧米やアジア・アフリカ諸国など世界各地で話題になっている政治的・経済的・社会的な問題を扱った英字新聞を読み、学生が国際問題についての理解を深めることを目的とする。学生は、指定された英字新聞の記事を毎回読み、翻訳を作成して授業にのぞむ。授業中は、学生と教員が該当部分の内容を確認し、質疑応答を行う。また必要に応じて、教員が新聞記事の解説を加える。	
		留学英語中級	本授業は、TOEFL問題の学習を通して、英語の基本的な能力を身に付けることを目標とする。毎週の講義、練習問題を通してTOEFLの独特な出題形式に慣れるとともにListening, Reading, Grammar, Vocabularyの学習方法を身につける。TOEFLは欧米の大学へ入学するために必要な英語力があるかどうかを測る試験であるので、Listening, structure & written expression, readingから構成されており、本講義ではすべての項目をバランスよく扱う。	
		留学英語上級	本講義は、留学英語の上級者向けのコースで、英語圏への留学を志す学生を対象に、さらなる英語力の向上と異文化理解を深めることを目的とする。英語力については、英語圏の大学留学に必要とされるTOEFL ITP 500～550点が目標であり、TOEFL ITPで測られる技能(1) listening, (2) reading, (3) structure and written expressionを向上させることを目指す。また、ビデオ教材を題材にディスカッションやリーディング活動を通して、留学先に対する異文化の理解を助け、留学先で実際に必要となる英語力を身に付ける。	
		TOEIC英語入門	TOEICは、英語を母語としない人を対象に実施され、実社会で個人の英語運用能力を保証する最もスタンダードな試験になっていると言っても過言ではない。この授業は、いままでの英語学習で培ってきた成果を踏まえ、語彙力、読み取り能力、リスニングなどの強化を行いながら、このTOEICでのスコア・アップを目的とする。	
		TOEIC英語基礎1	この授業では、いままでの英語学習で培ってきた成果を踏まえ、語彙力、読み取り能力、リスニングなどの強化を行いながら、TOEICでのスコア・アップを目的とする。TOEICの出題形式や傾向にそって授業を行うが、単に試験のノウハウに終わるのではなく、総合的な英語コミュニケーション能力の向上に結びつけることも大きな目標である。	
		TOEIC英語基礎2	「TOEIC英語基礎1に続くこの授業では、さらに語彙力、読み取り能力、リスニングなどの強化を行いながら、TOEICでのスコア・アップを目的とする。ここでもTOEICの出題形式や傾向にそって授業を行うが、総合的な英語コミュニケーション能力の向上に結びつく基礎的英語運用力を身に付けさせる。	
		TOEIC英語実践1	「TOEIC英語基礎1・2」での学習による基礎的英語力の向上を基礎に、さらに高い実用的な英語運用能力を目指すための指導を行う。この授業で求める英語学力はTOEIC700点を目標とし、海外での実務場面において基本的な英語コミュニケーションが可能な段階を目指す。	
		TOEIC英語実践2	「TOEIC英語基礎1・2」および「TOEIC英語実践1」での学習による基礎的英語力の向上を基礎に、さらに高い実用的な英語運用能力を目指すための指導を行い、国際共通語としてのコミュニケーションスキルとして実践的な場面を想定した学習を行う。この授業で求める英語学力はTOEIC700点を目標とし、海外での実務場面において基本的な英語コミュニケーションが可能な段階を目指す。	
		ビジネス英語1	海外とのビジネスの現場では、歴史・文化・政治・経済・言語・発想などの違いに起因する様々な誤解や摩擦が起きている。そこでは、双方の習慣、思考方法、相手の立場を理解し、簡潔で明快な英語表現をすることが重要になります。この授業では、そうしたビジネス現場での英語の特徴を学ぶと共に、実際のビジネス文書例、映像などを使って、英語コミュニケーション能力（聴く、読む、書く）の向上を目指す。	
		ビジネス英語2	この授業は、「ビジネス英語1」に続き、ビジネス現場での英語の特徴を学ぶと共に、実際のビジネス文書例、映像などを使って、英語コミュニケーション能力（聴く、読む、書く）の向上を目指す。	
		時事ドイツ語1	一年次の「入門ドイツ語」および「基礎ドイツ語」では初等文法を学びながら、ドイツ文化への理解も目ざしてきた。「時事ドイツ語」は「応用ドイツ語」とならんで、ドイツ語のコミュニケーション能力のさらなる発展をめざしながら、現代ドイツ社会の様々な局面に注目する。現代ドイツについて書かれた平易なテキストを読みながら、時事的な語彙を習得し、ドイツの社会や文化への関心を深めていく。	
		時事ドイツ語2	「時事ドイツ語1」を継続し、ドイツの社会や文化への関心を深めていく。	
		応用ドイツ語1	初等文法を終えたことを前提に、一年次で学んだ基礎知識を確認しながら、その応用力を身につける。日常会話に不可欠な表現や、一歩進んだ文法知識を習得し、ドイツ語によるコミュニケーション能力に磨きをかける。そのためにはドイツ文化への理解も深めていかなければならない。テーマ性のある楽しいテキストを読みながら、読解力を養い、あわせてドイツ人やドイツ文化の特性も理解していく。	
		応用ドイツ語2	「応用ドイツ語1」を継続し、ドイツ語によるコミュニケーション能力に磨きをかけていく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	実践ドイツ語1	「実践ドイツ語」では、1年次および2年次で学んだ文法的知識を確実なものにし、ドイツ語の実践力を養う。会話や作文に重点を置き、日常会話に困らない力を身につけ、ドイツ語による自由な自己表現力の獲得をめざす。またドイツ社会や文化への理解をさらに深めるために、ドイツ人がドイツ人のために書いたテキストを読みながら、文法的に複雑な表現や、文化的背景を知ってはじめて理解できるような文章をも読み解けるようにする。	
		実践ドイツ語2	「実践ドイツ語1」を継続し、ドイツ語の実践的応用力に磨きをかける。	
		時事フランス語1	本授業は2年次のフランス語科目である。基本的文法事項について習得していることを前提として、時事問題を教材により高度なフランス語に接してゆく。現実のフランス生活などをモデルとした教材を使用して基本的なコミュニケーション力を身に付けることが目標となる。応用フランス語と組みになって、2年次終了時にフランス語検定試験4級、さらには同3級の実力を目指したい。	
		時事フランス語2	本授業は「時事フランス語1」に続く科目である。日常生活における基本的コミュニケーション能力の初等部分がある程度活用できるようになり、語学レベルとしてはフランス語検定試験4級の実力達成を目標とする。	
		応用フランス語1	本授業では、1年次に習った基礎知識をさらに発展させ、使いこなせるようにする。初頭の文法の習得がある程度前提となり、現代フランス社会の日常常識や生活教最小限必要な会話等が出来るレベルを目指す。語学としての目標はやはり、フランス語検定試験3・4級の実力達成である。	
		応用フランス語2	本授業は「応用フランス語1」に続く科目である。フランス語の理解力（読む、聞く）だけでなく、自ら使いこなす力（書く、話す）の基礎を固めてゆく。	
		実践フランス語1	本授業は、2年次までのフランス語学習を終えてさらに上を目指したい者のための科目である。実力的には、実用フランス語技能検定試験3級、できれば準2級まで目標にしたい。日常的なフランス語運用能力が身についたレベルであり、将来的にはフランスへの語学研修も視野に入れている。	
		実践フランス語2	本授業は「実践フランス語1」に続く科目である。フランス語圏への留学なども視野に入れた会話力、読解力を養うことを目標に、視聴覚教材なども用い、しっかりした基礎フランス語能力を磨く。	
		時事スペイン語1	本授業は2年次のスペイン語科目である。基本的文法事項について習得していることを前提として、時事問題を教材により高度なスペイン語に接してゆく。現実のスペイン語圏などをモデルとした教材を使用して基本的なコミュニケーション力を身に付けることが目標となる。応用スペイン語と組みになって、2年次終了時にスペイン語検定試験4級の実力を目指したい。	
		時事スペイン語2	本授業は「時事スペイン語1」に続く科目である。日常生活における基本的コミュニケーション能力の初等部分がある程度活用できるようになり、語学レベルとしてはスペイン語検定試験4級の実力達成を目標とする。	
		応用スペイン語1	本科目では、1年次に習った基礎知識をさらに発展させ、使いこなせるようにする。初頭の文法の習得がある程度前提となり、スペイン語圏社会での日常常識や生活教最小限必要な会話等が出来るレベルを目指す。語学としての目標はやはり、スペイン語検定試験4級の実力達成である。	
		応用スペイン語2	本授業は「応用スペイン語1」に続く科目である。スペイン語の理解力（読む、聞く）だけでなく、自ら使いこなす力（書く、話す）の基礎を固めてゆく。	
		実践スペイン語1	本授業は、2年次までのスペイン語学習を終えてさらに上を目指したい者のための科目である。実力的には、スペイン語検定試験3級まで目標にしたい。日常的なスペイン語運用能力が身についたレベルであり、将来的にはスペインへの語学研修も視野に入れている。	
		実践スペイン語2	本授業は「実践スペイン語1」に続く科目である。視聴覚教材なども用い、しっかりした基本的なスペイン語能力を磨き、実践場面での応用能力を身に付けるように指導する。	
		時事中国語1	時事的な教材を用いて、中国の現代社会の一般的な様相を知ると共に、新語や外来語を用いた時事的な内容を含む会話体や文章体のテキストが理解できるようにする。同時に、中国語における新語や外来語の表現方法の基本を理解し、今後も新たに現れるであろう新語や外来語の表現にも対応できる知識を身に付ける。また時事的な内容について、簡単な口頭のやり取りができるようにする。	
		時事中国語2	「時事中国語1」に続き、中国の現代社会について、より広い範囲に題材を取った教材を用いることによって、理解力を高める。また、時事的な内容のテキストをより多く読むことによって関係の語彙範囲を広げ、見て理解できる語彙を増やすことによって読解力を高める。さらに、関連の話題について、聞き取りや口頭の表現などの会話力、および、簡単な文を作ることができる作文能力を養成する。	
		応用中国語1	1年次配当の中国語科目「入門中国語」、「基礎中国語」の基礎の上に、次のことを身に付けることを目指す。会話体については、1年次の基本的応答からさらに語彙範囲を広げて、まとまった内容のやり取りを学習する。また音声面では、簡単な内容の聞き取りや口頭表現が無理なくできるようになることを目標とする。文章体については、複文やある程度のまとまった文章が、辞書を利用して理解できるようにする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	応用中国語2	2年次後半の配当科目として、次のことを身に付けることを目指す。会話体については、生活上の様々な場面を想定した表現を知り、併せて聞き取り能力も養成する。日本語との言語習慣の違いなどを含めて中国語についての理解を深め、ある程度の長さのある内容について、口頭で表現できることを目標とする。文章体については、解釈する力を伸ばし、また簡単な文については、辞書を利用して作文できる力を養う。	
		実践中国語1	3年次配当の選択科目であるので、履修者の実力に相応した教材を利用して、実践できる語学力を総合的に身に付けることを目標とする。音声面では、実社会で中国語の簡単な会話ができるように発音とリスニングに磨きをかけ、聞いて理解したり口頭で表現できる範囲を広げる。また、中級程度の語彙を使った文章を理解できる力を養い、語彙については初級から中級語彙2000語程度を獲得することを目指す。	
		実践中国語2	3年次後半の配当科目であることを踏まえ、卒業後に社会で実際に役立つ中国語の実践力を身に付けることを目指す。音声面では、様々な場面を想定しての会話のパターンを知り、リスニングや口頭表現の力を付ける。また、書かれた中国語の理解力についても、様々な場所で目にする文章内容にできるだけ広く触れ、内容を把握する力を養う。「実践中国語1」に続いて、中級語彙3000語程度を獲得することを目指す。	
		コミュニケーション中国語1	中国語の4つの方面(聞く・話す・読む・書く)の基礎を身に付けるのと並行して、相手について尋ね、自分について話す、というコミュニケーション力の向上を重視する。まず、新出語句や文法ポイントを理解し、次に、文法例文を言えるようにし、更に、それらをベースに単語を入れ替えて、自分が相手に尋ねたい文を言えるように、尋ねられた方もそれに答えられるように、多く練習を取り入れる。	
		コミュニケーション中国語2	「同1」に引き続き、中国語の4つの方面の基礎を身に付けるのと並行して、相手について尋ね、自分について話す、というコミュニケーション力の向上を重視する。まず、新出語句や文法ポイントを理解し、次に、文法例文を言えるようにし、更に、それらをベースに単語を入れ替えて、自分が相手に尋ねたい文を言えるように、尋ねられた方もそれに答えられるように、多く練習を取り入れる。	
		ビジュアル中国語	動画(映画・ドラマ等)を教材として、実際の情景を見ながら言語表現を理解し、基本的な表現については、聞き取りや表現の能力を身に付けることを目指す。教材使用時は字幕の切り替えを利用し(中国語字幕、日本語字幕、英語字幕の併用表示等)、複数の字幕を見ることによって、言語間の表現の違いに対する意識を高め、中国語の語学力へ反映させる。また、平易な部分については適切な日本語に直せるよう、和訳の能力も養成する。	
		日常中国語1	難易度の高い中国語の文章を読めるようになったり、議論や討論など比較的高度な会話ができるようになることを目指すのではなく、中国に行ったおりに生活において日常的に使う必要のあるであろう比較的簡単な中国語を学び、実際にそれを十分に使いこなせるようなることを目指す。中国において日常的によく使いそうな文や単語を学び、それを使いこなせるように練習する。また、中国の社会・文化、中国人の考え方・生活習慣など中国についての関心を高め理解を深められるようにもする。	
		日常中国語2	難易度の高い中国語の文章を読めるようになったり、議論や討論など比較的高度な会話ができるようになることを目指すのではなく、中国に行ったおりに生活において日常的に使う必要のあるであろう比較的簡単な中国語を学び、実際にそれを十分に使いこなせるようなることを目指す。中国において日常的によく使いそうな文や単語を学び、それを使いこなせるように練習する。「日常中国語1」を引き継ぎ、より幅広い内容について話せるようになることを目指す	
		中国語検定読解入門	中国語の検定試験において、初級程度から受験できる試験が増加しており、これに対応する総合力を付ける。中でも特に通常の授業用教科書のみでは不足しがちな語彙力と、まとまった文章を読む読解力を伸ばす。各履修者が目指す検定で要求される語彙数の獲得を目指し、相応したレベルの文章が理解できるよう読解練習を行う。また、文型の面では、基本パターンを網羅的に学習することによって体系的な理解を目指す。	
		アジア言語入門1	フィリピンは日本に最も近い東南アジアの国である。日本で暮らす外国人のうち、3番目に数が多いのがフィリピン人である。このように身近なフィリピンの国語・フィリピン語を学ぶ。フィリピンの概要、言語事情に関して、2回授業を行い、フィリピン語の位置づけを理解してもらった後、言葉の学習に入る。初学者を想定し、教科書を使用し、初級程度の語学力を習得させる。	
		アジア言語入門2	アルファベットで表記し、発音しやすいインドネシア語は、短期間でマスターしやすい言語である。もともとはマレー社会(現在のインドネシア、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピンの一部)の交易語であり、「外国語」として学ばれ、話されていたため、時制の変化や格(主格・所有格・目的格)の区別がないなど、文法が比較的簡単だからだ。絵本、歌などを教材に、インドネシアの暮らしを学びつつ、旅行でつかえるインドネシア語を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	コンピュータ技法1	Microsoft Word とMicrosoft Excel について、在学中の学習や卒業論文作成に役立ち、また、卒業後に社会で要求される技能や関連の知識を身に付けることを目標とする。1年次の全学必修科目「情報処理基礎」で使用するMicrosoft Officeのテキストにおける未習部分を継続して実習する。また学部の特色としてのグローバルな学習内容に対応できるよう、Windows上での各言語の入力方法や文字表示についても学習する。	
		コンピュータ技法2	Microsoft PowerPointを使ったプレゼンテーションファイルの作成とプレゼンテーション実習を行う。表面的な技術のみでなく、プレゼンテーション作成に当たっての内容のまとめ方・相手に受け入れられる提示方法・視覚的に効果的な表現方法等についての知識を習得する。併せて、情報を収集して自分の作成するファイルへ入れて使用する際の著作権の考え方を知る。また、併せてSNSの利用法の紹介と実習、および使用時の倫理(情報倫理)を知る。	
	国際理解科目	国際文化論	本講義はグローバル時代の国際文化の概念とあり方を考察するとともに、具体的な事例を紹介しつつ、文化の国際性という問題に言及する。授業では、ヨーロッパ・ドイツ、東アジア・中国、東南アジア・フィリピンの3地域・3か国を取り上げ、諸地域・諸国の文化的特質を論じ、国際的な文化への理解を深める。それぞれの民族歴史的特質、文化的価値観・社会規範を紹介し、国際文化の多様性、異質性、及び共通性を理解する。異文化を理解し、文化を比較する視点を養うことを目指す。 (オムニバス方式／全15回) (2 黄 名時/5回) 東アジア・中国の文化的特質について講義する。 (4 土屋 勝彦/5回) ヨーロッパ・ドイツの文化的特質について講義する。 (31 佐竹正明/5回) 東南アジア・フィリピンの文化的特質について講義する。	オムニバス方式
		キリスト教文化論1	人類の歴史において、音楽と宗教は密接な関係を保っている。音楽には感情を増幅させる働きもあり、宗教を伝える言葉もまた、本来は音声である。声に出して読み、語り伝えるためには、発声、発音、アクセント、リズムなどの音声表現に付随する韻律要素を含んでいる。キリスト教はそのルーツであるユダヤ教と同じように神を賛美し、歌うことを重視してきた。祈りは歌へと通じ、旧約聖書には様々な楽器が登場し、出エジプト記にある「主に向かって歌え」(15:21)は、弦楽器が奏でる詩編の祈りを経て、J.S.バッハに至る賛美の歌の原点にもなっている。嬉しい時も悲しい時も、神に向かって歌った歴史もキリスト教の文化を作り上げてきたのである。本科目では、旧約聖書、新約聖書の内容を伝えるために、音楽がどのように用いられてきたか、礼拝のテーマに基づいて教会音楽を分類し、その役割や機能について学ぶ。	
		キリスト教文化論2	人はこれまで、言葉や絵、文字にはじまり、紙、印刷、写真、録音、映像といったメディア技術の進歩に応じて情報伝達をしてきた。西洋のキリスト教芸術はそもそもの始めから、超越的な神や聖なる存在を、眼に見える形や色彩で表現しうるか、という大きな課題から出発している。キリスト教は、絵の具などの物質的な材料で不可視の霊性をとらえることの不可能性を自覚しつつも、信徒の教化や徳の養成に、芸術や聖堂建築を積極的に利用し作品として生み出していった。中世から近世の作品に描写されている芸術表現の歴史を辿ることで、そこにはリアリズムを求める立体的表現、円環的に配される群像、高度な遠近法が用いられる背景など、絵画技術の進歩をキリスト教芸術から学び知ることができる。本科目ではキリスト教芸術の主題や図像について聖書学から学ぶとともに、作品表現の様式的な変化を生じさせた時代背景や要因についても紹介する。	
		文化人類学	本講義は、人間の社会化の過程を文化を通して理解することを目指す。人間は社会的動物であり、生まれてからその生涯を終えるまで常に他人との関りの中で成長していく。育児、教育、介護、看護などは、他人への関与が集中的に行われる行為である。このような行為は、一方向的だと考えられがちだが、実際は双方向的な行為である。人間と人間が関与しあう行為を、日本の例だけでなく、海外の異文化の事例からも広くとらえて考察する。	
		グローバル社会文化論	世界は国境という高いハードルで相互に隔離されることで固有性を保持してきたといってよいだろう。近年のヨーロッパの経済的統合に端を発した動きは単なる経済協力にとどまらず政治的共同や集団的安全保障等の軍事的側面までを包括的に統合する地域原理となっている。それはその域内の権益保護であると同時に他地域に対する国際問題上の優位性を誇示するものでさえある。しかし、文化は本来的にそのような垣根を越境することで文化の国際性を保ってきた。歴史的に見ても、それはアジアと西欧世界、キリスト教世界と非キリスト教世界、ローマ的世界と非ローマ的世界の関係が文化の交流によって超越されてきたことからもわかるように、歴史と人的交流が国境や民族や宗教を超えてグローバルな文化的世界を形成してきた。現代にいたってそれは情報ツールの飛躍的な発展・変化とも連動し、地域や世代を越えて新たな文化を創造していく源泉となっているのである。そのような社会の中の文化交流と文化変容、そして文化創造のプロセスを分析してみよう。 (オムニバス方式／全15回) (4 土屋 勝彦/7回) 木村の講義を踏まえ、西欧世界や宗教文化の諸問題について講義する。 (28 木村 光伸/8回) グローバル社会の文化に関わる総論と非西欧的世界から見たグローバル文化論について講義する。	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学部共通科目	国際理解科目	日本史概説	外国の文化を尊重するためには、その前提として自国の文化と歴史に理解を深めておく必要がある。本講義では、日本の歴史について政治史を中心に古代から近現代まで概観し、専門科目において文化や対外関係の歴史を学ぶための前提としての歴史的知識を理解することを目的としている。ただ、政権の移動を追う表層的な歴史ではなく、その時代の特色を理解することに主眼を置き、断片的知識として集積されている高校までの日本史で学習した知識の再構成もはかる。	
		日本文化論	国際文化学部の専門科目においては世界各地の社会や文化を学ぶが、その前提になるのは日本人としての日本文化に対しての理解である。日本文化の「文化」としての特質を理解してこそ、世界各地の文化の特質の理解も可能となる。本講義は、親子関係・世襲を中心とした家族・家元文化、日本国内の東西文化の差異とその歴史的背景、韓国との文化比較などの観点から日本文化の特質に多角的にアプローチし、理解を深める。	
		比較宗教論	日本宗教は今日に至るまでどう成り立ったのか。神道、仏教、儒教、道教、民俗宗教を取り上げ、日本の宗教文化の変遷を探る。明治時代以降、日本社会は近代化と共に欧米文化を積極的に取り入れ、その影響は日本宗教にも影響を及ぼした。キリスト教をはじめとする一神教は、日本宗教と比べ、歴史観や自然観と共に大きく異なる。一方で日本宗教もまた、仏教、儒教、道教といった外来宗教の影響によって、土着の伝統と相互に影響を及ぼし合いながら、今日まで形成してきた。宗教について学ぶことは、人間の精神史にもつながり、古代から現代社会を時代背景にして、宗教が文化や政治とどのような相互関係にあったのかを考える出発点にもなる。この科目では比較宗教の視点を通じて、国際文化における日本宗教の語り方を考える。	
		宗教と平和	平和を求めるはずの宗教同士がなぜ戦うのか。戦争を宗教の視点から考察する場合、問題の一つになるのは正義に対する考えである。平和を実現するために、互いに信じる正義を行使した時、どう対立した同士が譲り合い、解決をするか、ということである。正義論はキリスト教のみならずイスラームにも見られる。この問題について、本科目では戦争をめぐる絶対平和主義、正戦論、聖戦論がキリスト教史の中でどのように理解、受容されているのか概観し、キリスト教のみで平和思想を自己完結するのではなく、イスラームとの比較宗教の視点から正義論の相違を紹介する。その上で日本の戦争平和理解の立場を考えたい。戦争をする、しない、という二者択一に解決策を求めるのではなく、他者の認識構造を知ることで、絶対平和主義と正戦論との間に、他者の正義を自己の正義として受け止められる選択肢の可能性を紹介したい。	
		国際環境論	地球は一つの有機的共生体として存在している。その中で生命が生存可能な世界を生存圏というが、その物資的構成や共生的構造はきわめて多様である。産業革命以降の経済的発展と人口の急激な増加の結果、この複雑で多様な世界としての国際環境は大きな変動を強いられ、地球環境問題として現在の人類のあり方に再考を迫っている。本講義では、そのような地球環境の現状と変動のプロセスを明らかにするとともに、人間活動がもたらす地球規模の環境変化について概説する。	
学科専門科目	学科基幹科目	英語演習1	コミュニケーションに役立つ基礎的知識を拡充し、多くのドリル活動を通じて英語表現の習得および英語の4技能（聴解力、文法力、語彙力、読解力）を高めることを目的とする。音声を聞いた後、出てきた英文を何度も繰り返し読むことで、実際に語学留学やスタディツァーなどの学習の基礎となり、海外旅行をする際に有用な日常表現を習得する。	
		英語演習2	コミュニケーションに役立つ基礎的知識を拡充し、多くのドリル活動を通じて英語表現の習得および英語の4技能（聴解力、文法力、語彙力、読解力）を高めることを目的とする。音声を聞いた後、出てきた英文を何度も繰り返し読むことで、実際に語学留学やスタディーツァーなどの学習の基礎となり、海外旅行をする際に有用な日常表現を習得する。	
		英語演習3	この科目は、コンピューターを使用し、英語のリスニング力の向上を目的とする。主に、ディクテーションを通して、自分の聞き取りにくい英語の音を明確にさせ、基本的な英語聴解力の向上、英語の発音の上達を目指す。ディクテーションを多数こなすと同時に、これまで身に付けた英語の基本的な語彙、文法力を身につけ、さらなる英語力を身につけることにより、英語の運用能力を向上させる。	
		英語演習4	「英語演習3」に続いて、この科目でも、コンピューターを使用し、英語のリスニング力の向上を目的とする。主に、ディクテーションを通して、自分の聞き取りにくい英語の音を明確にさせ、基本的な英語聴解力の向上、英語の発音の上達を目指す。ディクテーションを多数こなすと同時に、これまで身に付けた英語の基本的な語彙、文法力を身につけ、さらなる英語力を身につけることにより、英語の運用能力を向上させる。さらに、TOEICのリスニング問題を通して、リスニングセクションの問題形式をしっかりと理解し、目標をクリアすることができるように訓練する。	
		英語演習5	本講義では、グローバル社会に通用できる人材を育成するために、国際共通語としての英語におけるコミュニケーション能力の育成を目的とする。教材は、コミュニカティブアプローチに視点をおいたテキストを使用し、同じテーマを、Listening、Conversation、Duet、 Language check、Ensemble、Solo等、いろいろな活動を通して行い、社会的な場における英語実践力を育成する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学科専門科目	学科基幹科目	英語演習6	本講義では、グローバル社会に通用できる人材を育成するために、国際共通語としての英語におけるコミュニケーション能力の育成を目的とする。教材は、コミュニカティブアプローチに視点をおいたテキストを使用し、同じテーマを、Listening、Conversation、Duet、 Language check、Ensemble、Solo等、いろいろな活動を通して行い、社会的な場における英語実践力を育成する。英語5の学習で経験した社会的場をさらに拡張して、多文化社会における共通画としての英語についての認識をさらに深め、日本人としての国際英語運用能力を高めることを目標とする。	
		異文化コミュニケーション論	講義は、文化とコミュニケーション、特に、異文化間関係に及ぼすコミュニケーションの要素に焦点を当てる。新聞のジャーナリズムや映画や広告などのマスメディアで見られる関連したイメージや規則習慣の文化的分析を通して練習する。また、異文化間コミュニケーションの原則を発展応用して、他の事例研究を行う。英語の談話能力の強化を究極的な目標とする。	
		比較文化・社会論1	ヨーロッパ言語語圏の文化・社会と日本文化・社会のあり方を比較考察する。具体的に一例をあげれば、日本におけるドイツ文学翻訳の歴史を辿り、また日本の詩歌の独訳と英訳を比較しながら、借用語としての翻訳語がどのように受容され変容されていったのか、また言葉の背景にある社会的歴史的文脈が、日本あるいは欧米の風土に根付いていったプロセスを考えることにより、日独ないし日欧の思考方法の差異と共通性を明らかにする。	
		比較文化・社会論2	本科目では、西洋社会と日本社会の表層的な比較といったことはしない。テーマは、今日世界を席巻している西洋近代科学文明の淵源を探ることである。それは17世紀のヨーロッパに端を発したが、現代の日本もそれを受け入れ発展している。視点は、文化としての科学である。なぜ、地球の一地域で発生した「文化」が、かくもグローバルになるに至ったか。どうして我々日本人はそれを生み出すことができなかったか。ここにこそ本質的文化比較論がある。	
		文化マネジメント論	人が他者と社会関係を取り結ぶとき、そこにひとつの文化を持った社会が存在する。ところで、私たちはどのように他者と社会を形成しているのだろうか。文化マネージメント論では、日常生活で私たちが経験するさまざまな社会現象がなぜ発生するのかを考えながら、社会の成り立ちを考える。学生は、社会現象の「しくみ」を理解することで、自分たちがどのように日常生活を「営んでいる」のかを考える。	
		多文化共生社会論	1970年代後半から日本に移住し、生活する外国人が増え、現在、その数は200万を超えた。外国人居住者の増加に伴い、日本社会は多文化的な社会となった。自治体も異なった文化的背景を持つ人々の文化を尊重し、権利を保障し、共に生きるという「多文化共生」という理念に基いて、外国人を支援するようになった。本講義では多文化社会の成立経緯、現状、多文化共生の理念に基づく施策、諸団体の取り組みを取り上げ、考察する。	
		東西交渉史	本講義は、近年まで歴史学の主流であった国家史や民族史の枠組みにとらわれず、グローバリゼーションが進展しつつある現代世界の情勢を踏まえて、「ヨコの繋がり」を重視した世界の歴史について解説する。具体的には、様々なモノ(タバコ、鉄砲、砂糖、コーヒーなど)を主人公にして、それらの起源・生産・流通・消費の歴史について論じていく。あわせて、国家や国境線を越える、移民や移住など人類の移動の歴史についても考察する。	
		観光文化論	本授業は、アジアをはじめ、欧米各国の国際観光を概観し、日本の観光を対比的に考察しながら「観光文化」について理解を深め、併せて、観光概念や観光形態の歴史的変化についても学ぶことを目的とする。また、人の国際移動である移民や留学、国際協力についても観光の視点から捉える。	
		現代芸術論	近現代の主に西洋で起きた主要な芸術(芸術運動や理論を含む)が、世界の文化的運動や芸術活動にどのような影響を与えたのか、また日本ではどのように受容されたかを具体的に考察する。芸術は現実の社会生活から乖離した存在ではなく、社会をリードする基本的な人間表現であることを理解させ、メディア・広告・商品などを通してわれわれの感性を揺さぶるとともに、経済活動の大きな一部として機能していることも明らかにし、現代人と芸術の関係を多方面から理解させることを講義主題とする。	
		メディア文化論	メディア文化論は、さまざまなアプローチ(理論と方法)によって探究される学際的な学問領域である。本講義では「メディアはいかにしてリアリティを構成するか？」という問題意識を出発点として、メディアをめぐる理論、歴史、現状と課題について学ぶ。具体的には、マクルーハンやベンヤミンなどのメディア論の理論的源泉に触れたのち、宗教改革と印刷技術、大衆とマスコミ、メディアイベントといったテーマを扱う。また、SNSと友人関係、アラブの春、ネット右翼、フラッシュモブといった近年のメディア現象を取り上げ、そこで生起する社会意識や人びとの心理について考察する。	
		情報文化論	2000年以降，急速に普及したインターネットは，我々の日常生活から政治，経済，文化にいたるまで，広範囲にわたって大きな影響を及ぼし続けている。ネットの普及は利便性をもたらしたが，同時に雇用の縮小や人間関係の希薄化を招くなどの弊害も指摘されている。本講義では，産業社会から情報社会への移行にともなって発生したさまざまな文化現象を取り上げ，それらの利点と弊害の両面について考察することを目的とする。	
		多文化教育論	今日の世界はグローバル化、ボーダーレス化の時代を迎えており、世界的規模での人の移動が活発になっている。どの国も内なる国際化が進み、今後予期される多文化社会においていかに共生するかという課題に直面し、共生への教育(多文化教育ないし異文化間教育)をいかに構築するかが重要課題となっている。この授業では、ドイツ、アメリカ合衆国、イギリス及び日本における共生への教育の実態とその課題について考察する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学科専門科目	学科基幹科目	人間行動論	我々は普段，自分の自由意思に基づいて行動しているように思っているが，実際は自分が置かれている環境によって行動が決定されていることも多い。この講義では我々の日常生活にみられるありふれた行動を取り上げ，それらがどういう条件によって引き起こされているのかについて考察する。また，人間の行動に関する素朴な疑問がどのようにして科学的な問いへと変換され，実証的に研究されているのかについても解説する。	
		比較認知科学	ヒトが示す高次の認知機能はすべて進化の歴史を通じて獲得されたものである。本講義では，最初に進化論を取り上げ，魚類から始まる脊椎動物の進化，および人類進化の道筋について解説する。次に，多くの動物種を対象に行われてきた認知実験を紹介し，種間にみられる認知機能の質的・量的な差について説明する。そして，なぜ高い認知機能を獲得した種と獲得しなかった種が存在するのかについて，生息環境への適応の観点から検討する。	
		比較社会心理学	近年，社会心理学の領域にも進化論の考え方が導入され，集団への適応という観点から，ヒトが示すさまざまな社会的行動が研究されている。この講義では，ヒトの感情，思考，行動に焦点を当て，それらに対する生物学的，進化的影響について解説する。また，ヒトの社会とヒト以外の動物の社会を比較検討することで，他の動物との共通点あるいはヒトの独自性についての理解を深めることを目的とする。	
		現代経済入門	人間の文化的諸問題は複雑な構造をなして存在している。文化は単なる精神作用や表面的なアートなどだけではなく、人間生活そのものであり、経済生活がその根底を支えている。そのような視点に立つならば、文化を考察する原点のひとつに経済的諸問題を挙げておかねばならない。この講義ではグローバルあるいはローカルな経済現象を解説するそれぞれの講義の前提として、経済概念や経済用語の内容を理解し、広範な経済学習の基礎を学修することを目的とする。	
	グローバル文化展開科目	アメリカ社会文化論	日本とアメリカは、1853年のペリー来航以来150年以上の付き合いがあり、特に第2次世界大戦後の60年間は、政治、経済、科学技術、文化、日常生活に至るまで、あらゆる面でアメリカは日本に大きな影響を与えてきた。しかし我々が得ることの出来る情報の中には、我々の日常感覚からすると不思議に思えるものが少なくない。例えばアメリカは世界の主要な地域に自国の軍隊を駐留させている。銃犯罪が頻繁に起きているのに銃規制強化の動きがない。4年毎の大統領選挙の党大会はまるでお祭り騒ぎである。この講義は、アメリカ社会と文化を理解するための基礎を習得することを目標とする。	
		アメリカ政治経済論	アメリカは政治的には民主主義の代表的な国であり、第2次大戦後の米ソ冷戦に勝利し、いまや唯一の超大国としての地位を維持している。2001年の9月11日のテロ事件の後は、アフガニスタン、イラクとテロ支援国家の体制を打ち砕き、「自由と民主主義を守るため」世界の対テロ戦争の先頭に立っている。しかしアメリカは単に世界に対する市場として存在したのでなく、戦後日本の政治制度、教育制度、租税制度など政治、経済、文化、社会のすべての面で日本に影響を与えてもきた。大きな変革が求められる日本にとって、アメリカの政治経済がどのような価値観、文化、政治制度、社会構造を基盤としてきた歴史とアメリカが抱える現代的課題について学ぶことが本講義の目標である。	
		英米文学概論1	アメリカの詩と小説を読む。小説については20世紀の作家の短編小説を主として選ぶ予定。毎回、取り上げる作品の時代と文化背景についての解説を交えながら、作品を読み進めていく。取り扱う作品とその周辺問題を起点として、文学の主要概念に言及する。	
		英米文学概論2	イギリス文学の詩、小説、劇の重要な作家を紹介する。毎回、取り上げる作品の時代と文化背景についての解説を交えながら、作品のサンプルを読む。取り扱う作品とその周辺問題を起点として、文学の主要概念に言及する。	
		英米文学講義1	この講義ではイギリスおよびアメリカにおける文学の背景についての基礎的学習をする。文学の背景をなす歴史的あるいは文化的な要因は文学を読み解くうえで重要であり、現代英語そのものおよび現代文学を理解するに際しても不可欠である。さらに英米文学を考察する前提として、ギリシャやユダヤの文学、歴史、文化などが重要な役割を果たしていることにも注目し、広くヨーロッパの文化的土壌の上に開花した英米文学の本質について学習させる。	
		英米文学講義2	この授業では英米文学の持つ宗教的・倫理的側面に焦点を当てて講義を進める。とりわけ英米文学の中で常態的に登場する場面や会話におけるキリスト教的思索・文章法・警句を前提としたやり取りなどを考えると、西洋世界の宗教史や近世近代の倫理観を抜きに語ることは不可能である。さらに英米文学の周辺に位置し英米文学に大きな影響を与えているマイノリティ文学についても論究する。	
		英文学史	英文学に関する基本的教養を身につけることができるように講義する。イギリスの文学がどのように発展し、イギリス人が文学をどのように楽しんできたか、イギリス人が教養を高めるのに文学がどのように貢献したか、こういう視点で文学史をたどる。	
		米文学史	アメリカ史やアメリカ文学に関する理解は近年の30年において大きく変貌してきた。とくにヨーロッパ的な精神や習俗がどのようにアメリカに侵入し、定着したのか、あるいはヨーロッパ文化とアメリカ先住民文化の関係がどのようにアメリカ文学に影響を与えたのか、など、多くの新たの問題点が生じており、アメリカ文学の歴史は個々の文学作品の評価を越えて、アメリカ文学とは何かという根源的な問いかけに対する回答を迫っているのである。授業ではいくつかの作品に接しながら、受講生自身がディスカッションを通してアメリカ文学の歴史を追体験することになる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学科専門科目	ローバル文化展開科目	ヨーロッパ文化総論	ヨーロッパの多様な文化を貫く原理と地域的諸問題を紹介し、その特質に言及する。具体的にはヨーロッパの映画作品を素材として、ヨーロッパ地域の文化的特色と独自性を考察する。具体的には、ベルリンを主題とする映画作品から、ドイツ現代史の諸問題を地域文化表象の視点から考える。東西両ドイツの歴史、第二次世界大戦時のナチズム、オーストリア併合、ベルリンの壁、また壁崩壊後の状況などについて知見を深め、中欧の地域文化の在り方と将来像を探る。	
		ヨーロッパ地域文化論A	ヨーロッパの思想の内、本科目では「心身論」を取り上げる。意識とは、精神とは何かを考えるこのテーマは、西洋哲学の中にあって古くて新しい問題である。典型的なスタイルはデカルトに発するが、爾来多くの思想家によって様々な角度から論じられてきた。その流れの中で、人間の思考の一部を具現するコンピューターという発想も出てきたのである。今日的には、「機械は心を持ちうるか」という問いに現代版「心身論」のテーマを見出せよう。かように、これは人類永遠のテーマなのである。	
		ヨーロッパ地域文化論B	ヨーロッパの美術は祭儀的要素の強い洞窟壁画によってはじまる。美術のみならずヨーロッパの芸術は宗教と結びついて発展してきたが、宗教の根底には魔術的側面がある。ギリシア・ローマ時代に見られた宗教の魔術性は、キリスト教によってタブー視され、中世を通して抑圧されてきた。しかし、古代の魔術はルネサンスによって復活する。ルネサンス期の芸術とその後世への影響を考察しながら、この経過とその意味を探る。	
		ヨーロッパ地域文化論C	ヨーロッパ文学の最初の金字塔はホメロスの二大叙事詩『イーリアス』と『オデュッセイア』であり、この二作はギリシア神話の集大成である。ルネサンスの幕を切ったダンテの『神曲』はキリスト教の死生観と宇宙観を描く。そして近代に至って、ゲーテの『ファウスト』は悪魔との契約を主題とする。以上の作品を中心に、古代ギリシア神話の多神教的世界、中世キリスト教の一神教的世界、近代の人間自我と悪の問題を追究していく。	
		地中海文化圏論	西欧世界を考察するに際して地中海海域の歴史を無視することはできない。それは紀元前から異文化の交錯する地域として文化・産業が行き交い、多様な人的交流を通して独特の文化ゾーンを形成してきた。時には連帯し、また敵対し、時には東西交渉の場として、政治や宗教や商業的思惑を媒介させながら、ローマ帝国以降の西欧文化に多大な影響を与えた。このような関係はいまも旧宗主国と新興独立国家、キリスト教世界とイスラム教世界、民主的国家と独裁的国家など複雑な諸関係を形成し、現代国際政治・文化の重要課題となっている。本講義ではそのような歴史と現状をひとつのまとまった地域として考察させる。	
		日欧交流史	16世紀、イベリア半島の王国スペインとポルトガルが地球を逆回りしてアジアで出会ったことにより、有機的結び付きをもつ地球規模の「世界史」がヨーロッパ主導権のもとで誕生した。西欧ではその後、オランダ・イギリス・フランスが海外植民地の富を資本に産業革命を進め、近代国家の建設に向かった。本講義では、「大航海時代」に始まる近代化途上の西欧諸国とアジアに位置する日本・日本人の交流と相互影響の歴史を考察・理解する。	
		環太平洋地域文化論	環太平洋地域は日本に最も密接な隣接地域であるが、地中海文化を除けば、海洋に沿った諸国の全体をひとつの地域としてとらえる慣習のなかったこれまでの地理的概念では十分に理解されてこなかった。この講義では歴史的に人間活動の交流が疎遠であったと考えられてきた環太平洋に光を当てることによって、民族文化交流のあり方を考察するとともに、環太平洋という一つの概念で括られた人間社会の文化的・経済的・社会的諸関係の現代的意義について紹介し、日本文化の将来にとって環太平洋地域がいかに重要な地域的概念になるのかを詳述する。 (オムニバス方式／全15回) (22 増田 あゆみ/7回) オセアニア・アジア地域の視点からの環太平洋文化論を講義する。 (28 木村 光伸/8回) 環太平洋地域の概説と、アメリカ地域とくに中南米における太平洋地域における活動や環太平洋観について講義する。	ｵﾑﾆﾊﾞｽ方式
		イスラム文化圏論	現在、世界のムスリム(イスラーム教徒)の人口は十数億人と推定されており、年々増加している。このような世界の状況を踏まえると、イスラームに関する様々な事柄について理解を深めることは今や必須となりつつある。本講義では、イスラームに関連する幾つかのテーマ(アラビア語(文字)、イスラーム法、学校教育、「アラブの春」、経済状況など)をとりあげ、ほかの地域の事例とも比較しながら、「イスラム文化圏(イスラーム世界)」の特徴について考察する。	
		文化変容論	本講義では、個人が持つ文化的特徴が、個人の移動等による生活環境の変化等に伴い、どのような変化を遂げるのかを、クレオール(土着化による文化変容)化を観察することによって考察していきたい。対象とするのは、ディアスポラにある人々、移民として他国に渡った人々、文化的支配を受けた人々等である。文化変容が、どのような環境で、何を条件におこっていくのかを、事例をみながら分析をおこなっていきたい。	
		マイノリティ論	本講義は、各国家および地域におけるマイノリティの人々について、国家の国民統治政策との関係、および社会での権力関係の中で、その社会的位置に主眼を置き、考察しようとするものである。対象とするマイノリティは、多文化国家、多民族国家等の中で、少数派民族に属する人々が主になる。また、マイノリティを社会的少数派ととらえることにより見えてくる少数派民族以外の人々の存在にも注目し、「マイノリティ」の意味の考察をしていきたい。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学科専門科目	グローバル文化展開科目	比較文化行動論	比較文化論として、このコースは文化的基本となる価値観と、東洋文化と西洋文化にある人々の思考様式に焦点を当てる。主な授業方法は、ビデオの中の場面のイラストが入った読み物を読み取っていく。関連のビデオの場面を見て、自然に話された英語とアメリカと日本の文化的行動様式の比較的側面を通して、綿密な読解力と分析をしていく。	
		グローバル経済論	現代はグローバル化の時代と言われる。モノ(商品貿易)、お金(資本移動)、ヒト(海外留学・国際ビジネス・労働移民)、企業(外資企業・直接投資)が国境を当たり前のように越える時代に私達は生きている。この講義ではそのような国境を越える経済活動が生じる基本原理を学ぶ。具体的には、貿易パターンを決める「比較優位」の原理、国際貿易ルール、そして戦後の国際通貨体制の変遷を眺めながら，為替制度について理解する。	
		グローバル・ビジネス・コミュニケーション	経済中心のグローバル化は社会・文化・個人生活の全般に及ぶ変化を強いている。日本はこれまで貿易・観光・科学振興など多くの面でグローバル社会の中で高い位置を占めてきたが、実践的なビジネス現場で交渉相手との対等な関係を構築してきたかといえば些か心許ない。ビジネス現場において言語的能力は不可欠であるが、異文化社会間のコミュニケーションは英語力だけで実現するものでもない。本講義では日本人が国際的場面で必要な対等性に裏付けられた交渉能力を発揮できるようなコミュニケーションの方法と技能を実践的に教授する。	
	日本アジア文化展開科目	日本文化史	高校までの日本史学習においての「文化史」は、政治史学習の付録的に扱われることが多い。また、その学習も寺院名・仏像・建築物などの名称の羅列を暗記する学習にとどまっているのが現状である。本講義では、文化財・文化的現象について、その時代の政治動向や社会背景との関連に留意しながら解説を行う。その際、画像・動画・レプリカなどを利用し、その文化財の特徴や美しさの理解を深め、学生が将来外国人に対し案内が可能な程度の知識の獲得に努める。	
		日本の思想	学生は日本人でありながら、西洋の思想に比べ、日本の思想について学ぶ機会は少なかったと思われる。本講義では、近代の西洋思想受容以前の日本の思想について概観する。古代については、「往生伝」をめぐる仏教思想や天皇・貴族の政治思想、中世については鎌倉仏教の思想、「愚管抄」などの歴史思想や戦国大名の政治思想、近世については国学・儒学・洋学・経世学など諸学問の動向について、史料を基に日本思想の独特の様相を理解する。 (オムニバス方式／全15回) (1 曽我良成/8回) 「古代」と中世の「仏教・歴史思想」について講義する。 (7 鹿毛敏夫/7回) 中世の「戦国大名の歴史思想」と「近世」について講義する。	ｵﾑﾆﾊﾞｽ方式
		日本の民俗学	グローバル社会と化したボーダレスな世界にあっても、地域固有の文化や慣習が均一化されたわけではない。われわれが国際文化の現状に触れ、また考察するに際しても、自己の歴史に裏打ちされた文化のものさしが必要である。文化の相対的理解とはそのような自己世界理解の上に成立するものであるから、日本人が歴史的に辿ってきた生活史を民俗誌という視点から考察することが必要である。そこでは日本文化・芸術・芸能・宗教性などの特異性と同時に日本内の地域的文化の差異や相互関連性にも着目し、生活文化の構造を理解させる。	
		日本社会論	本講義では、日本社会の持つ特異性を、客観的な視点からの分析手法によって明らかにしていきたい。外国人の眼から見た日本、彼らの考察する日本社会にみる日本らしさを分析することにより、日本社会の特異性をより明確に認識してみたい。分析対象は、外国人の観察する日本の伝統的な社会風習、および、現代日本社会構造にみる日本らしさである。これらの日本的特徴が、日本社会の何を表象しているのかについて、考察を重ねてみたい。	
		日本地域史論	南北に長い日本列島では、古来、地域の特色あふれる歴史文化を育んできた。日本と日本人の歴史の母体となる国内の各地域史の特性(類似性と異質性)を理解することは、国際社会の諸国・諸地域の特性を理解する大前提の能力として極めて重要である。本講義では、「日本史」の内部に時代の特色に対応した弾力的な諸地域を設定し、奈良・京都、東海、瀬戸内、九州等の枠組みにおける地域の歴史と文化の特色を考察し、理解を深める。 (オムニバス方式／全15回) (1 曽我 良成/8回) 奈良・京都、東海について講義する。 (7 鹿毛 敏夫/7回) 瀬戸内、九州について講義する。	ｵﾑﾆﾊﾞｽ方式
		日本アジア交流史	日本の歴史や文化は、周辺のアジア諸国・諸地域との接触のなかで育まれてきた。日本・日本人の歴史を考えるうえで「アジア」との交流と相互影響の考察は欠かせない視点であり、現代の複雑な国際関係を理解するためにも、過去のアジア交流の歴史についての正確な理解が必要である。本講義では、前近代における日本とアジア諸国・諸地域との交流の歴史を東アジアから東南アジアにまたがる環シナ海文化圏の広がりのなかで考察・理解する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学科専門科目	日本アジア文化展開科目	現代中国事情	本講義は、現代中国の社会・政治・経済・文化に関する基礎知識を伝授することを目的とする。経済発展が著しい中国は刻々と変化しているため、最新のデータに目を配り、その変化を象徴するようなトピックスを中心に取り上げる。また、CCSの「自学自習」に掲載したテーマ別の問題を課題として解かせることで授業で学んだことを再度確認し、知識の定着をはかる。	
		中国文化社会論	明治の脱亜入欧からおよそ100年の今日、日中間では経済、科学技術、教育、文化など多方面にわたって曾てない人的物的交流が幅広く行われ、中国が意識として再び身近な存在になってきている。講義では、ダイナミックな多様性を特色とする巨大中国の様々な文化事情や社会状況を紹介する。特に、歴史と文化、国家と社会、中央と地方などの中華世界の諸問題を中心に、中国の文化・社会の歴史的変容と現代的課題について考察する。	
		韓国文化社会論	朝鮮半島は日本に最も近くに位置する隣人であるが、歴史的経過、とりわけ明治以降の歴史認識などをめぐって相互理解が著しく欠落しているのが現状である。すでに日本による半島支配を現実として知らない世代が中心を占める時代となって、歴史を知らないことに起因する反韓国意識やテレビドラマや芸能のみを知識の源泉とする韓流ブームなど、相互に対等な文化交流とは趣を異にする社会反応が日本人の韓国事情理解の中心を占めているのが現状であろう。本講義では韓国社会の歴史と現状を正確にとらえ、韓国住民の社会心理的な意識などにも触れつつ、日本と韓国の好ましい文化交流のあり方などにも言及する。	
		現代アジア文化社会論	東南アジアの島嶼国・フィリピン共和国を中心にして、現代アジアの文化・社会を論じる。具体的には次の項目を取り上げる。フィリピンの概要、民族分布、言葉、教育制度、文化的価値観、社会規範、市場（いちば）、ジェンダー、日本との関係である。歴史的背景にも適宜言及しつつ、現代フィリピンの文化・社会に関して理解を深める（異文化理解）。日本とも比較し（比較）、日本との関係にも言及し（日比関係）、受講生の関心を高めていく。	
		南アジア文化社会論	本講義は、南アジアの多様かつ豊かな文化の諸相を、とくに宗教文化に注目しながら、学ぶことを目的とする。全体を3部構成とし、以下の順で講義を行う。第1部 南アジア文化の基礎：日本からみる南アジア文化、シンボルでみる南アジア、南アジア史の概観。第2部 南アジアの宗教文化：宗教から文化をみる、南アジアの多宗教世界、ヒンドゥー教、仏教、イスラーム。第3部 宗教と政治：近代化と宗教復興、独立運動とガーンディー、コミュナリズム。	
		日中関係論	日中の相互理解を深めるには、両国の摩擦の原因となっている歴史認識、領土問題等に関して真摯に検討することが不可欠である。現在の日中関係が良好ではない原因の一つに、日本において中国側の論理が十分に知られていない点があげられる。本講義では、中国人知識人の日中関係に関する論考を学生とともに考察し、日本側の代表的な見解と比較対照することで、日中関係を多面的に捉える能力を養成する。	
		中国社会経済論	経済成長を続ける中国は2010年にGDPで日本を抜き、米国に次ぐ世界に2位の座を確保し、その後も様々な問題を抱えつつも高い経済成長率を維持し、購買力平価換算でのGDPではすでに米国に迫ってきているのではないかと思われる。かつて安い人件費を武器に「世界の工場」となった中国は「世界の市場」としても極めて重要になっている。日本や世界にとって極めて重要なこの国の現在（ないし近年）の経済情勢・社会情勢の理解は、日本人にとっても不可欠である。この科目はその概要を理解するためのものである。	
		日本のポップカルチュアとアジア	経済力の復活を切望する日本だが、近年海外に注目されるのはむしろその文化、特にアニメをはじめとするポップカルチュアであるかもしれない。この授業では主に以下の点をテーマとして扱う。1日本の大衆文化は、最近ないし現在のアジアにおいて、どの程度、またどのように受け入れられているのか。 2それはアジアの人々の日本及び日本人に対する意識にどの程度、またどのような影響を及ぼしているのか。3大衆文化を産業としてみた場合、アジアの大衆文化に関わる産業は日本のそれとどのような関わりをもっているか。	
		アジアの商習慣	アジアの新興国との間の貿易やそれらの国におけるビジネスは、日本にとってもはますます重要性を増してきている。現在アジアにおいて行われている商取引はどうようなシステムや特徴があるのか、さらに、グローバル化が進行するなかそれはどのような変化を見せているのか、日本人がそうした国と（あるいはそうした国において）ビジネスを行う際どのような点に留意する必要があるか、といったことについて、をテーマとする。	
		アジア就業事情	アジアの国々が経済的に発展し、また世界のグローバル化が進行するなか、アジアの新興国との間のビジネス上の関係は、日本にとってますます重要性を増してきている。日本の企業がアジアに進出することも多い。この授業は、アジアにおける企業の人事労務問題を中心に、現地の企業や現地に進出した日系企業をはじめとした外資企業における就業事情の動向について扱うものである。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学科専門科目	国際協力関連科目	文化交流論	グローバル社会は国家と国家が対峙するインターナショナルな関係を超越して情報の交流が発生する世界である。とりわけインターネットの情報網が世界を網羅的に一つのネットワークとして構成している現状は、地域文化の固有性やそれぞれの地域における個々独自な文化をつなぐ本来の歴史的過程なしに、文化の接触・交流を促進し、相互に文化的な変容を引き起こす。そのような現代社会にあって、多様な地域を結ぶ文化の交流を、多文化理解や異文化の尊重という文化交流本来の道筋として実現するために必要な文化定義や交流の意味を考察するとともに、日本で経験することのできる多文化接触、多文化交流の実情について触れる。	
		ジェンダー論	「男性は外で仕事をし、女性は家庭を守る」というような性別にもとづく役割分業を聞くことがある。ところで、こうした性にもとづく役割分業は、それ自体「正しく」、「当たり前」のことなのだろうか。ジェンダー論では、学生が、性に基づく役割分業を再考するジェンダーの社会学を学ぶ。ジェンダーの視点を検討したのち、専業主婦や家事・育児・介護、生殖医療、グローバル化といった社会現象をジェンダーの視点から解読する。	
		国際人権論	私たちの暮らす社会では、すべての人々が平等であることが望ましいと言われている。ところが、決して平等な立場に置かれていない人々が、社会には数多くいる。国際人権論では、学生が、グローバル化時代における人権問題の構図と人権保護のあり方を考える。まず人権保護の歴史とその国内的・国際的な保護のしくみを概観する。続いて、生命・女性・子ども・先住民といったトピックごとに、問題の所在と解決策を具体的に考える。	
		平和学	「平和」は必ずしも「戦争」の対立的概念ではない。とくにグローバル化しつつある世界においては「平和」は「戦争」という抗争的関係の中で語られるとともに、「貧困」「差別」「ジェンダー」「生活難民」などとの関係で理解されることが必要である。日本ではさらに「家族」「高齢社会」「少子化」「過疎」などといった現在社会の課題と一体的に語られねばならない。これは現代における「平和」という用語がきわめて広範な対象を考察させるものであるということであり、人間の文化的な在り方そのものが問われているのだということが理解される。本講義ではグローバル社会における「平和」の多義的理解に迫る。	
		国際地理論	グローバルな視点で地域文化を考察するためには地理的視点の理解が不可欠である。それは単に地域の相対的な位置関係を知ることにとどまらず、地域間において歴史的に生起した多様な交流や相互関係、さらには文化摩擦等についての学際的な状況把握と評価が求められるのである。いわゆる国境は民族的・歴史的・政治経済的産物であり、支配被支配の関係をも反映しており、国あるいは地域を固定的に考察する原点ではあるが、現代の国際環境はそれらを越えて、人的・文化的交流の軌跡として捉えられるのであり、本講義ではそのような地理感覚を醸成することを目標とする。	
		世界遺産と保全	世界遺産とは地球の歴史と人類の歴史が創り出した壮大な記念碑である。われわれが見ることの出来る文化の多様性の根源はこのような歴史的認識にあり、ユネスコは、人類が共有する財産であり未来へと継承されるべき遺産としてこれらを認定し、人類が全体としてこれらの保全に当たることを喚起している。この認識は人間文化の地域性と多様性を考察するに際して不可欠のものであり、同時にそれらの保全を考察し実践することが現代人には求められているということを、具体例を提示しつつ紹介し、文化理解の基盤としての世界遺産に迫りたい。	
	留学単位振替科目	海外事情1	本学部の国際理解教育に関わるカリキュラムポリシーに沿って設定した学修プログラムにより海外の国際文化・交流機関や施設、あるいは国際協力・支援機関や施設等における研修に参加してその成果を取りまとめたもの、もしくは休暇期間中等に本学の海外協定校との短期留学プログラムに参加し、語学や現地の事情を中心とした授業・研修を受講した学生に対して、事前事後学習及び現地学習の成果にもとづき、単位を付与する。	
		海外事情2	本学部の国際理解教育に関わるカリキュラムポリシーに沿って設定した学修プログラムにより海外の国際文化・交流機関や施設、あるいは国際協力・支援機関や施設等における研修に参加してその成果を取りまとめたもの、もしくは休暇期間中等に本学の海外協定校との短期留学プログラムに参加し、語学や現地の事情を中心とした授業・研修を受講した学生に対して、事前事後学習及び現地学習の成果にもとづき、単位を付与する。	
		海外事情3	本学部の国際理解教育に関わるカリキュラムポリシーに沿って設定した学修プログラムにより海外の国際文化・交流機関や施設、あるいは国際協力・支援機関や施設等における研修に参加してその成果を取りまとめたもの、もしくは休暇期間中等に本学の海外協定校との短期留学プログラムに参加し、語学や現地の事情を中心とした授業・研修を受講した学生に対して、事前事後学習及び現地学習の成果にもとづき、単位を付与する。	
		海外事情4	本学部の国際理解教育に関わるカリキュラムポリシーに沿って設定した学修プログラムにより海外の国際文化・交流機関や施設、あるいは国際協力・支援機関や施設等における研修に参加してその成果を取りまとめたもの、もしくは休暇期間中等に本学の海外協定校との短期留学プログラムに参加し、語学や現地の事情を中心とした授業・研修を受講した学生に対して、事前事後学習及び現地学習の成果にもとづき、単位を付与する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学科専門科目	演習科目	フィールドワーク	日本は多様な歴史的変遷を経験し、地域固有のたくさんの民俗文化を生み出してきた。しかしそれらの多くは、近代化とりわけ1960年代以降の高度成長と20世紀末から進行した「平成の大合併」などの地域再編に伴って姿を消しつつある。このような中で地域住民の思考方法と現実的対応を調査・理解し、また現在では失われてしまったかに見える多くの地域生活と地域文化の事例を記録し、さらには都市住民のあり方にも触れることは、日本の都市と地域の再生のあり方を考えるうえで極めて重要である。休暇期間を有効に活用し、集中的な地域調査を実施し、そのとりまとめと外部へのプレゼンテーションを含めて文化的地域調査として完結させる。	
		国際文化理解実践論1	フィールドワークやスタディーツアーを受講する前提として、地域文化理解のための基礎的講義をおこなう。内容は、国内外に関わらず多様な文化を独自に形成している「地域」という概念を整理し、学習の対象とする地域の歴史、文化、慣習や宗教などの年中行事や通過儀礼などについて総合的に学習し、調査対象を明確に理解させる。同時に当該地域においてどのような住民や関係者あるいは関係機関と接触することが可能であるか、もしくはインフォーマントとしてどのような人を選択するかなど、フィールドワーク実践についての基礎的知識を習得して、実践活動に齟齬が生じないように指導する。	
		国際文化理解実践論2	フィールドワークやスタディーツアーを受講し、国内もしくは国外で得た異文化あるいは多文化理解に関する情報と経験を科学的な視点から整理し、文化理解、文化交流、文化支援等の実践レポートとして完成させる。また、学部内において研究発表の場を確保し、学習者全員が調査報告・体験報告を映像資料等を用いた口頭でのプレゼンテーションという形式で実施し、多様な文化調査の様式を理解するとともに文化理解活動の共有化の重要性を理解させる。	
		国際文化基礎演習1	国際文化基礎演習1では、学生が専門演習に進むために必要な基本的アカデミック・スキルを習得することを目指す。このスキルを身につけるために、国際文化学習に関連するテーマ（異文化理解、多文化社会、国際交流、国際支援など）を題材として、学生は個人やペア、グループ単位で、文献購読やプレゼンテーションなどに取り組む。またその学習過程で必要な先行研究や対象地域の基本的知識についても理解させる。	
		国際文化基礎演習2	この授業では、国際文化基礎演習1に引き続き、学生がさらなるアカデミック・スキルの向上を目指す。国際文化学科が展開する科目群に関連するテーマ（異文化理解、多文化社会、国際交流、国際支援など）に沿って各自がテーマを考えて、文献等によって情報収集・整理・分析を行いながら、他の履修者に対して発表を行う。発表後は、教員および他の履修者のコメントを参考に発表内容を改善して、最終的には報告書の形で学習成果をまとめる。	
		国際文化演習	国際文化に関する学習の総括的なまとめとして学習者各自がテーマ（課題）を設定し、先行研究の検索・評価、対象とするテーマに即した資料収集、必要に応じての現地調査などを行い、設定した課題に関する取りまとめを行う。これらの成果は第一段階として研究概要の形式で公表され、また発表会の場で学習者間および学科教員の相互評価・批判を受けることにより、さらに精緻なものへと改善され、最終レポート（卒業論文）として完成させる。担当教員はその一連の自己学習過程を進行管理し、適切な示唆を与えつつ、学習者自身が一つの課題を完成させるための個別指導を行う。	

別記様式第２号（その３の１）

授　業　科　目　の　概　要

（国際文化学部国際協力学科）

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
NGU教養スタンダード科目	キリスト教	キリスト教概説	建学の精神として本学の教育を基礎づけるキリスト教の精神を学ぶ。すなわち、聖書の示す人間観、世界観を学び、「人間とは何か」そして「人間がこの世界にあっていかに真実の生を生きうるのか」という問題について考察する。とりわけ、それをもっとも明確な形で示したイエス・キリストの言葉と行為に触れ、限界をもった人間が、人として常に新しく生かされる可能性を与えられていることを知り、それが希望と力に満ちた生を生み出すことを理解する。	
		キリスト教学	「キリスト教概説」で学んだキリスト教の精神が、その後二千年の歴史の中で様々な形をとって展開され、提出されていった様子を学ぶ。具体的にはキリスト教の歴史、思想、倫理、文化等を学び、それらを通じて、聖書の示す使信がそれぞれの時代状況の中で、人々によってどのように受け止められ、表現され、生きられたかを理解する。そしてそれらが世界において果たした役割を知り、さらに今日どのような意味をもちうるのかについて考察する。	
		キリスト教と文学	キリスト教はこれまで多くの文学者に影響を与え、それが様々な文学作品として表現されてきた。それらの作品は、聖書とはまた違った形でわれわれの心をゆさぶり、われわれが生きていくうえで向き合う様々な出来事を考えさせてくれるのである。本講義では、個々の具体的な作品を通して、そこにキリスト教がどのように反映しているのか、あるいは作家たちがどのようにキリスト教を捉えているのかを辿り、文学がわれわれに喚起してくるものを見つめ直す。	
		キリスト教と文化	本講義では、アメリカのキリスト教の歴史を、ヨーロッパ人の北アメリカ到着から現代までたどる。アメリカ・キリスト教史は、アメリカの政治・文化を知るために不可欠な知識である。なぜなら、市井のアメリカ人の思考は、かなりキリスト教に影響を受けているからである。「アメリカ学」に関心を持つ学生にとって、このクラスはよい導入になるだろう。	
		キリスト教倫理	1993年に発表された「地球倫理」は、現代の人類が抱いている問題を次のようにまとめた。平和の不在、生態系の破壊、性差別と児童虐待、貧富の差、宗教間暴力など。こうした諸問題は、キリスト教を含む諸宗教に、倫理的応えを要求する。「文明間衝突」（Samuel Huntington）の時代とも呼ばれる現代の社会において、キリスト教はこうした問題についてどのように対処すべきだろうか。本講義は、こうした問題を視野に入れながら、現代において要求されるキリスト教的倫理の可能性について講義する。	
		キリスト教史	キリスト教史とは、もちろんキリスト教の歴史のことであるが、本講義では、宗教学的あるいは文化人類学的な観点から、キリスト教の具体的なあり方を辿りながら、宗教とは何かということを考えていきたい。ゆえに取り上げる題材はキリスト教を柱としながらもそれに限らず、神話なども含めて、人間精神の営みとしての宗教というものを探求する。それを通して、われわれ個々人が生きていくうえで向かいあう出来事について、何らか示唆を与えてくれるものを見出すことを目指す。	
	自己理解と自己開発	基礎セミナー	授業は演習形式で行う。本演習は、大学生活を有効に過ごすために必要な基礎的な素養を修得することを目的に、さまざまな社会現象を素材にして、自分の頭で考え、自分の言葉で表現できる能力と習慣を身に付けさせることを目指す。題材に関してはできる限り学生が身近に感じることのできる具体的な問題を取り上げ、レジュメの作成、発表・質疑応答を行う。	
		発展セミナー	授業は演習形式で行う。本演習は、基礎セミナーに引き続き、大学生活を有効に過ごすために必要な基礎的な素養を修得することを目的に、さまざまな社会現象を素材にして、自分の頭で考え、自分の言葉で表現できる能力と習慣を身に付けさせることを目指す。	
		キャリアデザイン1a	時代とともに大きく変貌しつつある「職業を取り巻く環境」を的確に捉え、将来のキャリアを考えるにあたって、自分自身を知り、同時に社会の基本的なしくみや動きについても理解する必要がある。キャリアデザイン1aでは、社会の情勢変化を知ることからスタートし、さらに自分を取り巻く人間関係を交えて自分を振り返り、他者とのかかわりや社会の規範をふまえて自分を客観的に把握し、自分を深く知ることに取り組ませる。	
		キャリアデザイン1b	キャリアデザイン1aで学んだ「職業を取り巻く環境」と「社会的に見つめなおした自己」を再度見直し、将来のキャリアを考えるにあたって、自分自身を知り、同時に社会の基本的なしくみや動きについて、さらに深く理解を進める。キャリアデザイン1bでは、社会で求められる力とは何であるかを考え、常識力をアップさせることで、社会への対応力を身に付けさせることを目標とした学習を行う。具体的には論理的思考、推論、数的処理能力の向上をはかり、自己の適正能についても考えさせる。	
		キャリアデザイン2a	将来のキャリアを考えるにあたって、年齢相応の常識や態度、マナーを身に付け、社会へ飛び立つ準備をするために、自分自身を知り、同時に社会のしくみや動きを十分に理解する必要がある。このような状況を自己の問題として捉えることから始め、自分を取り巻く人間関係を交えて自分を振り返り、他者とのかかわりや社会の規範をふまえて自分を客観的に把握させるとともに、社会で求められる態度や能力を身に付けさせる。	
		キャリアデザイン2b	本格的な就職活動が始まる3年次の前に、就職活動の際に評価される常識力や基礎学力を身に付け、自分自身を再度見つめなおすためのプログラムを展開する。自己の職業興味領域や職業観を見つめることで、キャリアを選択する準備をさせるとともに、自己の志向するキャリアの方向性を定めさせる。	

科目区分			授業科目の名称	備考	備考
NGU教養スタンダード科目	自己理解と自己開発		キャリアデザイン3a	卒業後の進路選択は、大学における学習の締めくくりであるとともに、次の生活への跳躍台である。一人一人の個性や適性にあったキャリア選択を行えるように、社会人として職業選択と就職活動に必要な基礎知識と経済・社会・国際・法律などの教養的知識を身に付けさせるとともに、就職プロセスにおける実践的課題やSPI対策など、自己啓発から自己表現、自己アピールの実践までを学習する。	
			キャリアデザイン3b	キャリアデザイン3aで学んだ卒業後の進路選択プロセスをさらに実践的に進める。大学における学習の締めくくりで進路選択において一人一人の個性や適性にあったキャリアを自己の力で認識し、それに向かって行動出来るように、社会人として職業選択と就職活動に必要な基礎知識と現代社会の教養的知識を身に付けさせるとともに、就職プロセスにおける実践的課題やSPI対策など、自己啓発から自己表現、自己アピールの実践までを学習する。	
			ボランティア学	近年、ボランティアを実践だけでなく、活動そのものを様々な学術的観点から捉えての評価や議論が活発となってきている。そこで、本授業は、まずキリスト教学の視点からボランティアを捉えるとともに、社会学や経済学からのアプローチを学び、ボランティア活動の学術的な意義を理解することを目的とする。 また、「福祉」だけではなく、「国際交流」「環境」「まちづくり」など各分野を横断的にとらえ、他者への理解、社会への関心を深めるとともに、それぞれの分野で活躍されているボランティアリーダーの方々をゲストとして迎え、ボランティアの学び方・楽しみ方について学習する機会も持つ。	
			ボランティア演習	ボランティアなどの公共的な社会活動に参加し、体験を通じて人間関係のあり方を学ぶとともに、社会に対する関心と人間関係形成に不可欠なルール意識を高め、社会の担い手側の視点を育むことを目的とする。月1～2回程度の授業を開催し、オリエンテーション・事前学習、実習先の決定、中間報告、ふりかえりプレゼンテーション・事後学習を行う。実習期間の実習記録及び実習レポートの提出と合計20時間以上の実習時間を必須事項とする。	演習22時間 実習20時間
			インターンシップ1	学生として社会のあり方を学習する上で不足しがちな現場実践、社会的体験を、様々な事業所における就業体験を通して獲得させる。具体的には国・地方自治体など行政機関、国連機関などの国際的機関、公益法人やNPO法人、一般企業などで現実の業務を体験し、それぞれの社会的な存在意義・理由を知ると同時に、そのような現場で働くことの意味を考え、自らの行動や将来のキャリア形成のモデルとして考えさせる。	
			インターンシップ2	学生として社会のあり方を学習する上で不足しがちな現場実践、社会的体験を、様々な事業所における就業体験を通して獲得させる。具体的には国・地方自治体など行政機関、国連機関などの国際的機関、公益法人やNPO法人、一般企業などで現実の業務を体験し、それぞれの社会的な存在意義・理由を知ると同時に、そのような現場で働くことの意味を考え、自らの行動や将来のキャリア形成のモデルとして考えさせる。	
	社会的教養	人間理解	哲学	本講義は、始めて哲学を学ぶ者のために哲学の諸問題を説明し、「哲学的な考え方」に慣れさせる。それによって、常識的な思考の多くが時代や地域性に制約されたものであること、ときには先入見にすぎないことを理解させ、世界観や人間観に関する多様性を考えさせる。とりわけ形而上学の基礎を考えさせることによって、科学的な考え方、宗教的なものの見方の意義と制約について会得させる。	
			哲学史	哲学を学ぶこととは哲学史の知識を学ぶことではないが、「哲学する」ことを学ぶには、哲学史上の知識は必要である。本講義では、西洋哲学史の流れに即し、各時代の主要な哲学者、著作、そこでの主な問題、使われている諸概念等をできるだけ整理して紹介する。とりわけ、各時代に特徴的な問題については、現代的に問い直して紹介する。その考察を通じて、自ら思考する訓練をおこない、ひいては思考法全般への入門の一助としたい。	
			日本文学	本講義では、源平合戦の前哨戦ともなった保元物語を扱う。皇位継承に絡んだ戦いであったが、親子・兄弟が敵味方にあい分かれて戦うこととなる。合戦場面では、源為朝の奮戦ぶりが中心となるが、当時の武士の生態、合戦の仕方、武器等を、物語がどのように描くかに注意しながら講義することとなろう。	
			日本文学史	本講義では、保元物語の後半部分を扱う。崇徳院方についた為義は、後白河天皇方についた嫡男義朝の手により斬首される。さらに義朝は、後白河天皇の命令により、幼い四人の弟達を殺すこととなる。それらの死を、為義や四人の子供たちはどのように受け取ろうとしたのか。さらに彼等の死を聞いた妻であり母である為義の北の方はどうなのか。悲惨な戦いを当時の人々がどのように理解しようとしたのかを、物語を通して考えていきたい。	
			心理学概論	心理学とは「行動を科学する」学問である。「長い過去と短い歴史」といわれるように、学問的には19世紀中ごろから成立したが、人間が「こころ」に興味を抱いたのは、人間としてその発生初期からであるといっても過言ではない。本授業では、基礎心理学の学問領域に焦点を置き、現代心理学が学問的に明らかにしてきたいくつかの基本的領域について講義する。	
			文明論	本講義では、先史時代から歴史時代へといたる人類史を総合的に理解することを目指す。世界の四大文明は、河川に沿って発達した灌漑農業によって築かれたとされるが、このような文明と文明を結ぶものは、サハラ砂漠からアラビア半島をへてゴビ砂漠へと帯状に続く乾燥地帯である。文明は、人口の集中した都市を中核に持つ。都市において、いかにして多数の人間が共住し、多種類の文化が共存してきたのか解説する。さらに、文化と経済の観点から、時間と空間を越えて文明を比較し、その本質と成立条件について考察する。	

科目区分			授業科目の名称	備考	備考
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	人間理解	宗教と人間	キリスト教文明圏には属していない日本では、宗教と人間の関係が西洋と比べてかなり異なる。かといって、日本人にしか分からないといった特殊で排他的なものでもない。その秘密は実は仏教という宗教にある。本講義では、身近な日本の仏教の人間観を学ぶ中で、宗教のもつ存在意義を考え直すことを目的とする。	
			聖書と人間	聖書の主な舞台となった古代中近東世界を考古学・神話・民俗学などの視点から検討し聖書の記述に外から光をあてる事を目標とする。聖書は数千年の長い期間に中近東という地域において生じた出来事等を背景としている。様々な民族の人々がどの様に生きどの様に思索したのか、又それが聖書の記述とどの様に関連しているのかなどを立体的に知ることによって、聖書の世界・信仰の普遍性と特殊性を指摘する。聖書は、それが単独で読まれるときには理解し難い内容も含んでいるが、その成立の背景を周辺世界との比較によって考察する時、地についた理解に繋がる道筋が見えて来る。	
			キリスト教人間学	人間は、神の愛によって造られた善美なる存在、歴史的文化的な共同体の創造に参与するものたち、また、悪や罪をも可能性として秘めもっている存在とのキリスト教的人間観に立って、人間の尊厳、生と死、フェミニズム、ジェンダー、家庭と子ども、人類愛と社会正義、人間以外のいのちとの連帯共生などについて広く、深く学ぶ。	
			死生学	そもそも死生学（thanatology）は、死の準備教育（death education）および悲嘆教育（grief education）などいのちの終わりを考察する学として始められました。今では生殖補助医療や出生前診断、遺伝子操作などのいのちの始まりの問題をも含む「いのちの誕生と死にかかわりあるテーマに対して学際的に取り組む学問」＝「死と生の学問」(Life and Death studies)にまで発展しました。確かに、死生学はまだ歴史の浅い領域ですが、ターミナル・ケアの問題などから必然的に生まれた現代的課題を扱う「ホットな」科目です (オムニバス方式／全15回) (34 大宮 有博／7回) 「死生学」という学問領域を俯瞰して説明する。その後、宗教学の観点から個人の死生観にアプローチする。 (61 亀井 美穂／5回) 人間の誕生をめぐる現代的課題―特に生殖医療や優生思想―について論じる。 (44 玉川 貴子／3回) 自殺の社会学について論じる。	ｵﾑﾆﾊﾞｽ方式
			臨床心理学	臨床心理学は、人々の示す不適応問題に対する心理学的援助を模索する中で発展してきた実践的学問である。臨床心理学では、臨床心理学の歴史的変遷の中で登場した様々なトピックスを取り上げながら、主に発達障害や精神障害に関する臨床心理学の基礎理論、心理アセスメント、心理療法について概観する。	
		社会理解	社会学入門	本講義は、前半（第8回まで）で、身近な事例を社会学的に読み解くことを通して基礎的な理論を身に付け、後半で、現代社会における個別のトピックを社会学の方法を用いて理解する。身近な社会現象がどのようになりたっているかについて社会学のツールを用いて考えることにより、社会学的なものの見方を身に付ける。映像メディアなどを用いたわかりやすい講義を目指す。	
			宗教社会学	本講義は、社会学、なかでも宗教社会学の基礎を身に付け、現代社会における宗教をめぐる諸問題を適切に理解することを目的とする。新宗教論から宗教組織論、ファンダメンタリズム論まで幅広く取り上げ、また海外の事例にも目を配る。映像資料を活用し、わかりやすい講義を目指す。	
			比較宗教学	キリスト教を含めた多種多彩な宗教についての知識を身に付けることは、悲惨な「文明の衝突」を避けるためにも、いまや不可欠の教養である。本講義においては、ユダヤ教やイスラームといった一神教、神道やヒンドゥーといった多神教、さらには「神」を立てない仏教というような世界の諸宗教に触れ、地球文明の時代に欠かせない宗教的基礎知識の修得を目指す。	
			日本国憲法	本講義は、憲法上の『人権』について、歴史的考察や現代的考察を行い、その重要性を再確認する。更に、様々な事例を中心に日本国憲法を検討していくことによって、受講者が、日本国憲法の知識と考え方を身に付けられるようにすることを意図する。	
			現代社会と法律	本講義は、法の存在意義を検討することはもちろんのこと、日本の法にはどのようなものが存在するのか、そして、われわれのよく知る「法律」との関係はどのようなものなのかを理解してもらうことを目的する。単なる概念説明に終わるのではなく、様々な事例を中心に講義を進めていく。	
			現代社会と経済	経済学の基礎的な理論について概説する。前期（ミクロ経済学）では、家計や企業といった個々の経済主体の行動を分析し、さらに、それらを通じて個々の財の市場ではどのようにして価格や生産量が決定されるかを検討する。後期（マクロ経済学）では、国民所得の概念を中心として、失業やインフレーション、さらには国際収支等々の諸問題が、なぜ、どのようにして起こるのか、そしてそれらに対して政府がどのような経済政策をいかに運営していけばよいのか、といった課題に取り組む。	
			企業と社会	本講義は、企業とは何か、企業と社会とはどのような関係にあるのか、といった基本的な問題意識から出発し、「企業の社会的責任」にまつわる諸問題について、具体的事例も交えながら学ぶ。これからの企業は、社会的責任をいかに果たすかを常に意識する必要に迫られるようになる。この社会的責任とは何なのか、それをどのように果たすべきなのか、各自が自分の現場から考えられるようにする。	

科目区分			授業科目の名称	備考	備考
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	社会理解	国際関係論入門	現在、国際社会で起こっている様々な出来事を理解するためには、その理解を助ける基本的な知識と考え方が必要になる。その基本的な知識と考え方を養うためのひとつが、国際関係論である。本講義では、私たちの生活がどのように国際社会の諸問題と関係しているのかについて考える。国際関係論のなかでも特に第三世界（主にアジア、アフリカ、南米をさす）の社会構造に注目する第三世界論を中心に、その理論および実際の国々の現状を分析して、日本との関係を考える。	
			国際政治学	本講義では、国際社会における様々な事象を、政治、経済、社会、法、時には心理的分析し、国際社会の構造と動きについて学ぶことを目的とします。国家を超える国際的機関や、国境を超えて活動する企業や団体、個人も対象となる。現在の国際社会の構造の理解と現状に見られる諸問題の分析を行うにあたり、日本に住む皆さんの生活がどのように国際社会の諸問題と関係しているのかについても一緒に考えていきたい。	
			国際社会問題	現代の国際問題の多くは、イスラームが社会的に大きな影響力を持つ地域で起きている。しかしながら、日本の新聞・書籍やテレビ番組などにおけるイスラームやイスラーム世界に関する記事やニュースは、いまだ誤解が多く、それぞれの問題を正確に記述・報道しているとは言いがたい。そして、現在のイスラーム世界で起きている諸問題は、我々にとっても決して無関係なものではない。以上を踏まえ、本講義では主に現代イスラーム世界に焦点をあて、それぞれの地域・国家で起きている諸問題について解説し、視聴覚資料も利用しつつ、考察していく。	
			現代社会と教育	教育は、「当たり前」のものの見方が広く流布している分野である。この「あたり前」のこととして広がっている「常識」を疑うのが教育の社会学である。本授業では、社会学的視点と、さらに歴史的視点から教育を見ることによって、教育の「常識」を越えて見えてくるものは何かということについて追究する。	
			平和学入門	本講義では、「平和」がどう考えられてきたのか、平和をどう創り上げようとしてきたのかについて学ぶ。これから、社会を「平和」にするために、私たちはなにをするべきなのかを考える。	
			人権と社会	人権とは、人であれば誰でも生まれながらにして平等に享受できる権利のことである。しかし現代社会には、こうした人権を享受できずに、さまざまな困難に直面する人々がたくさんいる。本講義は、人権に関する入門的な講義として、国内外の人権問題を扱う。まず人権保護の枠組みを論じた後、先住民や女性、障害者、移民などの個別の人権問題を取り上げる。受講者には、国内外の人権問題に興味を持ってもらい、どのような解決法が望まれるのかを考えてもらいたい。	
		自然理解	数学	大学生の素養としての数学（微積分、線形代数など）について、特に微積分を中心に解説する。微積分についてはその定義の意味するところ、計算方法、応用に分けて解説するが、特に応用の第一歩として、実際の計算により関数の正確なグラフを描くことができるようになることが第一の目標である。講義では、具体的な問題に繰り返しあたり微積分の操作に習熟することを通じて、その考え方に慣れることを狙う。	
			数理科学	トポロジー（位相幾何学）は、図形の形状を問題にする学問である。そこでは、図形を曲げたり伸ばしたり縮めたりしても変わらない性質を探究する。本講義では、イメージしやすい2次元の図形を中心に、ある条件下でどのような図形が考えられるのか、2つの図形が同じかどうかをどう判定するのか、といった問題について考える。与えられた条件を満たすものとしてどのような可能性があるのかを全て網羅することは、一般になかなか難しい作業であるが、色々なアイデアによりそれが単純な作業に帰着出来たり、意外に簡単な結論が得られたりすることが分かる。	
			基礎統計学	まず、統計学の入門的なガイダンスを行い、経済データ等を図・表としてまとめる方法について講義する。データを図にまとめる方法として度数分布を紹介して、度数分布の形状の特徴を示す統計量として平均や分散等を紹介する。計量経済学の授業内容に関連するものとして正規分布という確率変数を説明する。また、標本理論、推定の理論、検定の理論を解説する。	
			実用統計学	人の気持ち、株価、景気、野菜の値段、等々、不確定な変動を見極めようとすれば、その背景にある様々な相互関係を解きほぐして何か法則がないか探る必要がある。また、国の経済はどうなっているのか、地域の状態は良いのか、とった対策は効果があったのかなかったのか等、知りたい情報を解き明かす方法を考える。	
			化学	錬金術から近代化学の成立に至るまでの推移を考える。錬金術と原子核反応、ラボアジェの質量不変の法則とアインシュタインの特殊相対性理論など、当時と現代の類似した科学的できごとを対比して取り上げたい。次いで、元素・原子・分子、元素の周期律と分類、原子の構造、電子の配置、化学結合、酸と塩基、化学反応及び酸化と還元について、日常の生活の中で起こっているできごとを取り上げる。基礎的な化学を通して、科学的なものの見方考え方を理解し、バランスのとれた物質観、ひいては世界観を養う一助になることを主眼にしたい。	
			生物学	動・植物の違い、細胞の多様性・共通性、生命の連続性、遺伝の仕組み、環境と動・植物の反応、生命・生命現象と物質の関係、生物の特殊性・特異性や曖昧性をもとに生物（人間）に共通する諸器官系及びバイオテクノロジー技術を含め解説し、人間とは何かを理解させる。	
			地球科学概論	地球人の活動範囲は著しく広くなり、地球上の至るところへ行くことができ、特殊な訓練をつめば宇宙まで行くことができる。その反面、地球の環境は著しく変化している。本講義は、地球がどのような姿をしているか、また地球環境がどのように変化してきたかを認識する。地球は大きく見て三つの異なった相から構成されている。気圏、水圏、岩圏である。固体地球ではこの三つの相があい接し、互いに複雑な作用を行っている。固体地球表面は大気と接する陸と海洋と接する海洋底からなり、これらは際立った対立を示している。地球科学の最近の情報を講義したい。	

科目区分			授業科目の名称	備考	備考
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	自然理解	地球物理学概論	1910年頃ドイツの科学者ウエゲナーが海岸線の類似性から大陸移動説を唱えた。不動と考えられていた大陸を移動可能と考え、海洋底は年々生産され、しかも海溝で消滅する。従来説明困難であった事柄が説明できるようになった。観察の学問である地球科学に新しいデータが加わると学問体系も変化していった。今や、地球の誕生から現在まで地球に生じた変化を読みとれる時代になってきた。本講義はこのような変遷について学ぶ。	
			人類学	本講義は、人類の移動の歴史を生態、文化、経済とからめて理解することを目指す。約500万年前にアフリカで誕生した人類は、まずアジア、ヨーロッパへと、さらに、数万年前に南北アメリカ大陸、オーストラリア、オセアニアへと居住地を拡大した。歴史時代には、いくつかの民族の大移動ののち、大航海時代にヨーロッパ人による植民地化がはじまった。今日、仕事を求めた人の移動(移民)が世界規模で起きている。これら、人類の移動の歴史を人類史に位置づけて解説する。	
			物理学	ものを作る際、全体の構造の設計や強度の確認などには、材料の物理的な性質や力学を考えた計算が必要になる。物理学は単なる思い付きを集めたものではなく、きちんと検証された「法則」をまとめたものである。「法則」とは、誰が何度確かめても同じ結果になるものだけを選び抜いたものである。また、それぞれの法則の間に矛盾がないことも確認されている。「なぜ」「どうして」という問を つきつめて考え、きちんとした法則にまとめることで、世の中の仕組みを理解しようとする学問である。	
			生命倫理	生命倫理学とは、生命に関わる人間の行為について、人が人と共に幸せに生きていくためのルールを私たち全員で討論し作成していく学問である。これらルールの論点を整理し、どう対処すればよいのか、その基準をさぐることを目的とする。そのため毎回の授業は、「導入のディスカッション」→「解説」→「レポート」の順で行う。 (オムニバス方式／全15回) (61 亀井 美穂／7回) 生命の始まりをめぐる倫理問題―特に出生前診断と選択的中断、生殖医療―を論じる。 (34 大宮 有博／8回) 生命の終わりをめぐる倫理問題―安楽死、脳死、エンディングケア―を論じる。	ｵﾑﾆﾊﾞｽ方式
		歴史文化理解	日本史	小学校から高等学校まで、すでに日本の歴史は何度も学習してきているが、ややもすればそれは断片的な歴史的事象の年次的羅列に陥りがちである。本講義では、歴史が原因と結果の連鎖であることを学生諸君が意識できるように、とくに政治と社会の歴史を中心に講義を進めていく。また、日本史の講義ではあるが、アジアを中心とする国際社会との関わりもできる限り視野に入れる。	
			日本思想史	本講義は二部構成とする。第一部は日本の伝統の中核、日本人の精神の本質にあるものはなにかについて考察する。最初に日本的とか日本人好みと言われる場合のイメージについて考える。第二部では明治維新前後における日本近代思想の形成について考察する。まず、幕末維新期における対外意識の形成とその問題を取り上げる。啓蒙や民権の思想が抽象的・概念的性格を持つのに対し、より生産や生活、風土や歴史を重視するという特徴があるが、こういう思想の意味について考えながら、幕末維新期の思想を全体として振り返る。	
			中国文化入門	大抵の学生にとって、中国は近くて遠い存在だが、しかし何かと気になる国であろう。明治維新の「脱亜入欧」による中国離れ以来、とりわけ戦後の冷戦構造ともかかわって意識的にも疎遠な関係が長く続いてきた中国だが、近年急接近が図られ再び身近な存在になってきている。本講義では、その中国の文化的なバックグラウンドと今のトレンドについて講義する。	
			英米文化入門	語源の観点から、英米文化の真髄を解明する。EnglandやBritainはどういう意味か、イギリスの言葉を日本語でなぜ英語というのか、どうしてAmericaという国名がついたのか、NewYorkやChicagoという地名の由来は何か、国名や地域名、そして地名にこだわって英米文化の本質や特徴を明らかにする。	
			文化人類学入門	本講義は、文化人類学の基本的知識および方法論を、特に宗教と医療に関するテーマをとりあげながら、習得することを目的とする。全体を3部構成とし、第1部を文化人類学の視座、第2部を信仰と世界観、第3部を医療の文化とし、それぞれ以下の順序で講義を行う。第1部:人類誕生と文化、言語とシンボル、親族理論、人類学の歴史。第2部:葬送と霊魂観、儀礼と時間、身体とケガレ。第3部:病気と文化、シャーマニズム、グローバル化する近代医療、心と社会。	
			世界の近現代史	現代世界の問題の多くは近代に起因しており、また近代以降に「世界の一体化」は進展していった。このため、世界の近現代史を学ぶことは、グローバリゼーションなど現代世界の諸問題を考えるために必要である。本講義は世界の近現代史をイスラーム世界の観点から主に考察し、他地域(ヨーロッパなど)の動向との関連についても述べていく。受講者は、世界史を学ぶ意義を考えてもらうと同時に、グローバリゼーションなど現代世界の諸問題に対する問題意識を持って履修してもらいたい。	
			世界史	現代世界ではイスラームの影響が非常に大きい。このため、イスラームがどのように世界各地に広がり、定着していったのかという問題や、世界史におけるイスラームの位置づけを考えることは、世界が経て来た歴史や現代世界を理解するための手がかりの一つになると思われる。本講義では、高校世界史ではいまだ記述が少ないイスラームおよびムスリム(イスラーム教徒)の歴史を中心に扱い、イスラームとほかの地域との諸関係(政治、経済、文化など)についても言及する。なお、本講義の対象年代は7～18世紀である。	

科目区分			授業科目の名称	備考	備考
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	歴史文化理解	考古学入門	歴史学の一分野を構成する考古学とは、遺物・遺構・遺跡の検討・研究を通して過去の人間活動の総体的復原・解明を試みることである。この目的のためには文献史学・民族学・人類学・民俗学など近接する諸分野の成果との対比と総合も重要となる。講義では、主として中国古代の物質文化史を中心とする中国考古学について講義する。中国考古は先史考古学（旧石器時代、中石器時代、新石器時代）よりも歴史考古学（殷代～）が大きな比重を占めており、講義では焦点を殷周～隋唐時代に定め、物質文化・文化遺産に重点をおいて中国大陸の遺跡・出土史料などの文物考古を紹介していく。	
			陶芸論	現在の社会において、芸術、美術の持つ役割は大きくなっており、持たれる関心の度合いも大きくなっている。芸術というと一般的には、美術館等で鑑賞するものという意識があるが、芸術、美術はもっと身近にあり、気軽に触れ合えるものである。本講義では、やきものを通して受講者にそうした事を伝え、共に芸術、美術について考えていく。	
			陶芸演習	やきものづくりの技術は色々あり、簡単なものから難しいものまで様々である。しかし、技術は道具の一種であり、技術がものをつくるわけではない。作者が何をつくりたいのか、それを助けるのが技術であり、無い場合には新しい技術を開発するのである。本講義では、実習形式により、やきものづくりの楽しさ、厳しさに触れるとともに、やきものに関する自分なりの見方や考え方を身に付ける。	
		環境理解	環境科学	エネルギー文明の中で、環境汚染の発生原因、自然界へ及ぼす影響及び発生抑制について考える。具体的には、化石エネルギーの大量消費によってもたらされる大気汚染、酸性雨及び地球温暖化、また、フロンガスによるオゾン層の破壊、DDTやBHCなどの農薬被害、ごみの焼却により発生するダイオキシン、自然界へ流出した化学物質による環境ホルモンの影響、肺ガンを誘発するたばこの煙、さらに、紫外線及び放射性物質などの問題について考える。	
			生態学	21世紀に入って人間の生存や文明社会持続の前提として、地球環境の保全が重要視されており、本講義では1生物圏の動態や2個々の生物種の生活史を解明する科学的方法としての生態学を論じる。1では熱帯環境に見られる生物多様性など具体的な地域情報をベースに自然の構造を紹介し、2の観点では主として霊長類などを素材として種の生活史に基礎づけられた生物群集のメカニズムや種内・種間の社会的諸関係について教授することにより、生物学を専門としない初学者に生物的自然のあり方を理解させる。	
			地球環境学	地球は太陽系の中でも、特異な環境を持つ。地球以外の惑星や多くの衛星には地球のような穏やかな自然は存在しない。これは地球の大きさや太陽からの距離、また地球の形成の条件で決まったものである。この環境により、地球のみ、生物が誕生し、進化した。この進化は地球環境に生物が適応し、さらに、生物の進化と共に地球環境も進化した。その結果が、現在の地球であり、この現在の環境は地球誕生時の環境と著しく異なるものである。地球の誕生から現在まで、環境の変遷と現在地球で問題になっている地球環境の変化を論じる。	
		身体理解	健康の科学	日本国憲法の第二十五条、「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」と定めている。本講義は、この精神を十分に理解するとともに、生命の尊厳を基盤とした個人の健康・保持増進の為の日常的努力が義務として要求されることを理解する。個人の健康を保持増進するための手立てを人文・社会科学的、自然科学的な学問研究から学び、生涯にわたって、身体的、精神的、社会的に健全な健康観を形成する契機になることを目指す。	
			スポーツの科学	「スポーツの科学とは何か」との問いに答えるためには、「スポーツ」とは何か、スポーツ活動の「主体である人間」とは何か、さらに「科学」とは何かを吟味する必要がある。本講義では、膨大な知見の中から、大学生が生涯にわたってスポーツを「健康で文化的な」生活を送るために役立てるために必要な内容について解説し、スポーツ文化の享受者であり、スポーツを愛好する教養人を育てることを狙いとする。	
			スポーツ初級A	本授業は、主に学校教育課程でも多く見られる団体種目系について、初心者レベルを対象に実技形式で実施する。種目は、サッカー・バレーボール・バスケットボール・ソフトボール・ラグビー・スキーから選択する。	
			スポーツ初級B	本授業は、主に学校教育課程でも多く見られる団体種目系について、初心者レベルを対象に実技形式で実施する。種目は、サッカー・バレーボール・バスケットボール・ソフトボール・ラグビー・スキーから選択する。	
			スポーツ中級A	本授業は、生涯スポーツの要素が強く個人または少人数で実施可能な種目について、実技形式で実施する。対象者は、ある程度基礎的な技術を持つ者、並びに「スポーツ初級A」又は「スポーツ初級B」を受講し単位を取得した者とする。種目は、テニス・バドミントン・ゴルフ・卓球・スキーから選択する。	

科目区分			授業科目の名称	備考	備考
NGU教養スタンダード科目	社会的教養	身体理解	スポーツ中級B	本授業は、生涯スポーツの要素が強く個人または少人数で実施可能な種目について、実技形式で実施する。対象者は、ある程度基礎的な技術を持つ者、並びに「スポーツ初級A」又は「スポーツ初級B」を受講し単位を取得した者とする。種目は、テニス・バドミントン・ゴルフ・卓球・スキーから選択する。	
			スポーツ上級A	本授業は、専門的にその種目に取り組んでいる者、並びに「スポーツ中級A」又は「スポーツ中級B」を受講し単位を取得した者を対象に、実技形式で実施する。	
			スポーツ上級B	本授業は、専門的にその種目に取り組んでいる者、並びに「スポーツ中級A」又は「スポーツ中級B」を受講し単位を取得した者を対象に、実技形式で実施する。	
		地域理解	地域商業まちづくり学	本講義は、商店街とそれに関連する地域コミュニティを対象として、講義形式で商店街の歴史や施策、現況やそれを取り巻く環境を概説し、商店街活性化の方向性や社会的意義の基本的理解を得ることを目的とする。 特に、コミュニティビジネスやまちづくり施策との関連性を中心にその成功事例を取り上げて、商店街活性化に必要な資源や施策について考察する。	
			歴史観光まちづくり学	本講義は、観光地あるいは(歴史的)観光資源を有する地域におけるまちづくりを対象として、講義形式で観光の社会的意義や観光の歴史、国内外の観光の実態等の基礎を学ぶとともに、とりわけ地域の歴史を通じて、観光資源の評価と抽出、また観光政策のあり方についての基本的理解を得ることを目的とする。 特に、地域の歴史的資源をいかに観光まちづくりとして再構築していくか、また観光資源をどのように評価等していくか等について考察していく。	
			減災福祉まちづくり学	本講義は、今後発生が予想される南海トラフ地震や大型台風・集中豪雨に対する減災まちづくり、および日常的取組みとしての福祉まちづくりを対象として、講義形式でこれまでの災害史と復興支援対策、コミュニティとレジリエンス、情報伝達、現状の防災対策等の実態の基礎を学ぶとともに、「減災まちづくり情報システム」を活用した減災福祉まちづくりへの取り組み方法を学ぶ。特に災害の影響は社会的弱者に大きいため、福祉的視点をとりいれたまちづくりを学んでいく。	
			地域商業まちづくり演習	授業は演習形式を基本とする。地域商業まちづくり学で培った知識を基礎として、受講者自らが商店街や地域コミュニティに関連する課題を調べ、内容を検討し、教員と受講者との質疑応答、受講者同士の討論および現地調査などを行い、課題解決策について検討する。	
			歴史観光まちづくり演習	授業は演習形式を基本とする。歴史観光まちづくり論で培った知識を基礎として、受講者自らが観光でにぎわっている地域や(歴史的)観光資源が蓄積している地域について、現状および将来展開していくうえでの地域実態や課題の整理、その課題解決策を提示するために、教員と受講者との質疑応答、受講者同士の討論および現地調査などを行い、まちづくり提言について検討する。特に本学が立地する名古屋市および瀬戸市を中心に演習フィールドとしていく。	
			減災福祉まちづくり演習	授業は演習形式を基本とする。減災福祉まちづくり論で培った知識を基礎として、受講者自らが減災に関心の高い地域に入っていって、地域住民との情報交換や交流を通じて、地域実態や住民意識、地域対応能力等について把握し、そこでの減災福祉上の課題の整理、その課題解決策を提示するために、教員と受講者との質疑応答、受講者同士の討論および地域に入っての現地調査などを行い、まちづくり提言について検討する。特に本学が立地する名古屋市南部エリアを中心に演習フィールドとしていく。	
			上級まちづくり演習	授業は演習形式を基本に行う。3つのまちづくり演習のうちどれかひとつを履修したものだけが受講できる。これまでに学修してきたまちづくりに関する知識・論点の中から自ら課題テーマを設定したうえで、これに対する教員や受講者との質疑応答・討論や現地調査を通じて、 具体的な課題解決プランを作成し、関係者の協力のもとで実際の活動を行い、その成果と課題についてレポートする。	
	言語とコミュニケーション		日本語表現	本授業は、授業を聞いて、効率的にノートを取ったり、レポートを書いたり、人前で要領よく話をするなどという、日常生活の中で常に必要とされる能力を伸ばすことを目的とする。具体的には、課題に対する三分間スピーチ、敬語の使い方、集団討論を通したディベート、三百字小説、図形を言葉で説明するなどという作業を通して、それらの能力の向上をはかる。	
			日本語表現上級	日本語を読み、聞く能力や、日本語で書き、話したりする、より高い能力を身に付けさせる。基礎的な知識やその応用は、既に「日本語表現」で終えているので、本講義では、より生きた表現能力が身に付くように、それぞれの課題に応じた応用練習問題に取り組ませたり、具体的な作品を読みながら、そのレポートを書いたり、口頭で説明させたりする作業などを行う。	
			基礎英語1	本授業では、速読に重点を置いたreading演習を通して、英語に関する基本的事項の確認とその定着をはかる。具体的にはe-learningを導入し、受講生は、ネット上にある問題を解く演習形式で授業は進められる。演習はvocabulary building, readingの各パートから成っており、各レッスンは日常生活に関するもの、ビジネスに関するもの、あるいは旅行に関するものなど何らかのトピックが設定されている。またこれらの活動と並行して、インターネットを活用し、英語で書かれたHPを読み、課題に沿った情報を読み取り、ファイルをまとめる。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
NGU教養スタンダード科目	言語とコミュニケーション	基礎英語2	本授業は、「基礎英語1」に続いて、速読に重点を置いたreading演習を通して、英語に関する基本的事項の確認とその定着をはかる。具体的にはe-learningを導入し、受講生は、ネット上にある問題を解く演習形式で授業は進められる。演習はvocabulary building, readingの各パートから成っており、各レッスンは日常生活に関するもの、ビジネスに関するもの、あるいは旅行に関するものなど何らかのトピックが設定されている。またこれらの活動と並行して、インターネットを活用し、英語で書かれたHPを読み、課題に沿った情報を読み取り、ファイルをまとめる。	
		英会話1	本授業は英語で行われ、正確に英語を理解する能力を向上させることが目的である。音声のみならず、教員の身振り、手振り、口元、顔の表情などに細心の注意を払うことにより、コミュニケーションスキルとしての英語力の醸成を図ることを目標とする。テキストは各教師によって異なるが、全体学習、グループ討論、課題学習などが各教員の指示によって行なわれる。	
		英会話2	本授業は英語で行われ、「英会話1」に続いて、正確に英語を理解する能力をさらに向上させることが目的である。この授業でも音声のみならず、教員の身振り、手振り、口元、顔の表情などに細心の注意を払って聞き取ることの必要性を身に付けさせる。テキストは各教師によって異なるが、全体学習、グループ討論、課題学習などが各教員の指示によって行なわれる。	
		入門ドイツ語1	ドイツ語を読み書き話すために欠くことのできない基本的な文法知識を学ぶ。ドイツ語それ自身は極めて厳密な文法構造を持った言語であり、この言語を学ぶことは同時にまたものごとを正確に精密に考える力を養うことにもつながる。言語学的には、ドイツ語は英語と同様にゲルマン語に属する言語であり、両者の関係は歴史的に非常に深い。初学者は見慣れない文法項目に驚きながらも、二つの言語間に類似性を見出すことも多いであろう。	
		入門ドイツ語2	本授業は「入門ドイツ語1」を継続し、過去や未来の表現、受動態、関係代名詞など、さらに進んだ文法知識を習得する。	
		基礎ドイツ語1	「入門ドイツ語」で学ぶ基本的な文法知識を反復練習しつつ、現代ドイツ語で書かれた、やさしく興味のもてる読み物を読んでいく。言葉は単にコミュニケーションの手段であるばかりではなく、同時に我々の日常的な考え方、感じ方をそれと意識できないほど深く規定している。ドイツ語を学ぶことは、単にドイツ語を話す人たちとの意志疎通をはかるばかりではなく、彼らの考え方、感じ方を学ぶことでもある。言葉を通して、異質な文化をも学んでいきたい。	
		基礎ドイツ語2	本授業は「基礎ドイツ語1」を継続し、さらに進んだ表現形式を学びながら、異文化理解を深めていく。	
		入門フランス語1	英語全盛の時代であるが、国際機関における公用語として第二の勢力を維持し続けるフランス語に触れておく意義は大きい。本科ではフランス語の基礎を、綴りの発音から徹底的に学ぶ。フランス語学習の最初のつまずきは、綴りが読めないことに起因するからである。それから徐々に日常の基本単語、基本表現を覚えてゆく。	
		入門フランス語2	本授業は「基礎フランス語1」に続く科目である。本科では特に動詞の活用に力を入れたい。フランス語の動詞活用の難しさはフランス語学習の第二の関門であるが、これを越えなければフランス語習得は叶わない。	
		基礎フランス語1	本授業は、入門フランス語で学んだ基礎知識をさらに定着させ応用することで、1年次終了時に実用フランス語技能検定試験5級程度（学習50時間以上）の実力を目指す。	
		基礎フランス語2	本授業は「基礎フランス語1」に続く科目である。フランス語検定試験5級の実力をめざし磨きをかける。	
		入門スペイン語1	スペイン語は、世界の数億人が日常的に使っている言語であり、スペイン以外にも中南米などで話されている国際語である。海外では、その実用性の高さから、スペイン語教育が急速に発展している。また、日本には約6万人の中南米出身者が住んでおり、ここ東海地方には多くの集住地域があることから、教育や医療分野でのスペイン語習得に対する関心が高まっている。「スペイン語1」はスペイン語の基礎を習得するクラスであり、スペイン語の発音に慣れ、基本的な挨拶表現と現在時制を用いた自己表現ができるようになることを目的とする。	
		入門スペイン語2	スペイン語は、世界の数億人が日常的に使っている言語であり、スペイン以外にも中南米などで話されている国際語である。海外では、その実用性の高さから、スペイン語教育が急速に発展している。日本には約6万人の中南米出身者が住んでおり、ここ東海地方には多くの集住地域があることから、教育や医療分野でのスペイン語習得に対する関心は高まっている。本授業は、「入門スペイン語1」に続き、スペイン語の基礎を習得するクラスであり、スペイン語の発音に慣れ、現在時制を用いた基本的な自己表現ができるようになることを目的とする。	
		基礎スペイン語1	入門スペイン語で学んだ基礎知識をさらに定着させ応用することで、1年次終了時にスペイン語検定試験6級もしくは5級程度の実力をつけることを目指す。	
		基礎スペイン語2	「基礎スペイン語1」に続く科目である。スペイン語検定試験5級の実力をめざし磨きをかける。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
NGU教養スタンダード科目	言語とコミュニケーション	入門中国語1	中国語の発音、文字表記、基礎的な語彙、基礎的な文型や日常よく使う文句、などを学習し、会話の練習を十分に行い、最低限のコミュニケーション能力を習得できるよう授業を行う。さらに、中国語の能力を高めるだけではなく、中国の社会・文化、中国人の考え方・生活習慣など中国についての関心を高め理解を深められるようにもする。	
		入門中国語2	中国語の発音、文字表記、基礎的な語彙、基礎的な文型や日常よく使う文句、などを学習し、会話の練習を十分に行い、最低限のコミュニケーション能力を習得できるよう授業を行う。さらに、中国語の能力を高めるだけではなく、中国の社会・文化、中国人の考え方・生活習慣など中国についての関心を高め理解を深められるようにもする。	
		基礎中国語1	中国語の発音、文字表記、基礎的な語彙、基礎的な文型や日常よく使う文句、などを学習し、会話の練習を十分に行い、最低限のコミュニケーション能力を習得できるよう授業を行う。さらに、中国語の能力を高めるだけではなく、中国の社会・文化、中国人の考え方・生活習慣など中国についての関心を高め理解を深められるようにもする。	
		基礎中国語2	中国語の発音、基礎的な語彙、基礎的な文型や日常よく使う文句、などを学習し、会話の練習を十分に行い、最低限のコミュニケーション能力を習得できるよう授業を行う。さらに、中国語の能力を高めるだけではなく、中国の社会・文化、中国人の考え方・生活習慣など中国についての関心を高め理解を深められるようにもする。	
		入門韓国語1	ハングルの創製原理と歴史を考察し、韓国語の言語的特徴と構造を日本語と比較しながら学習する。文字の読み書きと基礎的な発音規則、挨拶などの簡単な会話を行う。	
		入門韓国語2	発音規則に沿った文章の読み方と綴り方の練習と、助詞の使い方や用言の語尾活用の基礎、さらに叙法や待遇法などの基礎文法を学ぶ。	
		基礎韓国語1	韓国のテレビドラマを観ながら、挨拶などの日常生活に必要な表現や決まり文句などを、まずは文字から離れて耳と口で修得する。大きい声で繰り返して発音することによって、頭の中で言葉を組み立てるのではなく、自然に口から言葉が出てくるように練習する。その過程の中で、文字や文法に対する知識も身に付ける。また、ドラマを通して韓国人の慣習、文化、生活感覚に対する理解を深めていく。	
		基礎韓国語2	「基礎韓国語1」に引き続き、韓国のテレビドラマを観ながら、挨拶などの日常生活に必要な表現や決まり文句などを、まずは文字から離れて耳と口で修得する。大きい声で繰り返して発音することによって、頭の中で言葉を組み立てるのではなく、自然に口から言葉が出てくるように練習する。その過程の中で、文字や文法に対する知識も身に付ける。また、ドラマを通して韓国人の慣習、文化、生活感覚に対する理解を深めていく。	
		手話入門	手話は「言語」である。聴覚障害者の手まねとして、長く偏見の目にさらされてきた「言語」でもある。手話は福祉関係者だけの狭隘なものでもなく、ボランティアと同義語でもない。本授業では、「言語」としての手話を、誰でもが、気楽に学べるよう、テレビドラマ、映画、歌などを副教材にして、手話の読解力と表現力の初歩を修得する。	
		手話基礎	手話は「言語」である。聴覚障害者の手まねとして、長く偏見の目にさらされてきた「言語」でもある。手話は福祉関係者だけの狭隘なものでもなく、ボランティアと同義語でもない。本授業では、「手話」受講者もしくは手話の初歩を修得した者を対象に、手話の読解力と表現力の応用を修得する。	
	情報理解	情報処理基礎	現代社会においては、インターネットを始めとして多様な情報が流通し、利用されている。また、どのような分野においても、情報というものを処理することにより問題を解決し、判断をすることが行われている。情報処理に関する基本技能や基礎知識は、大学生が基礎教養として学習しなければならないものとなっている。本授業は、ノートパソコンで例題を演習する実習形式で、ワープロソフトによる文書作成、表計算ソフトによるデータ処理、及びネットワーク利用に関する最低限必要な知識や技能を身に付ける。	
		情報概論	本講義では、情報とは何かをはじめ、情報の表現方法、情報処理の仕組み、情報の活用方法に関する概念、原理、仕組み、技法などを分かり易く解説するとともに、これまでにどの様なICTが知られているか、また実際にICTがどの様に利用されているかについても概説する。指定テーマに関するいろいろな概念、原理、仕組み、技術などを取り上げて解説を行い、テーマと関連のある実践的な課題を示し、その課題の解答を完成させる「双方向コミュニケーション」講義方式を採用する。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
NGU教養スタンダード科目	教職	教職論	本講義は教職への意欲を高めることを目的とする。具体的には、教職の意義と役割について理解すること、戦前戦後の教員の歴史について理解すること、教師の基本的・具体的資質について理解すること、現代公教育における教員の使命を理解すること、教員の職務について理解すること、教員の力量形成とその支援について理解すること、教員養成制度の概要について理解することを目指す。	
		教育原理	教育という営みは、教授過程と学習過程から成立するものである。学生のこれまでの教育との関わりは、もっぱら教えられる側、学ぶ側に身を置き、学習過程を経験することが中心であったであろう。それが、教職を志すという立場に立つことで、今度は教える側になり、様々な教育現象を捉え、対処することが求められるようになる。すなわち、本講義を受講することから、教授過程への第一歩を踏み出すわけである。そのため、本講義は、教育学への入門的性格を有している。教育学の各領域を概観しながら、教育に関わる諸現象を多角的・多面的に捉える。	
		教育心理学概論1	教育心理は心理学の諸理論を教育の現場に応用する科学である。学校教育を考える上で、教育心理学に関するさまざまな知識や技術を習得し、それらを利用しながら教育に関わる現象を分析的に捉えることは重要である。また、近年、「不登校」、「いじめ」、「学級崩壊」といった学校をめぐる出来事が社会問題化してきている。本授業では、教育心理学の基本的な用語や理論を正確に理解し、実際の教育現場をイメージしながら自分の中に取り入れ、学校をめぐる問題を心理学的に考える基礎を養うことを主な目的としている。主として、発達と学習の基礎的問題を取り上げる。	
		教育心理学概論2	本講義は、主として、「教育心理学概論1」の内容をふまえ、教育の方法などの具体的問題を考えながら、学習における”時”の問題（レディネス）、学習のプロセスで生じる意欲の形成と喪失の問題（モーティベイション）、学習者のもつ資質の問題（パーソナリティとハンディキャップ）、教育の方法論の問題（人間関係のダイナミックス）、学習材料のもつさまざまな性質と学習者の反応の問題などについてできるだけ具体的に検討していく。	
		教育制度論	教育に携わる者にとって今日の教育制度及び教育法規についての理解と認識は欠くことのできない基本的要件である。この授業では、教育制度の歴史に関する認識を深めるとともに教育実践がどのような制度制度と教育法規の中で営まれているかということについての基本的知識を獲得することを目的とする。	
		特別活動論	本科目においては、学生（個人あるいはチーム）が主体となって、「特別活動」あるいは「総合的な学習の時間」におけるいずれかの活動を選択して、その性質を探究したうえで、そのよりよい在り方（授業案あるいは計画案）を提案するプロジェクトを実行する。プロジェクトにおいては、課題に対しての調査分析（少なくとも1回のフィールドワークを含まなければならない）を通して、最終報告書（提案書）を作成し、プレゼンテーションを実施する。	
		教育の方法と技術	激しく変わる教育環境の中でメディア（特にコンピュータ）利用の研究・実践と授業デザインは教育方法の中心的課題である。コミュニケーションとしての教授・学習過程の中で、教師主導の教材提示型のメディアの利用ではなく、学習者が自ら学び、思考の道具として使えることが大切である。「心理学からの新しい学びへの提案」「コミュニケーションとしての教授・学習プロセス」「学習・教授を支援するメディア」「授業デザイン」を主なテーマとして講義は構成される。	
		道徳教育論	本講では、道徳に大きな関心を表わす林竹二、灰谷健次郎、谷昌恒、梅原猛、当該担当教員の書物、研究論文などを通し、また、宮沢賢治の作品、ボランティア活動記録、中学校学習指導要領、聖書などを参考資料として、道徳教育論の授業をすすめ、受講者が道徳的指導力、実践力を身に付けることを目指す。各講義の後半で、受講者に「生きる意義、いのちの尊さ、正義、愛、平和、差別、悪、利他、エゴ」などからテーマを選び、そのことについて発表する機会をも設ける。	
		生徒・進路指導論	現在の学校教育において、生徒一人ひとりに規範意識を育成していくことが、生徒指導・進路指導・教育相談を推進していく上で、重要な役割を果していることを認識するとともに、規範意識を育成するために教育活動を地道に実践している学校や教師の姿勢を視聴（DVD）したり、具体的な生徒指導・進路指導・教育相談の実践指導事例を読んだりして、教師の子どもに対する関わり方、対応の仕方の基礎を養う。	
		教育相談	本講義は、教免法における「生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目」に該当するものであり、教育相談について論じる。今教育界で問題になっている不登校、いじめ、非行、学校崩壊といった領域の問題を直接考えなければならない科目である。教育相談は、教育相談の意義、教育相談の基本的な技法、学校での教育相談の進め方等を学習する。特に、不登校、いじめ、非行等の子どもたちへの取り組みは、事例を挙げながら考えて行きたい。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	国際文化理解英語1	本授業は、欧米やアジア・アフリカ諸国など世界各地で話題になっている政治的・経済的・社会的な問題を扱った英字新聞を読み、学生が国際問題についての理解を深めることを目的とする。学生は、指定された英字新聞の記事を毎回読み、翻訳を作成して授業にのぞむ。授業中は、学生と教員が該当部分の内容を確認し、質疑応答を行う。また必要に応じて、教員が新聞記事の解説を加える。	
		国際文化理解英語2	本授業は、「国際文化理解英語1」に引き続き、欧米やアジア・アフリカ諸国など世界各地で話題になっている政治的・経済的・社会的な問題を扱った英字新聞を読み、学生が国際問題についての理解を深めることを目的とする。学生は、指定された英字新聞の記事を毎回読み、翻訳を作成して授業にのぞむ。授業中は、学生と教員が該当部分の内容を確認し、質疑応答を行う。また必要に応じて、教員が新聞記事の解説を加える。	
		留学英語中級	本授業は、TOEFL問題の学習を通して、英語の基本的な能力を身に付けることを目標とする。毎週の講義、練習問題を通してTOEFLの独特な出題形式に慣れるとともにListening, Reading, Grammar, Vocabularyの学習方法を身につける。TOEFLは欧米の大学へ入学するために必要な英語力があるかどうかを測る試験であるので、Listening, structure & written expression, readingから構成されており、本講義ではすべての項目をバランスよく扱う。	
		留学英語上級	本講義は、留学英語の上級者向けのコースで、英語圏への留学を志す学生を対象に、さらなる英語力の向上と異文化理解を深めることを目的とする。英語力については、英語圏の大学留学に必要とされるTOEFL ITP 500～550点が目標であり、TOEFL ITPで測られる技能(1) listening, (2) reading, (3) structure and written expressionを向上させることを目指す。また、ビデオ教材を題材にディスカッションやリーディング活動を通して、留学先に対する異文化の理解を助け、留学先で実際に必要となる英語力を身に付ける。	
		TOEIC英語入門	TOEICは、英語を母語としない人を対象に実施され、実社会で個人の英語運用能力を保証する最もスタンダードな試験になっていると言っても過言ではない。この授業は、いままでの英語学習で培ってきた成果を踏まえ、語彙力、読み取り能力、リスニングなどの強化を行いながら、このTOEICでのスコア・アップを目的とする。	
		TOEIC英語基礎1	この授業では、いままでの英語学習で培ってきた成果を踏まえ、語彙力、読み取り能力、リスニングなどの強化を行いながら、TOEICでのスコア・アップを目的とする。TOEICの出題形式や傾向にそって授業を行うが、単に試験のノウハウに終わるのではなく、総合的な英語コミュニケーション能力の向上に結びつけることも大きな目標である。	
		TOEIC英語基礎2	「TOEIC英語基礎1に続くこの授業では、さらに語彙力、読み取り能力、リスニングなどの強化を行いながら、TOEICでのスコア・アップを目的とする。ここでもTOEICの出題形式や傾向にそって授業を行うが、総合的な英語コミュニケーション能力の向上に結びつく基礎的英語運用力を身に付けさせる。	
		TOEIC英語実践1	「TOEIC英語基礎1・2」での学習による基礎的英語力の向上を基礎に、さらに高い実用的な英語運用能力を目指すための指導を行う。この授業で求める英語学力はTOEIC700点を目標とし、海外での実務場面において基本的な英語コミュニケーションが可能な段階を目指す。	
		TOEIC英語実践2	「TOEIC英語基礎1・2」および「TOEIC英語実践1」での学習による基礎的英語力の向上を基礎に、さらに高い実用的な英語運用能力を目指すための指導を行い、国際共通語としてのコミュニケーションスキルとして実践的な場面を想定した学習を行う。この授業で求める英語学力はTOEIC700点を目標とし、海外での実務場面において基本的な英語コミュニケーションが可能な段階を目指す。	
		ビジネス英語1	海外とのビジネスの現場では、歴史・文化・政治・経済・言語・発想などの違いに起因する様々な誤解や摩擦が起きている。そこでは、双方の習慣、思考方法、相手の立場を理解し、簡潔で明快な英語表現をすることが重要になります。この授業では、そうしたビジネス現場での英語の特徴を学ぶと共に、実際のビジネス文書例、映像などを使って、英語コミュニケーション能力（聴く、読む、書く）の向上を目指す。	
		ビジネス英語2	この授業は、「ビジネス英語1」に続き、ビジネス現場での英語の特徴を学ぶと共に、実際のビジネス文書例、映像などを使って、英語コミュニケーション能力（聴く、読む、書く）の向上を目指す。	
		時事ドイツ語1	一年次の「入門ドイツ語」および「基礎ドイツ語」では初等文法を学びながら、ドイツ文化への理解も目ざしてきた。「時事ドイツ語」は「応用ドイツ語」とならんで、ドイツ語のコミュニケーション能力のさらなる発展をめざしながら、現代ドイツ社会の様々な局面に注目する。現代ドイツについて書かれた平易なテキストを読みながら、時事的な語彙を習得し、ドイツの社会や文化への関心を深めていく。	
		時事ドイツ語2	「時事ドイツ語1」を継続し、ドイツの社会や文化への関心を深めていく。	
		応用ドイツ語1	初等文法を終えたことを前提に、一年次で学んだ基礎知識を確認しながら、その応用力を身につける。日常会話に不可欠な表現や、一歩進んだ文法知識を習得し、ドイツ語によるコミュニケーション能力に磨きをかける。そのためにはドイツ文化への理解も深めていかなければならない。テーマ性のある楽しいテキストを読みながら、読解力を養い、あわせてドイツ人やドイツ文化の特性も理解していく。	
		応用ドイツ語2	「応用ドイツ語1」を継続し、ドイツ語によるコミュニケーション能力に磨きをかけていく。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	実践ドイツ語1	「実践ドイツ語」では、1年次および2年次で学んだ文法的知識を確実なものにし、ドイツ語の実践力を養う。会話や作文に重点を置き、日常会話に困らない力を身につけ、ドイツ語による自由な自己表現力の獲得をめざす。またドイツ社会や文化への理解をさらに深めるために、ドイツ人がドイツ人のために書いたテキストを読みながら、文法的に複雑な表現や、文化的背景を知ってはじめて理解できるような文章をも読み解けるようにする。	
		実践ドイツ語2	「実践ドイツ語1」を継続し、ドイツ語の実践的応用力に磨きをかける。	
		時事フランス語1	本授業は2年次のフランス語科目である。基本的文法事項について習得していることを前提として、時事問題を教材により高度なフランス語に接してゆく。現実のフランス生活などをモデルとした教材を使用して基本的なコミュニケーション力を身に付けることが目標となる。応用フランス語と組みになって、2年次終了時にフランス語検定試験4級、さらには同3級の実力を目指したい。	
		時事フランス語2	本授業は「時事フランス語1」に続く科目である。日常生活における基本的コミュニケーション能力の初等部分がある程度活用できるようになり、語学レベルとしてはフランス語検定試験4級の実力達成を目標とする。	
		応用フランス語1	本授業では、1年次に習った基礎知識をさらに発展させ、使いこなせるようにする。初頭の文法の習得がある程度前提となり、現代フランス社会の日常常識や生活教最小限必要な会話等が出来るレベルを目指す。語学としての目標はやはり、フランス語検定試験3・4級の実力達成である。	
		応用フランス語2	本授業は「応用フランス語1」に続く科目である。フランス語の理解力（読む、聞く）だけでなく、自ら使いこなす力（書く、話す）の基礎を固めてゆく。	
		実践フランス語1	本授業は、2年次までのフランス語学習を終えてさらに上を目指したい者のための科目である。実力的には、実用フランス語技能検定試験3級、できれば準2級まで目標にしたい。日常的なフランス語運用能力が身についたレベルであり、将来的にはフランスへの語学研修も視野に入れている。	
		実践フランス語2	本授業は「実践フランス語1」に続く科目である。フランス語圏への留学なども視野に入れた会話力、読解力を養うことを目標に、視聴覚教材なども用い、しっかりした基礎フランス語能力を磨く。	
		時事スペイン語1	本授業は2年次のスペイン語科目である。基本的文法事項について習得していることを前提として、時事問題を教材により高度なスペイン語に接してゆく。現実のスペイン語圏などをモデルとした教材を使用して基本的なコミュニケーション力を身に付けることが目標となる。応用スペイン語と組みになって、2年次終了時にスペイン語検定試験4級の実力を目指したい。	
		時事スペイン語2	本授業は「時事スペイン語1」に続く科目である。日常生活における基本的コミュニケーション能力の初等部分がある程度活用できるようになり、語学レベルとしてはスペイン語検定試験4級の実力達成を目標とする。	
		応用スペイン語1	本科目では、1年次に習った基礎知識をさらに発展させ、使いこなせるようにする。初頭の文法の習得がある程度前提となり、スペイン語圏社会での日常常識や生活教最小限必要な会話等が出来るレベルを目指す。語学としての目標はやはり、スペイン語検定試験4級の実力達成である。	
		応用スペイン語2	本授業は「応用スペイン語1」に続く科目である。スペイン語の理解力（読む、聞く）だけでなく、自ら使いこなす力（書く、話す）の基礎を固めてゆく。	
		実践スペイン語1	本授業は、2年次までのスペイン語学習を終えてさらに上を目指したい者のための科目である。実力的には、スペイン語検定試験3級まで目標にしたい。日常的なスペイン語運用能力が身についたレベルであり、将来的にはスペインへの語学研修も視野に入れている。	
		実践スペイン語2	本授業は「実践スペイン語1」に続く科目である。視聴覚教材なども用い、しっかりした基本的なスペイン語能力を磨き、実践場面での応用能力を身に付けるように指導する。	
		時事中国語1	時事的な教材を用いて、中国の現代社会の一般的な様相を知ると共に、新語や外来語を用いた時事的な内容を含む会話体や文章体のテキストが理解できるようにする。同時に、中国語における新語や外来語の表現方法の基本を理解し、今後も新たに現れるであろう新語や外来語の表現にも対応できる知識を身に付ける。また時事的な内容について、簡単な口頭のやり取りができるようにする。	
		時事中国語2	「時事中国語1」に続き、中国の現代社会について、より広い範囲に題材を取った教材を用いることによって、理解力を高める。また、時事的な内容のテキストをより多く読むことによって関係の語彙範囲を広げ、見て理解できる語彙を増やすことによって読解力を高める。さらに、関連の話題について、聞き取りや口頭の表現などの会話力、および、簡単な文を作ることができる作文能力を養成する。	
		応用中国語1	1年次配当の中国語科目「入門中国語」、「基礎中国語」の基礎の上に、次のことを身に付けることを目指す。会話体については、1年次の基本的応答からさらに語彙範囲を広げて、まとまった内容のやり取りを学習する。また音声面では、簡単な内容の聞き取りや口頭表現が無理なくできるようになることを目標とする。文章体については、複文やある程度のまとまった文章が、辞書を利用して理解できるようにする。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	応用中国語2	2年次後半の配当科目として、次のことを身に付けることを目指す。会話体については、生活上の様々な場面を想定した表現を知り、併せて聞き取り能力も養成する。日本語との言語習慣の違いなどを含めて中国語についての理解を深め、ある程度の長さのある内容について、口頭で表現できることを目標とする。文章体については、解釈する力を伸ばし、また簡単な文については、辞書を利用して作文できる力を養う。	
		実践中国語1	3年次配当の選択科目であるので、履修者の実力に相応した教材を利用して、実践できる語学力を総合的に身に付けることを目標とする。音声面では、実社会で中国語の簡単な会話ができるように発音とリスニングに磨きをかけ、聞いて理解したり口頭で表現できる範囲を広げる。また、中級程度の語彙を使った文章を理解できる力を養い、語彙については初級から中級語彙2000語程度を獲得することを目指す。	
		実践中国語2	3年次後半の配当科目であることを踏まえ、卒業後に社会で実際に役立つ中国語の実践力を身に付けることを目指す。音声面では、様々な場面を想定しての会話のパターンを知り、リスニングや口頭表現の力を付ける。また、書かれた中国語の理解力についても、様々な場所で目にする文章内容にできるだけ広く触れ、内容を把握する力を養う。「実践中国語1」に続いて、中級語彙3000語程度を獲得することを目指す。	
		コミュニケーション中国語1	中国語の4つの方面(聞く・話す・読む・書く)の基礎を身に付けるのと並行して、相手について尋ね、自分について話す、というコミュニケーション力の向上を重視する。まず、新出語句や文法ポイントを理解し、次に、文法例文を言えるようにし、更に、それらをベースに単語を入れ替えて、自分が相手に尋ねたい文を言えるように、尋ねられた方もそれに答えられるように、多く練習を取り入れる。	
		コミュニケーション中国語2	「同1」に引き続き、中国語の4つの方面の基礎を身に付けるのと並行して、相手について尋ね、自分について話す、というコミュニケーション力の向上を重視する。まず、新出語句や文法ポイントを理解し、次に、文法例文を言えるようにし、更に、それらをベースに単語を入れ替えて、自分が相手に尋ねたい文を言えるように、尋ねられた方もそれに答えられるように、多く練習を取り入れる。	
		ビジュアル中国語	動画(映画・ドラマ等)を教材として、実際の情景を見ながら言語表現を理解し、基本的な表現については、聞き取りや表現の能力を身に付けることを目指す。教材使用時は字幕の切り替えを利用し(中国語字幕、日本語字幕、英語字幕の併用表示等)、複数の字幕を見ることによって、言語間の表現の違いに対する意識を高め、中国語の語学力へ反映させる。また、平易な部分については適切な日本語に直せるよう、和訳の能力も養成する。	
		日常中国語1	難易度の高い中国語の文章を読めるようになったり、議論や討論など比較的高度な会話ができるようになることを目指すのではなく、中国に行ったおりに生活において日常的に使う必要のあるであろう比較的簡単な中国語を学び、実際にそれを十分に使いこなせるようなることを目指す。中国において日常的によく使いそうな文や単語を学び、それを使いこなせるように練習する。また、中国の社会・文化、中国人の考え方・生活習慣など中国についての関心を高め理解を深められるようにもする。	
		日常中国語2	難易度の高い中国語の文章を読めるようになったり、議論や討論など比較的高度な会話ができるようになることを目指すのではなく、中国に行ったおりに生活において日常的に使う必要のあるであろう比較的簡単な中国語を学び、実際にそれを十分に使いこなせるようなることを目指す。中国において日常的によく使いそうな文や単語を学び、それを使いこなせるように練習する。「日常中国語1」を引き継ぎ、より幅広い内容について話せるようになることを目指す	
		中国語検定読解入門	中国語の検定試験において、初級程度から受験できる試験が増加しており、これに対応する総合力を付ける。中でも特に通常の授業用教科書のみでは不足しがちな語彙力と、まとまった文章を読む読解力を伸ばす。各履修者が目指す検定で要求される語彙数の獲得を目指し、相応したレベルの文章が理解できるよう読解練習を行う。また、文型の面では、基本パターンを網羅的に学習することによって体系的な理解を目指す。	
		アジア言語入門1	フィリピンは日本に最も近い東南アジアの国である。日本で暮らす外国人のうち、3番目に数が多いのがフィリピン人である。このように身近なフィリピンの国語・フィリピン語を学ぶ。フィリピンの概要、言語事情に関して、2回授業を行い、フィリピン語の位置づけを理解してもらった後、言葉の学習に入る。初学者を想定し、教科書を使用し、初級程度の語学力を習得させる。	
		アジア言語入門2	アルファベットで表記し、発音しやすいインドネシア語は、短期間でマスターしやすい言語である。もともとはマレー社会(現在のインドネシア、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピンの一部)の交易語であり、「外国語」として学ばれ、話されていたため、時制の変化や格(主格・所有格・目的格)の区別がないなど、文法が比較的簡単だからだ。絵本、歌などを教材に、インドネシアの暮らしを学びつつ、旅行でつかえるインドネシア語を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学部共通科目	国際コミュニケーションスキル	コンピュータ技法1	Microsoft Word とMicrosoft Excel について、在学中の学習や卒業論文作成に役立ち、また、卒業後に社会で要求される技能や関連の知識を身に付けることを目標とする。1年次の全学必修科目「情報処理基礎」で使用するMicrosoft Officeのテキストにおける未習部分を継続して実習する。また学部の特色としてのグローバルな学習内容に対応できるよう、Windows上での各言語の入力方法や文字表示についても学習する。	
		コンピュータ技法2	Microsoft PowerPointを使ったプレゼンテーションファイルの作成とプレゼンテーション実習を行う。表面的な技術のみでなく、プレゼンテーション作成に当たっての内容のまとめ方・相手に受け入れられる提示方法・視覚的に効果的な表現方法等についての知識を習得する。併せて、情報を収集して自分の作成するファイルへ入れて使用する際の著作権の考え方を知る。また、併せてSNSの利用法の紹介と実習、および使用時の倫理(情報倫理)を知る。	
	国際理解科目	国際文化論	本講義はグローバル時代の国際文化の概念とあり方を考察するとともに、具体的な事例を紹介しつつ、文化の国際性という問題に言及する。授業では、ヨーロッパ・ドイツ、東アジア・中国、東南アジア・フィリピンの3地域・3か国を取り上げ、諸地域・諸国の文化的特質を論じ、国際的な文化への理解を深める。それぞれの民族歴史的特質、文化的価値観・社会規範を紹介し、国際文化の多様性、異質性、及び共通性を理解する。異文化を理解し、文化を比較する視点を養うことを目指す。 (オムニバス方式／全15回) (4 佐竹 正明/5回) 東南アジア・フィリピンの文化的特質について講義する。 (26 土屋 勝彦/5回) ヨーロッパ・ドイツの文化的特質について講義する。 (21 黄 名時/5回) 東アジア・中国の文化的特質について講義する。	ｵﾑﾆﾊﾞｽ方式
		キリスト教文化論1	人類の歴史において、音楽と宗教は密接な関係を保っている。音楽には感情を増幅させる働きもあり、宗教を伝える言葉もまた、本来は音声である。声に出して読み、語り伝えるためには、発声、発音、アクセント、リズムなどの音声表現に付随する韻律要素を含んでいる。キリスト教はそのルーツであるユダヤ教と同じように神を賛美し、歌うことを重視してきた。祈りは歌へと通じ、旧約聖書には様々な楽器が登場し、出エジプト記にある「主に向かって歌え」(15:21)は、弦楽器が奏でる詩編の祈りを経て、J.S.バッハに至る賛美の歌の原点にもなっている。嬉しい時も悲しい時も、神に向かって歌った歴史もキリスト教の文化を作り上げてきたのである。本科目では、旧約聖書、新約聖書の内容を伝えるために、音楽がどのように用いられてきたか、礼拝のテーマに基づいて教会音楽を分類し、その役割や機能について学ぶ。	
		キリスト教文化論2	人はこれまで、言葉や絵、文字にはじまり、紙、印刷、写真、録音、映像といったメディア技術の進歩に応じて情報伝達をしてきた。西洋のキリスト教芸術はそもそもの始めから、超越的な神や聖なる存在を、眼に見える形や色彩で表現しうるか、という大きな課題から出発している。キリスト教は、絵の具などの物質的な材料で不可視の霊性をとらえることの不可能性を自覚しつつも、信徒の教化や徳の養成に、芸術や聖堂建築を積極的に利用し作品として生み出していった。中世から近世の作品に描写されている芸術表現の歴史を辿ることで、そこにはリアリズムを求める立体的表現、円環的に配される群像、高度な遠近法が用いられる背景など、絵画技術の進歩をキリスト教芸術から学び知ることができる。本科目ではキリスト教芸術の主題や図像について聖書学から学ぶとともに、作品表現の様式的な変化を生じさせた時代背景や要因についても紹介する。	
		文化人類学	本講義は、人間の社会化の過程を文化を通して理解することを目指す。人間は社会的動物であり、生まれてからその生涯を終えるまで常に他人との関りの中で成長していく。育児、教育、介護、看護などは、他人への関与が集中的に行われる行為である。このような行為は、一方向的だと考えられがちだが、実際は双方向的な行為である。人間と人間が関与しあう行為を、日本の例だけでなく、海外の異文化の事例からも広くとらえて考察する。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学部共通科目	国際理解科目	グローバル社会文化論	世界は国境という高いハードルで相互に隔離されることで固有性を保持してきたといってよいだろう。近年のヨーロッパの経済的統合に端を発した動きは単なる経済協力にとどまらず政治的共同や集団的安全保障等の軍事的側面までを包括的に統合する地域原理となっている。それはその域内の権益保護であると同時に他地域に対する国際問題上の優位性を誇示するものでさえある。しかし、文化は本来的にそのような垣根を越境することで文化の国際性を保ってきた。歴史的に見ても、それはアジアと西欧世界、キリスト教世界と非キリスト教世界、ローマ的世界と非ローマ的世界の関係が文化の交流によって超越されてきたことからもわかるように、歴史と人的交流が国境や民族や宗教を超えてグローバルな文化的世界を形成してきた。現代にいたってそれは情報ツールの飛躍的な発展・変化とも連動し、地域や世代を越えて新たな文化を創造していく源泉となっているのである。そのような社会の中の文化交流と文化変容、そして文化創造のプロセスを分析してみよう。 (オムニバス方式／15回) (1 木村 光伸/8回) グローバル社会の文化に関わる総論と非西欧的世界から見たグローバル文化論について講義する。 (26 土屋 勝彦/7回) 木村の講義を踏まえ、西欧世界や宗教文化の諸問題について講義する。	ｵﾑﾆﾊﾞｽ方式
		日本史概説	外国の文化を尊重するためには、その前提として自国の文化と歴史に理解を深めておく必要がある。本講義では、日本の歴史について政治史を中心に古代から近現代まで概観し、専門科目において文化や対外関係の歴史を学ぶための前提としての歴史的知識を理解することを目的としている。ただ、政権の移動を追う表層的な歴史ではなく、その時代の特色を理解することに主眼を置き、断片的知識として集積されている高校までの日本史で学習した知識の再構成もはかる。	
		日本文化論	国際文化学部の専門科目においては世界各地の社会や文化を学ぶが、その前提になるのは日本人としての日本文化に対しての理解である。日本文化の「文化」としての特質を理解してこそ、世界各地の文化の特質の理解も可能となる。本講義は、親子関係・世襲を中心とした家族・家元文化、日本国内の東西文化の差異とその歴史的背景、韓国との文化比較などの観点から日本文化の特質に多角的にアプローチし、理解を深める。	
		比較宗教論	日本宗教は今日に至るまでどう成り立ったのか。神道、仏教、儒教、道教、民俗宗教を取り上げ、日本の宗教文化の変遷を探る。明治時代以降、日本社会は近代化と共に欧米文化を積極的に取り入れ、その影響は日本宗教にも影響を及ぼした。キリスト教をはじめとする一神教は、日本宗教と比べ、歴史観や自然観と共に大きく異なる。一方で日本宗教もまた、仏教、儒教、道教といった外来宗教の影響によって、土着の伝統と相互に影響を及ぼし合いながら、今日まで形成してきた。宗教について学ぶことは、人間の精神史にもつながり、古代から現代社会を時代背景にして、宗教が文化や政治とどのような相互関係にあったのかを考える出発点にもなる。この科目では比較宗教の視点を通じて、国際文化における日本宗教の語り方を考える。	
		宗教と平和	平和を求めるはずの宗教同士がなぜ戦うのか。戦争を宗教の視点から考察する場合、問題の一つになるのは正義に対する考えである。平和を実現するために、互いに信じる正義を行使した時、どう対立した同士が譲り合い、解決をするか、ということである。正義論はキリスト教のみならずイスラームにも見られる。この問題について、本科目では戦争をめぐる絶対平和主義、正戦論、聖戦論がキリスト教史の中でどのように理解、受容されているのか概観し、キリスト教のみで平和思想を自己完結するのではなく、イスラームとの比較宗教の視点から正義論の相違を紹介する。その上で日本の戦争平和理解の立場を考えたい。戦争をする、しない、という二者択一に解決策を求めるのではなく、他者の認識構造を知ることで、絶対平和主義と正戦論との間に、他者の正義を自己の正義として受け止められる選択肢の可能性を紹介したい。	
		国際環境論	地球は一つの有機的共生体として存在している。その中で生命が生存可能な世界を生存圏というが、その物資的構成や共生的構造はきわめて多様である。産業革命以降の経済的発展と人口の急激な増加の結果、この複雑で多様な世界としての国際環境は大きな変動を強いられ、地球環境問題として現在の人類のあり方に再考を迫っている。本講義では、そのような地球環境の現状と変動のプロセスを明らかにするとともに、人間活動がもたらす地球規模の環境変化について概説する。	
学科専門科目	学科基幹科目	英語演習1	コミュニケーションに役立つ基礎的知識を拡充し、多くのドリル活動を通じて英語表現の習得および英語の4技能(聴解力、文法力、語彙力、読解力)を高めることを目的とする。音声を聞いた後、出てきた英文を何度も繰り返し読むことで、実際に語学留学やスタディツァーなどの学習の基礎となり、海外旅行をする際に有用な日常表現を習得する。	
		英語演習2	コミュニケーションに役立つ基礎的知識を拡充し、多くのドリル活動を通じて英語表現の習得および英語の4技能(聴解力、文法力、語彙力、読解力)を高めることを目的とする。音声を聞いた後、出てきた英文を何度も繰り返し読むことで、実際に語学留学やスタディーツァーなどの学習の基礎となり、海外旅行をする際に有用な日常表現を習得する。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学科専門科目	学科基幹科目	英語演習3	この科目は、コンピューターを使用し、英語のリスニング力の向上を目的とする。主に、ディクテーションを通して、自分の聞き取りにくい英語の音を明確にさせ、基本的な英語聴解力の向上、英語の発音の上達を目指す。ディクテーションを多数こなすと同時に、これまで身に付けた英語の基本的な語彙、文法力を身につけ、さらなる英語力を身につけることにより、英語の運用能力を向上させる。	
		英語演習4	「英語演習3」に続いて、この科目でも、コンピューターを使用し、英語のリスニング力の向上を目的とする。主に、ディクテーションを通して、自分の聞き取りにくい英語の音を明確にさせ、基本的な英語聴解力の向上、英語の発音の上達を目指す。ディクテーションを多数こなすと同時に、これまで身に付けた英語の基本的な語彙、文法力を身につけ、さらなる英語力を身につけることにより、英語の運用能力を向上させる。さらに、TOEICのリスニング問題を通して、リスニングセクションの問題形式をしっかりと理解し、目標をクリアすることができるように訓練する。	
		英語演習5	本講義では、グローバル社会に通用できる人材を育成するために、国際共通語としての英語におけるコミュニケーション能力の育成を目的とする。教材は、コミュニカティブアプローチに視点をおいたテキストを使用し、同じテーマを、Listening、Conversation、Duet、 Language check、Ensemble、Solo等、いろいろな活動を通して行い、社会的な場における英語実践力を育成する。	
		英語演習6	本講義では、グローバル社会に通用できる人材を育成するために、国際共通語としての英語におけるコミュニケーション能力の育成を目的とする。教材は、コミュニカティブアプローチに視点をおいたテキストを使用し、同じテーマを、Listening、Conversation、Duet、 Language check、Ensemble、Solo等、いろいろな活動を通して行い、社会的な場における英語実践力を育成する。英語5の学習で経験した社会的場をさらに拡張して、多文化社会における共通画としての英語についての認識をさらに深め、日本人としての国際英語運用能力を高めることを目標とする。	
		国際関係論	本講義では、国際社会の動きを、冷戦以前の時代と、ポスト冷戦から今日までの時代に分け、それぞれの時代にもっとも大きな影響を与えてきた国際関係上の事象を分析し、国際社会の構造を明らかにしていきたい。事象の分析にあたっては、国際関係論で用いられる基本的な思考軸を提示し、国際関係論の理論が、どのように事象分析に用いられるのかを学びながら、現在の国際社会を理解するための基礎を修得することを目的としたい。	
		国際協力論	世界的な経済格差や貧困問題を鑑み、国際的な協力が必要と考えられる。この授業では、まず、国際協力とは何か、定義を考える。次いで、世界における格差・貧困、南北問題、グローバリゼーション、自分との関わりに触れ、国際協力の必要性を考える。次いで、様々な取り組みとして、国連、日本政府、民間団体による国際協力を考察する。以上の検討を通じ、国際協力の現状、意義、課題を明らかにする。	
		国際文化支援論	国際社会は今やグローバルな連携によって構築されているが、その中に包含されている国家間や地域間の多様な格差は、例えば国際連合などの中での対等性などでは補完されるものではない。現実の経済格差や人権保護の差あるいは教育や文化の受容における格差などの問題が山積する国際社会にあって、それぞれが独立した国家であり地域であるという理由で相互に不可侵あるいは無関心であることは許されない。経済のボーダレス化がますます地域格差を大きくしているグローバル社会であるからこそ、積極的な地域間の文化支援の仕組みの確立と現状に即した支援のあり方が求められる。では具体的にどのような対応が可能なのか。受講者自らが考え、行動の契機となるよう、多くの事例を紹介しつつ講義を展開する。	
		国際地理論	グローバルな視点で地域文化を考察するためには地理的視点の理解が不可欠である。それは単に地域の相対的な位置関係を知ることにとどまらず、地域間において歴史的に生起した多様な交流や相互関係、さらには文化摩擦等についての学際的な状況把握と評価が求められるのである。いわゆる国境は民族的・歴史的・政治経済的産物であり、支配被支配の関係をも反映しており、国あるいは地域を固定的に考察する原点ではあるが、現代の国際環境はそれらを越えて、人的・文化的交流の軌跡として捉えられるのであり、本講義ではそのような地理感覚を醸成することを目標とする。	
		開発社会学	発展途上国の発展・開発を社会学の視点から考察する。まず、3つのアプローチを検討する。1つ目は後発性利益論の立場で、近代化理論・新自由主義、グローバリゼーション論を含む。途上国は自動的に発展するという視点である。2つ目は従属論の立場で、途上国が先進国経済によって支配されるという視点である。3つ目は内発的発展、社会発展の視点で、途上国の人びとが主体となる発展のあり方を探求する。検討の後、東南アジアの途上国フィリピンを対象に、発展・開発を考察する。	
		文化交流論	グローバル社会は国家と国家が対峙するインターナショナルな関係を超越して情報の交流が発生する世界である。とりわけインターネットの情報網が世界を網羅的に一つのネットワークとして構成している現状は、地域文化の固有性やそれぞれの地域における個々独自な文化をつなぐ本来の歴史的過程なしに、文化の接触・交流を促進し、相互に文化的な変容を引き起こす。そのような現代社会にあって、多様な地域を結ぶ文化の交流を、多文化理解や異文化の尊重という文化交流本来の道筋として実現するために必要な文化定義や交流の意味を考察するとともに、日本で経験することのできる多文化接触、多文化交流の実情について触れる。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学科専門科目	学科基幹科目	国際社会学	私たちは日々、外国製の商品を使い、外国人とコミュニケーションをし、外国文化を体験することが当たり前になっている。ところで、これらはなぜ国境を越えてやってきたのだろうか。国際社会学では、学生が、グローバリゼーションという社会現象を学ぶ。まずグローバリゼーションを捉える視点を検討したのち、ヒト・モノ・カネのほか、文化や情報などをトピックごとに取り上げ、その背景や社会的な影響を検討する。	
		マイノリティ論	本講義は、各国家および地域におけるマイノリティの人々について、国家の国民統治政策との関係、および社会での権力関係の中で、その社会的位置に主眼を置き、考察しようとするものである。対象とするマイノリティは、多文化国家、多民族国家等の中で、少数派民族に属する人々が主になる。また、マイノリティを社会的少数派ととらえることにより見えてくる少数派民族以外の人々の存在にも注目し、「マイノリティ」の意味の考察をしていきたい。	
		ジェンダー論	「男性は外で仕事をし、女性は家庭を守る」というような性別にもとづく役割分業を聞くことがある。ところで、こうした性にもとづく役割分業は、それ自体「正しく」、「当たり前」のことなのだろうか。ジェンダー論では、学生が、性に基づく役割分業を再考するジェンダーの社会学を学ぶ。ジェンダーの視点を検討したのち、専業主婦や家事・育児・介護、生殖医療、グローバル化といった社会現象をジェンダーの視点から解読する。	
	国際文化協力展開科目	国際移民論	国境を越えたヒトの移動がなぜ発生するのか。またヒトが国境を越えて移動すると、受け入れ社会および送り出し社会に、どのような影響がみられるのか。国際移民論では、学生が国際移動のメカニズムとその影響を学ぶ。前半では、第二次大戦前後の国際移動の歴史と戦後の国際移動の形態の多様化（労働移民、難民、非合法移民、高技能移民など）を検討する。後半では、国際移動を形づくるさまざまな社会制度に焦点を当てる。	
		日中関係論	日中の相互理解を深めるには、両国の摩擦の原因となっている歴史認識、領土問題等に関して真摯に検討することが不可欠である。現在の日中関係が良好ではない原因の一つに、日本において中国側の論理が十分に知られていない点があげられる。本講義では、中国人知識人の日中関係に関する論考を学生とともに考察し、日本側の代表的な見解と比較対照することで、日中関係を多面的に捉える能力を養成する。	
		アジア政治論	アジアの国ぐにの多くは、第二次世界大戦後に政治的な独立を達成した。植民地支配や東西冷戦によって「人為的」に国境線が引かれ、多様な民族・宗教が共存するアジアの国ぐにでは、国家統一や国民統合の過程で、人権や自由が制限されたり、紛争が発生したりすることも少なくない。アジア政治論では、東南アジアを中心に、歴史的背景や現状、政治的課題、日本との関係を考える。	
		国際機構論	本講義では、国際機構の機能と役割について考察する。はじめに、国際社会の基本的なアクターである国家と国際機構の関係について学ぶ。そのうえで、世界が直面する個別の課題ごとに、どのような国際機構が存在し、いかなる取り組みをしているのかを検討する。最後に、現在の国際情勢のなかで、国際機構の抱える課題と国際機構に期待される役割、そして日本の果たすべき役割について考察する。	
		平和学	「平和」は必ずしも「戦争」の対立的概念ではない。とくにグローバル化しつつある世界においては「平和」は「戦争」という抗争的関係の中で語られるとともに、「貧困」「差別」「ジェンダー」「生活難民」などとの関係で理解されることが必要である。日本ではさらに「家族」「高齢社会」「少子化」「過疎」などといった現在社会の課題と一体的に語られねばならない。これは現代における「平和」という用語がきわめて広範な対象を考察させるものであるということであり、人間の文化的な在り方そのものが問われているのだということが理解される。本講義ではグローバル社会における「平和」の多義的理解に迫る。	
		農村発展論	発展途上国の農村では、土地や水、森林といった自然資源の過剰な使用とその枯渇が大きな問題となっている。農村発展論では、東ティモールやインド、バングラデシュといったアジア諸国の事例を中心に、発展途上国の農村や農林水産業、農業経済の現状と課題を講義する。学生は、途上国農村における開発や発展、そこに暮らす人々の生活と彼らが直面する課題、その解決方法について学習する。	
		アジア経済論	この講義は、アジア地域の経済的な変化を概観し、その認識を深める事を目的としている。中国や韓国、ASEAN諸国の経済的台頭などアジア経済は世界の成長センターとして機能してきたが、1990年代後半には経済危機に直面したし、アジア経済の牽引車であった日本や中国の経済は大きな転換期を迎えており、従来型の成長路線を選択することは困難な状況である。この講義を通してアジア地域の将来的な方向性を検証する契機としたい。	
		国際企業論	現在、BOP（Bottom of the Pyramid；底辺層）を対象としたビジネスが注目を集めている。以前はビジネスの顧客とは考えられなかった途上国の貧困層を対象にして、果敢にビジネスを挑み、市場を開拓している企業が現れているのである。国際企業論の授業を通じて、学生は、BOPを対象としたビジネスで途上国はどのように変われるのか。貧困層を対象にビジネスを行うための工夫とは何かといった課題について学習していく。	
		文化変容論	本講義では、個人が持つ文化的特徴が、個人の移動等による生活環境の変化等に伴い、どのような変化を遂げるのかを、クレオール（土着化による文化変容）化を観察することによって考察していきたい。対象とするのは、ディアスポラにある人々、移民として他国に渡った人々、文化的支配を受けた人々等である。文化変容が、どのような環境で、何を条件におこっていくのかを、事例をみながら分析をおこなっていきたい。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学科専門科目	国際文化協力展開科目	アジア地域研究1	本講義は、アジア全域を対象に、その国家および地域の持つ特性に注目し、その特性を地域の政治、経済、社会的背景を探ることによって、分析をすることを目的とする。分析方法は、実証的データおよび、記録されたドキュメント、映像等による分析による。事実をどうとらえ、どう考察に導くかを、実際に作業すること中心に授業を進めていきたい。	
		アジア地域研究2	アジアに位置する日本で暮らしてはいても、アジアは近くて遠い存在かもしれない。アジア地域研究では、身の回りのモノ(具体的にはエビ、バナナ、ツナ缶、パーム油、コーヒー、チョコレート、野菜、スニーカー、ジーンズなど)がどのような環境でつくられているか、日本に暮らすアジアの人びと(研修生、看護師・介護福祉士、難民など)がどのような生活をしているのかを知り、アジアと日本の関係を考える。	
	国際文化支援展開科目	文化マネジメント論	人が他者と社会関係を取り結ぶとき、そこにひとつの文化を持った社会が存在する。ところで、私たちはどのように他者と社会を形成しているのだろうか。文化マネージメント論では、日常生活で私たちが経験するさまざまな社会現象がなぜ発生するのかを考えながら、社会の成り立ちを考える。学生は、社会現象の「しくみ」を理解することで、自分たちがどのように日常生活を「営んでいる」のかを考える。	
		多文化共生社会論	1970年代後半から日本に移住し、生活する外国人が増え、現在、その数は200万を超えた。外国人居住者の増加に伴い、日本社会は多文化的な社会となった。自治体も異なった文化的背景を持つ人々の文化を尊重し、権利を保障し、共に生きるという「多文化共生」という理念に基いて、外国人を支援するようになった。本講義では多文化社会の成立経緯、現状、多文化共生の理念に基づく施策、諸団体の取り組みを取り上げ、考察する。	
		異文化コミュニケーション論	講義は、文化とコミュニケーション、特に、異文化間関係に及ぼすコミュニケーションの要素に焦点を当てる。新聞のジャーナリズムや映画や広告などのマスメディアで見られる関連したイメージや規則習慣の文化的分析を通して練習する。また、異文化間コミュニケーションの原則を発展応用して、他の事例研究を行う。英語の談話能力の強化を究極的な目標とする。	
		多文化教育論	今日の世界はグローバル化、ボーダーレス化の時代を迎えており、世界的規模での人の移動が活発になっている。どの国も内なる国際化が進み、今後予期される多文化社会においていかに共生するかという課題に直面し、共生への教育(多文化教育ないし異文化間教育)をいかに構築するかが重要課題となっている。この授業では、ドイツ、アメリカ合衆国、イギリス及び日本における共生への教育の実態とその課題について考察する。	
		世界遺産と保全	世界遺産とは地球の歴史と人類の歴史が創り出した壮大な記念碑である。われわれが見ることの出来る文化の多様性の根源はこのような歴史的認識にあり、ユネスコは、人類が共有する財産であり未来へと継承されるべき遺産としてこれらを認定し、人類が全体としてこれらの保全に当たることを喚起している。この認識は人間文化の地域性と多様性を考察するに際して不可欠のものであり、同時にそれらの保全を考察し実践することが現代人には求められているということを、具体例を提示しつつ紹介し、文化理解の基盤としての世界遺産に迫りたい。	
		国際環境文化論	国際環境論で議論した人間の手による自然の改変の問題は、変化しつつある自然による人間自身の生存原理の変革を求められる。それは人類の自己家畜化ともいえる文化的生存基盤の変容であり、具体的には地域固有あるいは民族固有の文化現象の多様化と類型化の中に認められる。本講義ではアジア、中南米の少数民族文化と自然環境の関係を主たる題材として、人間文化の環境適応について論じるとともに、これからも変動を続ける国際社会の中で多様な文化がいかにすれば存続可能なのかということについて事例紹介を付して考察する。	
		国際人権論	私たちの暮らす社会では、すべての人々が平等であることが望ましいと言われている。ところが、決して平等な立場に置かれていない人々が、社会には数多くいる。国際人権論では、学生が、グローバル化時代における人権問題の構図と人権保護のあり方を考える。まず人権保護の歴史とその国内的・国際的な保護のしくみを概観する。続いて、生命・女性・子ども・先住民といったトピックごとに、問題の所在と解決策を具体的に考える。	
		比較地域生活史	人間の文化は多様である。それらは地域固有の環境、隣接する地域の文化的状況などと密接に関係づけられて個々の文化を形成している。その文化が具体的に見えるのはそれぞれの民族の生活のあり方の中においてであり、それを固有の生活史として捉えることで、この講義は成立している。多様な世界の中で多様に固有に、そしてばらばらに独立して存在するように見える民族生活史が、実際には多様な連携の中で形成され特徴づけられているということを、日本、アジアを中心とした事例をもとに概説する。	
		企業文化論	地域や消費者、あるいは国際間での好ましいイメージを形成する意図で、企業が文化活動に参加することを企業メセナあるいはコーポート・カルチュアと呼ぶが、企業文化のあり方は文化的ビジネス、文化的催事、出版・教室など広範な形式で展開され、また芸術・文化・スポーツ・福祉・環境・自然など多様な分野において企業の経済的利益を社会に還元する企業姿勢を指すことが多い。文化そのものを事業の対象とする場合や企業イメージを向上させ、収益を社会に還元するといった側面を示しながら、文化を演出する場合がある。このような企業活動を紹介しつつ、現代の企業活動が持つ文化的重要性を論じる。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学科専門科目	国際文化関連科目	比較文化・社会論1	ヨーロッパ言語語圏の文化・社会と日本文化・社会のあり方を比較考察する。具体的に一例をあげれば、日本におけるドイツ文学翻訳の歴史を辿り、また日本の詩歌の独訳と英訳を比較しながら、借用語としての翻訳語がどのように受容され変容されていったのか、また言葉の背景にある社会的歴史的文脈が、日本あるいは欧米の風土に根付いていったプロセスを考えることにより、日独ないし日欧の思考方法の差異と共通性を明らかにする。	
		比較文化・社会論2	本科目では、西洋社会と日本社会の表層的な比較といったことはしない。テーマは、今日世界を席巻している西洋近代科学文明の淵源を探ることである。それは17世紀のヨーロッパに端を発したが、現代の日本もそれを受け入れ発展している。視点は、文化としての科学である。なぜ、地球の一地域で発生した「文化」が、かくもグローバルになるに至ったか。どうして我々日本人はそれを生み出すことができなかったか。ここにこそ本質的文化比較論がある。	
		メディア文化論	メディア文化論は、さまざまなアプローチ（理論と方法）によって探究される学際的な学問領域である。本講義では「メディアはいかにしてリアリティを構成するか？」という問題意識を出発点として、メディアをめぐる理論、歴史、現状と課題について学ぶ。具体的には、マクルーハンやベンヤミンなどのメディア論の理論的源泉に触れたのち、宗教改革と印刷技術、大衆とマスコミ、メディアイベントといったテーマを扱う。また、SNSと友人関係、アラブの春、ネット右翼、フラッシュモブといった近年のメディア現象を取り上げ、そこで生起する社会意識や人びとの心理について考察する。	
		観光文化論	本授業は、アジアをはじめ、欧米各国の国際観光を概観し、日本の観光を対比的に考察しながら「観光文化」について理解を深め、併せて、観光概念や観光形態の歴史的変化についても学ぶことを目的とする。また、人の国際移動である移民や留学、国際協力についても観光の視点から捉える。	
		現代アジア文化社会論	東南アジアの島嶼国・フィリピン共和国を中心にして、現代アジアの文化・社会を論じる。具体的には次の項目を取り上げる。フィリピンの概要、民族分布、言葉、教育制度、文化的価値観、社会規範、市場（いちば）、ジェンダー、日本との関係である。歴史的背景にも適宜言及しつつ、現代フィリピンの文化・社会に関して理解を深める（異文化理解）。日本とも比較し（比較）、日本との関係にも言及し（日比関係）、受講生の関心を高めていく。	
		韓国文化社会論	朝鮮半島は日本に最も近くに位置する隣人であるが、歴史的経過、とりわけ明治以降の歴史認識などをめぐって相互理解が著しく欠落しているのが現状である。すでに日本による半島支配を現実として知らない世代が中心を占める時代となって、歴史を知らないことに起因する反韓国意識やテレビドラマや芸能のみを知識の源泉とする韓流ブームなど、相互に対等な文化交流とは趣を異にする社会反応が日本人の韓国事情理解の中心を占めているのが現状であろう。本講義では韓国社会の歴史と現状を正確にとらえ、韓国住民の社会心理的な意識などにも触れつつ、日本と韓国の好ましい文化交流のあり方などにも言及する。	
		アメリカ社会文化論	日本とアメリカは、1853年のペリー来航以来150年以上の付き合いがあり、特に第2次世界大戦後の60年間は、政治、経済、科学技術、文化、日常生活に至るまで、あらゆる面でアメリカは日本に大きな影響を与えてきた。しかし我々が得ることの出来る情報の中には、我々の日常感覚からすると不思議に思えるものが少なくない。例えばアメリカは世界の主要な地域に自国の軍隊を駐留させている。銃犯罪が頻繁に起きているのに銃規制強化の動きがない。4年毎の大統領選挙の党大会はまるでお祭り騒ぎである。この講義は、アメリカ社会と文化を理解するための基礎を習得することを目標とする。	
		アメリカ政治経済論	アメリカは政治的には民主主義の代表的な国であり、第2次大戦後の米ソ冷戦に勝利し、いまや唯一の超大国としての地位を維持している。 2001年の9月11日のテロ事件の後は、アフガニスタン、イラクとテロ支援国家の体制を打ち砕き、「自由と民主主義を守るため」世界の対テロ戦争の先頭に立っている。しかしアメリカは単に世界に対する市場として存在したのでなく、戦後日本の政治制度、教育制度、租税制度など政治、経済、文化、社会のすべての面で日本に影響を与えてもきた。大きな変革が求められる日本にとって、アメリカの政治経済がどのような価値観、文化、政治制度、社会構造を基盤としてきた歴史とアメリカが抱える現代的課題について学ぶことが本講義の目標である。	
		ヨーロッパ文化総論	ヨーロッパの多様な文化を貫く原理と地域的諸問題を紹介し、その特質に言及する。具体的にはヨーロッパの映画作品を素材として、ヨーロッパ地域の文化的特色と独自性を考察する。具体的には、ベルリンを主題とする映画作品から、ドイツ現代史の諸問題を地域文化表象の視点から考える。東西両ドイツの歴史、第二次世界大戦時のナチズム、オーストリア併合、ベルリンの壁、また壁崩壊後の状況などについて知見を深め、中欧の地域文化の在り方と将来像を探る。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学科専門科目	国際文化関連科目	環太平洋地域文化論	環太平洋地域は日本に最も密接な隣接地域であるが、地中海文化を除けば、海洋に沿った諸国の全体をひとつの地域としてとらえる慣習のなかったこれまでの地理的概念では十分に理解されてこなかった。この講義では歴史的に人間活動の交流が疎遠であったと考えられてきた環太平洋に光を当てることによって、民族文化交流のあり方を考察するとともに、環太平洋という一つの概念で括られた人間社会の文化的・経済的・社会的諸関係の現代的意義について紹介し、日本文化の将来にとって環太平洋地域がいかに重要な地域的概念になるのかを詳述する。 (オムニバス方式／全15回) (1 木村 光伸/8回) 環太平洋地域の概説と、アメリカ地域とくに中南米における太平洋地域における活動や環太平洋観について講義する。 (2 増田 あゆみ/7回) オセアニア・アジア地域の視点からの環太平洋文化論を講義する。	ｵﾑﾆﾊﾞｽ方式
		イスラム文化圏論	現在、世界のムスリム(イスラーム教徒)の人口は十数億人と推定されており、年々増加している。このような世界の状況を踏まえると、イスラームに関する様々な事柄について理解を深めることは今や必須となりつつある。本講義では、イスラームに関連する幾つかのテーマ(アラビア語(文字)、イスラーム法、学校教育、「アラブの春」、経済状況など)をとりあげ、ほかの地域の事例とも比較しながら、「イスラム文化圏(イスラーム世界)」の特徴について考察する。	
		開発経済学	世界において経済的格差や貧困問題が依然として解決されていない。経済の発展・成長が急務の課題である。そこで、本講義においては、経済学の分野で経済発展・開発の問題がどのように論じられてきたのか、歴史を振り返りつつ、現在の経済・開発問題まで考察する。具体的にはアダム・スミス、マルサス、リカードといった古典派、リストの国民経済学、マルクス、レーニンの資本論・帝国主義論、そして、近代化論、従属理論、内発的発展論・社会開発論などを論じる。	
		国際福祉論	世界を見渡せば、貧困や飢餓、格差といった問題が各地でみられる。そうした問題に福祉的なアプローチで迫る研究分野が、国際福祉である。国際福祉論では、世界の福祉の現状と課題を考える。まずは国際福祉の理論を概観する。続いて福祉的な課題をトピックごとに取り上げ、その問題の特徴や背景を講じる。最後に、今後の国際福祉の課題をまとめる。授業を通して、学生は国際的な福祉問題の特徴を把握し、その解決策を探っていく。	
		NPO・NGO論	国際化、グローバル化がますます進展する現在、貧困、開発、環境、人権、紛争、労働、女性、子どもなどは、一国内にとどまらない地球的問題である。国家や企業の利益に縛られず、広く社会のために問題解決に取り組む存在として、NPO(非営利組織)やNGO(非政府組織)が注目されている。NPO・NGOの歴史、実際の活動を学びながら、その役割と課題を考える。名古屋で活動するNPO・NGOスタッフをゲストスピーカーとして招く予定である。	
		英米文学概論1	アメリカの詩と小説を読む。小説については20世紀の作家の短編小説を主として選ぶ予定。毎回、取り上げる作品の時代と文化背景についての解説を交えながら、作品を読み進めていく。取り扱う作品とその周辺問題を起点として、文学の主要概念に言及する。	
		英米文学概論2	イギリス文学の詩、小説、劇の重要な作家を紹介する。毎回、取り上げる作品の時代と文化背景についての解説を交えながら、作品のサンプルを読む。取り扱う作品とその周辺問題を起点として、文学の主要概念に言及する。	
		英米文学講義1	この講義ではイギリスおよびアメリカにおける文学の背景についての基礎的学習をする。文学の背景をなす歴史的あるいは文化的な要因は文学を読み解くうえで重要であり、現代英語そのものおよび現代文学を理解するに際しても不可欠である。さらに英米文学を考察する前提として、ギリシャやユダヤの文学、歴史、文化などが重要な役割を果たしていることにも注目し、広くヨーロッパの文化的土壌の上に開花した英米文学の本質について学習させる。	
		英米文学講義2	この授業では英米文学の持つ宗教的・倫理的側面に焦点を当てて講義を進める。とりわけ英米文学の中で常態的に登場する場面や会話におけるキリスト教的思索・文章法・警句を前提としたやり取りなどを考えると、西洋世界の宗教史や近世近代の倫理観を抜きに語ることは不可能である。さらに英米文学の周辺に位置し英米文学に大きな影響を与えているマイノリティ文学についても論究する。	
		英文学史	英文学に関する基本的教養を身につけることができるように講義する。イギリスの文学がどのように発展し、イギリス人が文学をどのように楽しんできたか、イギリス人が教養を高めるのに文学がどのように貢献したか、こういう視点で文学史をたどる。	
		米文学史	アメリカ史やアメリカ文学に関する理解は近年の30年において大きく変貌してきた。とくにヨーロッパ的な精神や習俗がどのようにアメリカに侵入し、定着したのか、あるいはヨーロッパ文化とアメリカ先住民文化の関係がどのようにアメリカ文学に影響を与えたのか、など、多くの新たの問題点が生じており、アメリカ文学の歴史は個々の文学作品の評価を越えて、アメリカ文学とは何かという根源的な問いかけに対する回答を迫っているのである。授業ではいくつかの作品に接しながら、受講生自身がディスカッションを通してアメリカ文学の歴史を追体験することになる。	

科目区分		授業科目の名称	備考	備考
学科専門科目	留学単位振替科目	海外事情1	本学部の国際理解教育に関わるカリキュラムポリシーに沿って設定した学修プログラムにより海外の国際文化・交流機関や施設、あるいは国際協力・支援機関や施設等における研修に参加してその成果を取りまとめたもの、もしくは休暇期間中等に本学の海外協定校との短期留学プログラムに参加し、語学や現地の事情を中心とした授業・研修を受講した学生に対して、事前事後学習及び現地学習の成果にもとづき、単位を付与する。	
		海外事情2	本学部の国際理解教育に関わるカリキュラムポリシーに沿って設定した学修プログラムにより海外の国際文化・交流機関や施設、あるいは国際協力・支援機関や施設等における研修に参加してその成果を取りまとめたもの、もしくは休暇期間中等に本学の海外協定校との短期留学プログラムに参加し、語学や現地の事情を中心とした授業・研修を受講した学生に対して、事前事後学習及び現地学習の成果にもとづき、単位を付与する。	
		海外事情3	本学部の国際理解教育に関わるカリキュラムポリシーに沿って設定した学修プログラムにより海外の国際文化・交流機関や施設、あるいは国際協力・支援機関や施設等における研修に参加してその成果を取りまとめたもの、もしくは休暇期間中等に本学の海外協定校との短期留学プログラムに参加し、語学や現地の事情を中心とした授業・研修を受講した学生に対して、事前事後学習及び現地学習の成果にもとづき、単位を付与する。	
		海外事情4	本学部の国際理解教育に関わるカリキュラムポリシーに沿って設定した学修プログラムにより海外の国際文化・交流機関や施設、あるいは国際協力・支援機関や施設等における研修に参加してその成果を取りまとめたもの、もしくは休暇期間中等に本学の海外協定校との短期留学プログラムに参加し、語学や現地の事情を中心とした授業・研修を受講した学生に対して、事前事後学習及び現地学習の成果にもとづき、単位を付与する。	
	演習科目	国際協力実践論1	国際協力実践論は、学生が異文化を体験しながら、日本の国際協力の現場を学ぶための授業である。夏季休暇中にスタディツアーを実施し、アジア諸国を訪問し、現地で活動するNGOや国際機関などでインタビューや作業体験を行う。国際協力実践論1は、そのために訪問先に関する事前学習を行う。授業では、学生が個人やペアおよびグループで協同して事前学習に取り組み、海外フィールドワークのための準備を行う。	
		国際協力実践論2	国際協力実践論は、学生が異文化を体験しつつ、日本の国際協力の現場を学ぶための授業である。本講義は夏季休暇中に行われるスタディツアーと連動して行われる。スタディツアーでは、実習先の社会や経済、訪問先のJICA、NGO、民間企業などでインタビューや作業体験などを行う。国際協力実践論2では、学生は個人やペア、グループで協同して、研修成果の発表会と報告書の作成を行い、スタディツアーでの学習成果をまとめる。	
		国際協力基礎演習1	国際協力基礎演習1では、学生が専門演習に進むためのアカデミック・スキルを習得することを目指す。アカデミック・スキルとは、大学で学問に取り組むときに必要となる基本的な技能と捉えられる。このスキルを身につけるために、国際協力学科に関連するテーマ（国際協力や異文化理解、多文化社会など）を題材として、学生は個人やペア、グループ単位で、文献購読やプレゼンテーションなどに取り組む。	
		国際協力基礎演習2	この授業では、国際協力基礎演習1に引き続き、学生がさらなるアカデミック・スキルの向上を目指す。国際協力学科に関連する題材（途上国と開発、国際援助、東南アジアなど）に沿って各自がテーマを考えて、文献等によって情報収集・整理・分析を行いながら、他の履修者に対して発表を行う。発表後は、教員および他の履修者のコメントを参考に発表内容を改善して、最終的には報告書の形で学習成果をまとめる。	
		国際協力演習	国際協力に関する学習の総括的なまとめとして学習者各自がテーマ（課題）を設定し、先行研究の検索・評価、対象とするテーマに即した資料収集、必要に応じての現地調査などを行い、設定した課題に関する取りまとめを行う。これらの成果は第一段階として研究概要の形式で公表され、また発表会の場で学習者間および学科教員の相互評価・批判を受けることにより、さらに精緻なものへと改善され、最終レポート（卒業論文）として完成させる。担当教員はその一連の自己学習過程を進行管理し、適切な示唆を与えつつ、学習者自身が一つの課題を完成させるための個別指導を行う。	